
想 -ソウ-

朱凧

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想 - ソウ -

【Nコード】

N4841F

【作者名】

朱凧

【あらすじ】

過去の自分の正体知らない妖・秋雨あきぐめと、異例の早さで巫女姫の責を負うことになった恵巳えい。互いの責を果たしながら、ふたりは想いに気付いていく。微恋愛有の和風ファンタジー。

巻幕：巻章

泣声を、聞いた気がした。

小さな命が生を受けた。
待望された通りの女児。

期待と責務を背負い、この先を生き行く為に生まれて来た。
青みがかつたようにさえ見える濃灰の髪 of 青年が、おくるみの中の赤子を覗き込み、次いで傍らに座るまだ歳若い女性を見て、困ったように笑う。

「お主が母とはなあ」
同じような困った顔で、女性も笑った。

「全くですわ。少しも実感がありませんの」
濡れた黒い瞳が青年を見つめる。その言葉に偽りは無いが、不安を抱いていないことも計り知れた。

代々続いてきたことだ。そして代々の母が、彼女と、彼女の児を支えることが確定している。

また、彼女と彼女の児には、彼がいる。
「秋雨」

女性が青年の名を静かに呼ぶ。赤子を眺めていた青年はゆっくりと顔を上げ、彼女を見た。

女性は目を細め、表情を和らげて、青年の髪よりは薄い灰色の瞳を真っ直ぐに見つめた。

「名前を、まだつけていないの」
「なに故」

「あなたと、相談したかったから」
凜と女性の声が、板造りの部屋に響いて透る。

青年 秋雨は、情けなく眉尻を下げて、癖のある髪をがしがしと掻き回した。落ち着かなげな眼が女性を伺い、「八千代」と彼女の名を呟いた。

「……話を、聞くだけだぞ」

「ええ」

「俺はお主らに仕えるだけだ」

「判っていますわ。聞いて下さるだけでいいの」

秋雨を制して八千代が言い、秋雨は渋い表情のまま、「……承知」俯くようにして頷いた。

八千代は花が綻ぶようにして笑う。少女のように両の手を合わせ、嬉々と口を開いた。

「恵巳、というのはどうかと思うのです」

「えい」

身に染み込ませるように、秋雨が繰り返す。

「^{すで}に恵まれた、という意味です」

いかがかしら、と八千代が秋雨を窺い、秋雨は口許に穏やかな笑みを浮かべた。

「良い名だ」

いずれ赤子は責務を負うことになる。そのときまで、またそのあとも、恵まれたと感じていられたら。

秋雨は小さく握られた赤子の手を取り、身を屈めて、その手を自らの額に当てた。

「恵巳。八千代の娘。我は秋雨。其を護るもの。この爪、この牙、其の為に捧ぐことを、我が首にかけて誓う」

低い秋雨の声にも赤子は安らかに眠ったままで、その様子に安堵し、秋雨は赤子の手を戻した。

赤子の額に軽く触れ、優しく撫でる。

「愛しいものだ」

似ている。囁くようにして呟いた秋雨に、八千代は姿勢を正し、深々と頭を垂れた。

ぎよ、と秋雨は肩を跳ねさせた。

「や、八千代。お主が俺に頭など下げてはならぬ」

「頼みごとをするのに頭を下げないのは無作法ですわ」

「人の世の習わしではそうだろうが、俺は自らの性も判らん妖だ。お主らに仕える為におるのだ」

「関係ありませんわ」

ぴしゃりと言って、八千代は正面から秋雨の双眸を見据えた。

改めて、額着くようにして頭を下げる。

「恵已を、頼みます」

「……承知した」

「と、いうのがお主が生まれたときの話だ」

風が渡り、葉擦れの音が響いている。

秋雨の隣で膝を抱えていた恵已は、丸く大きな目をくりつと動きました。

「だから、俺にはお主を護る義務がある。つまり、危険から護るだけでなく、危険に近寄らないようにするのも俺の義務だ」

判るか？　そう告げる秋雨に、恵已はむくれたように頬を膨らませた。

ごつごつした岩の上に秋雨の羽織を敷き、その上に座った恵已の足には履物がなく、素足には乾いた土が僅かに付着している。

反省の兆しのない恵已の真っ直ぐな黒髪を梳いてやり、秋雨は軽く息を吐いた。

「……あまり心配をかけるな」

「真っ直ぐ追っかけて来たくせに」

見張っていたのだらうと暗に呟く。幼い子に似合わないその声音に、秋雨は苦笑した。

いつの代の子らも、一度は今の恵已のように、しきたりや作法の

勉強に辟易し、脱走を図る。

そして皆、血は争えないのか、同じ場所に辿り着く。集落を護るように、または隠すように様々な木々の林立する中で、突如場が開け、大岩に陽光の降り注ぐ場所。この場所の気が呼ぶのかもしれない。

それを知っていることも手伝って秋雨は迷うことなく彼女らの元へ来られるのだ。しかし発見されて、逃げようと泣きつこうとしなかったのは、恵巳が初めてだった。

秋雨は恵巳の顔を覗き込む。

「恵巳は聡い子だな」

「……」

「似ている」

「母さまに？」

何気なく口をついて出た言葉に、恵巳が反応を返す。問われて、途端に、頭の中で曖昧ながら像を結んでいた姿が、弾けるように霧散した。

「……あ。誰、だろうか」

「なにそれえ。あき、見た目よりずっとおじいさんだから忘れたの？」

無邪気に言われて、秋雨は苦い笑みを浮かべるよりない。実際、恵巳が生まれた頃と一切変わりのない姿は、果たしていつから変化していないのかも判らず、隔絶された集落でただ責務を全うする生活は、時間の感覚をばやけさせた。

「そうかも知れぬ」

「あきの生まれたときはどんなだったの？」

「……判らんのだ。それが判れば、性も理解出来るのだが」

がしがしと髪を掻き回した秋雨に、恵巳は不思議そうな顔をする。脚を伸ばし、藤色の振袖の裾を整えて、「あきさ、」と囁くように言った。

「よくその『さが』が判んないって言うよね」

「妖にとって元の姿からどのような経緯で今の姿になったのかということ、存在意義だからな」

「……？」

「ああ、ええと、今ここに居る意味、ということだ」

「あきの居る意味は、わたし達を護ることじゃないの？」

幼いが故の、一直線な質問。

そういうことではないと言つのは簡単だが、そういうことだと思
い定めて生きて来たのも事実だ。

「……そうだな」

濃紺の腰帯に佩いた愛刀に触れ、秋雨は肩の力を抜いた。

いつでも根底には妖の性が不明であることに不安があるが、それ
でも延々と『彼女』達を護つて来たことに偽りはない。

そしておそらく、これから。

「戻るか」

秋雨が立ち上がると、聞き分け良く恵已もひょいと岩の上に立ち、
敷いていた羽織の砂塵をぱんと音を立てて払った。

突き返すという表現がぴったりな動作で秋雨に返すと、恵已は黒
目がちの目で秋雨の顔を見上げた。

「わたし達を護るの、イヤなの？」

「……」

恵已の唇から紡がれた言葉が一瞬理解出来なかったほど、冷たい
衝撃が走った。

「まさ、か」

声が掠れる。

そんなことは有り得ない。何故ならばそれは秋雨の責務なのだか
ら。

それは秋雨が果たさなければならない、約束だ

誰との、だ……？

思わず眉根が寄る。きっとそれは、知らない。秋雨の知らない元
の性の頃にでも、誰かと契つたのだろう。

そんな秋雨の表情と戸惑いを見て取ったらしい恵已は、紅葉のように小さな両の掌を差し出した。

「あき、帰ろ」

素足の彼女に、また土の上を行かせるわけにはいかない。秋雨は「……うむ」かろうじて微笑んで、岩の上の恵已に背を向け、背後に手を伸ばす。

恵已の身体が、その背に覆いかぶさる。

小さな身体だ。歴代の娘達と比べても、小さい方ではないだろうか。

軽い重みを背負いながら秋雨が歩き出すと、恵已の腕がぎゅう、と秋雨の首に巻き付いた。

「イヤだったら、言つてね」

「……そのような、ことは」

「わたしは勉強がイヤになったら、こうやって抜け出せるけど、あきは出来ないもんね」

「……」

幼子に見合わない憂いたような物言いに、秋雨は口をつぐむ。

それを言うならば、恵已こそ本当には逃げられない責を負っているのだ。

勿論、そんなことを恵已に言うほど秋雨は愚かではないし、それよりも恵已の優しさが嬉しかった。

「恵已」

「ん？」

「心配させてすまない。だが、本当に、俺はお主から離れたいと願ったことは、一度とて、ない」

首だけ振り向いて、偽りない気持ちが伝わればいいと、可能な限り真摯な思いで告げた。

「本当？」

恵已は疑いの裏に、喜びのような表情を滲ませて問う。その顔に、どうやら伝わったようだとなり、秋雨も表情を和らげた。

「無論だ。俺はお主に嘘はつかん」

「……………よかったあ」

息を吐いて、恵巳は秋雨の背にぺたりと張り付いた。それから、ふふ、と小さく笑う。

訝って秋雨がどうした、と訊ると、彼女は「怒らないでね？」と悪戯っぽく囁いた。

「う、うむ、怒らぬ」

「本当は、あきがイヤだって言ったら、とりあえず殴ってやろうと思ってたの」

「な、なく」

「あ、そのあとでちゃんとあきが自由になれる方法を考えようとは思ってたよ？」

言い訳のように言う恵巳に、秋雨は啞然としてしまう。

聡く賢い子なのに、時折こうして妙に童じみた言動をする。思えば確か、先だって十二の年を数えたばかりだった気がする。

幼子だと思っているのに、認識出来ていなかったようだ。

「……………でも、本当に良かった」

頬を擦り寄せるようにして、恵巳が呟く。

秋雨が眼で訊ねると、恵巳は照れ臭そうに目を伏せた。

「あきがね、迎えに来てくれるって思ってたから、わたし、抜け出したりなんか出来たんだもん」

あきがいなくなっちゃったら、わたしも逃げなくなっちゃう。

そんなことを言って、恵巳は相好を崩す。

その笑みを、秋雨は愛しいと思う。

「あき、一緒にいてね。あきがイヤになるまで」

「では、俺が嫌にならないようなひとになってくれ」

軽口を叩きながら、木々の間を縫うようにして集落へ歩いて行く。毎回繰り返して来た、しかし毎度違う時間。

『彼女』が育つまでのこの僅かの時が、秋雨は尊いものだと思っている。

だからこそ祈らずにはいられない。
少しでも長く、この時が続けばいいのにと。

性を知らぬとは言え、人では有り得ず、確固たる妖であるところの秋雨には、何年、何十年経ても続く『彼女』の責務を、今ひとつ理解出来ないでいる。

己の責務は護ることだと言い聞かせ、知ろうとして来なかった経緯も多大に関係しているのだが、それが判つてなお秋雨は知ろうとしない。

知らずとも困ることはなかった。また、知ろうと踏み込んだところで、性も知れぬような妖に全てを曝せるような責ではないのだということも、歴代の『彼女』やその周囲の様子から学んでもいた。

ただ秋雨が判るのは、『彼女』らは人里離れた山の中に集落を作り、隠れるようにして生きていると言うこと。一年に数度、『主上』と呼ばれる男が取り巻きを大勢連れて、それでも少ないらしいがやってくるということ。『彼女』は彼に『巫女姫』と呼ばれていること。

そして彼の来訪のあと、『彼女』は秋雨を連れて様々な場所へ赴き、妖とのいざこざを片付けるということ。

秋雨と恵己が集落に戻ると、空気がざわめきさざめいていて、何かがあったのだと知れた。

「どうしたんだろ」

秋雨の背中で恵己があどけない声を出し、秋雨は覚えのある感覚に表情を引き締めた。

おそらくまた、主上が来るのだらう。

たったひとりの男を迎える為に、人里離れた集落ではその準備におおわらわになるのだ。そしてどれだけ場を小綺麗に整えて出迎えたとしても、その男は不安げに定まらない視線をきよきよさ

るだけで、人々の苦勞には見向きもしない。

つまるところ、秋雨は主上が嫌いなのだ。何代経ても変わらない独特の『匂い』があつて、それが秋雨には受け入れられない。

秋雨の護るべき『彼女』達に、危険を連れてくるのも主上だ。むしろ好きになる要素がない。

だが、たかが一介の護り手たる妖の感情を、将来『彼女』となりあの男とうまく関係を繋いでいかなければならない恵已に、先入観として植え付けるわけにはいかない。

「……主上が来られるのだろう」

「しゅじょう？」

「今なら八千代に、後には恵已に、責務を持つて来る男だ。詳しいことはきづ殿に訊くといい。俺もよく判つておらん」

苦笑しながら恵已の教育係の名を出すと、恵已は目に見えて嫌そうな顔をした。

「ええー」

「こら、そんな顔をするな」

「だつてきづの話、長いんだもん。長過ぎて結局よく判んないの」
おぶわれたまま、ばたばたと脚を交互に蹴り動かし、恵已が言つた的を射た発言に、思わず秋雨は噴き出して、それを見た恵已もきやらきやらと楽しげに笑つた。

「なるほど、では今度、きづ殿に進言しておこう」

言つて秋雨が『彼女』らの住まう屋敷の入口へ続く階段へ片足を乗せたところで、

「恵已さま！」

件のきづが、血相を変えて駆け寄つて来た。

勉強を抜け出したことを叱られると思つたのだろう、秋雨の背中
で、びくりと恵已が身体を震わせ、縮こまる。

礼儀作法に煩い彼女が驚色の着物の裾を絡げ、転がるように駆け付ける様子に、秋雨は違和を感じた。

遠くでざわざわと鳴る葉擦れの音が、胸に宿つた不安を煽る。

「きづ殿、何かあったのか」

なんとか階段の下についたきづは秋雨の問いに、恵已だけを見、必死の形相で叫んだ。

「巫女姫さまが……！」

続いた言葉に、秋雨の背に負った小さな身体が、何かが抜け落ちたように軽くなった気がした。

・式章

床板の軋む廊下を、素足で行く。手には山中で摘んで来た、煎じれば気付けの効能がある薬草がいくらか。

八千代は昔から身体が弱かった。それでも成長するにつれ、少しずつ丈夫になっていったのだが、子を生むための卵を取り出す、という術式が負担になったのだろう、恵己が生まれた頃からまた徐々に弱っていった。

だが、八千代は巫女としての責務を負い続けなければならなかった。その無理の結果、彼女は、倒れた。

秋雨はきりりと手の中の草を握り締める。代々『彼女』達を護り、育てても来た秋雨にとって、これほどつらいことはない。もしこの妖の身に存在するのだとすれば、自らの心の臓も縮んでしまったかのように、息苦しい。

自らに責務があるように、『彼女』達にもそれがあり、秋雨にはその責を奪うことも、やめろと言う権利すらないことは重々承知している。

だが、もう少し。もう少しくらい、選択肢があつても良かったのではないか。そうしていれば、八千代が倒れることなど、なかったのではないか。

今になつては無駄な後悔であり、苦悩であると判つてはいるが、思わずにはいられない。

とにかく、薬草を届けるべく、秋雨は気を取り直して八千代の寝所へ向かった。今そこには意識を取り戻した八千代と、恵己がいるはずだ。きつく何十にも結界を施してある上、もしひとつでも破られればすぐさま秋雨に伝わるようにしてある部屋のため、秋雨が離れてもひとまず安全だと言える場所のひとつである。

とは言えど、不安だろう。秋雨が行ったところで薄らぐ類のものではないかもしれないが、秋雨自身もふたりの傍にいたかった。

「しかしあの身体では、それも叶いますまい」

障子越しに、老婆のしわ枯れた声が告げた。

決して大きな声ではなく、どちらかと言えば、ひそめられたささやかなものだったのだが、秋雨には雷鳴よりも大きく聞こえた。

自然と足を止めてしまった秋雨には気付いていない様子で、部屋の女達は自分達の会話を続ける。

「だが、主上がお越しになるのはもう五日後のこと。巫女姫をおいてかの方のご用命をなせる者はいない」

「恵已さまに巫女姫を継承していただくのはどうでしょう」

「まだ御年十二ですよ。学びも充分だとは言えませんし」

「……そう言うてもおれん。十六の頃には皆継ぐもの。やむを得ない」

「ですが、今はそれでいいとしましょう。でも、その後は？ 巫女姫さまの身体では、恵已さまの子を産むことは……」

「時をかけて身体を癒し、様子を見るよりないだろうな……」

ざわりと、目の奥が燃えた。

奥歯を噛み締め、気を緩めれば迸りそうな怒りを抑え、飲み込む組織として、仕方のないことだとは判っている。頂点が臥した今、今後の方針を考える者が必要だということも理解出来る。

だがそれでも、感情は納得出来なかった。元々妖というのは己の感情に愚直なまでに正直で素直だ。

八千代や恵已を、壊れたら取り替えればいいと言われているような気がして、悔しい。

ふと、手に濡れた感触を受けて、秋雨は我に返った。きつく握り締めた薬草から汁が滲むほど力を加えていたことに気付く。

そう、今は。

今はとにかく、ふたりの元へ。

未だひそやかに話し続ける部屋の女達に、障子越しに強い視線を投げてから、秋雨は床板を軋ませ、廊下を進んだ。

秋雨が八千代の寝所に着くと、布団に寝たままの八千代と、その枕元に座る恵己が、同時に顔を向けた。

「秋雨」

「あつた？」

同時に声を掛けられる。秋雨はどちらにともなく頷いて、恵己の隣に胡座をかいて座った。薬草はすぐに入り用のものではなく、後で干してから擦り潰して粉末にする。

「どうだ、具合は」

秋雨の問いに、八千代は弱々しいながらも微笑んだ。今朝も会ったというのに、昼を越しただけで随分と老いたようにさえ見える。まだ歳は三十に届いていないはずなのに。

そのやつれようを痛々しく感じながら、秋雨は八千代に合わせて微笑して見せた。

「随分いいですわ。お薬が効いたみたい」

「……無理をするな」

「ええ。すみません」

「だ、だからお主が俺に謝る必要はない」

「でも、心配させてしまいましたわ。薬草まで取りに行かせてしまいましたし」

八千代の言うように少しは回復したのか、言葉ははっきりとしていて、そのことに秋雨はほっと息をついた。

「構わぬ。心配するのは俺の勝手だし、妖の脚にこれしきの距離などなんともない」

当たり前のことを言っただけだったのだが、八千代には「まあ」と笑われてしまった。

ゆるりと八千代の手が、恵己に向けて伸ばされる。

「秋雨ったらあんなことを言っわ、恵己」

「いつもだよ」

八千代の手を労るように取って両手で包み、普段よりは元気な

い声音で、けれど恵已も笑った。

その笑顔にまた安堵の息を吐いたのは、秋雨だけではないようだった。

「恵已」

静かに、八千代が彼女を呼ぶ。その声の色に、秋雨は肌が粟立つような感覚を覚える。

まさか。

「はい、母さま」

生真面目な返事をして、恵已は八千代の目を見つめる。八千代は恵已の手を解いて、彼女の頬に触れた。口許には、どこか淋しそうな笑み。

「あなたに、もう、この責を負わせねばならないようですわ」
予想通りの台詞。薄暗い部屋の中、ふたり分の漆黒の双眸が炯^{けい}と光った。

そして、恵已は笑った。

「はい」

驚いたのは、秋雨だけではない。八千代までが目を開き、真っ直ぐな視線を向けて来る娘をまじまじと見た。

「素晴らしい責なんだもんね。わたし、頑張るよ、母さま」

頬に触れる八千代の手を改めて握り、恵已はきはきと告げる。

確かに主上にまみえ、直々に言葉を交わし、命^{めい}を賜る、素晴らしい責務だと『彼女』達は学ぶ。

だが、その重責は八千代の身体を蝕んだ。恵已はそれを目の当たりにしたはずなのに。

恵已は聡い子だ。

だがやはり幼い。

責と、母が倒れたことの関連付けが出来ないのだろうか。恵已の記憶にある限り、確かに八千代は元来身体は強くない。

掛ける声が見つかからない秋雨と同じことを考えたらしい八千代は、じわりと優しい目に涙を溜め、おもむろに起き上がると、恵巳を抱き締めた。

「恵巳。恵巳。ああ神よ、恵巳をどうか……どうか……」

「大丈夫、心配しないで、母さま。わたし、ちゃんと巫女姫になるよ。母さまに負けなくらい、ちゃんとやるよ」

「ああ恵巳……あなたの子は、必ず、必ず産みますからね……」

「うん。それまでゆっくり休んでね」

噛み合わない、ちぐはぐな会話。八千代は泣き、恵巳は困ったような顔で笑った。

ただでさえ体力の消耗が大きな八千代を、少し休ませるということにして、侍女をつけて、秋雨と恵巳は彼女の部屋を辞した。

障子を閉ざす直前、八千代は秋雨に、また「恵巳を、頼みます……」と告げ、秋雨は確かに頷いた。

一言もなく廊下を進み、ひとつ部屋の前まで送る。障子の上には木片に稚拙ながら百合の花を彫り込んだ板が飾られている。もっと幼い頃、恵巳が彫ったものだ。以来、恵巳の部屋の看板となっている。

それを見上げ、恵巳はようやく口を開いた。

「ねえあき。どうして母さまはわたしの子供のことなんて言ったんだろ」

秋雨は恵巳を見るが、恵巳はどこか頑なに視線を合わせようとしていない。

『彼女』達はその責を負う間、人の男と交わることはない。神に仕える巫女としての習わしなのだそうだ。

だからその責を次代に渡したあと、次代の身体から取り出された卵と、男の種とを合わせてひとつになった『子の元』を、その身に宿し、産む。そうして今まで『彼女』達は生まれて来た。

それはつまり、八千代が恵巳の子を産むという状況を生む。

人間とはそもそも秋雨にとって不可解なことをするものだが、『

彼女』達を取り巻く環境はその最たるものだと言えるだろう。

つまり八千代のあの言葉は、早くに負わせてしまう重責を、必ず八千代が取り除いてやると言う親心だ。それが、恵巳の子に重責を渡すことで成されると、判ってなおも望んでしまうほど、切実な、親心だ。

それが秋雨には判るから、判り過ぎるほど判るから、喉が詰まる。返事をしない秋雨をちらりと一瞥してから、恵巳はまた木彫りの看板を見上げた。

百合は、八千代が好きな花だ。殺生が出来ない恵巳はその花を摘んで帰ることも出来ない。それを見かねた集落の男が、恵巳に板と刃物を貸し、彫り方を教えて出来たものがそれだ。

八千代はとても喜び、けれど受け取らずに恵巳の部屋に飾ることを提案した。そうすれば母さまと一緒にのような気になれるでしょう。そう言つて、祈りと礼を込めて。

「……母さま、泣いてた」

囁くように、呻くように、恵巳が零す。

その悔いるような声音に、はっと秋雨は恵巳の顔を見る。その強気な光をたたえた目には、大粒の涙が浮いていた。

「あき。わたし、間違ったかな」

「……恵巳」

「わたし、母さまが楽になるなと思った。母さまがこれ以上苦しまないようにって、思った。わたし……わたし……」

ぼろぼろと涙が零れ落ちて行く。それを拭いもせずに、齒を食い縛りながら、恵巳は肩を震わせ続けた。

「あき。わたし……間違ったのかな……っ」

「恵巳……！」

咄嗟に膝をつき、小さな身体を抱き締めた。

恵巳は聡い子だ。

そしてまた、とても、優しい子だ。

幼い時分から、母とはあまり関わりを持たずに育った。母には責

務があり、恵已にはその責を負うための勉強があつた。

それでも八千代にとって恵已はたったひとりの娘であり 恵已にとつて八千代はたったひとりの母なのだ。

恵已は秋雨の緋かすりの着物にしがみつき、ようやく歳に見合うような泣き方をした。声を上げ、しゃくり上げて、全身で。

ただ秋雨はそれを許し、抱き締めることしか出来ない。こんなとき、いつも自らの無力に身を焼かれる思いがする。

恵已が間違つたとは思わない。だが、間違っていないと、言つてやることも出来ないのだ。

「恵已」

泣き続ける恵已に、語り掛ける。恵已は秋雨の胸に顔をうずめたままだ。

それでも届いていると信じて、秋雨は告げた。

「護るから」

敵から。

責からも。

味方からだつて。

「俺が必ず、護るから」

秋雨の言葉を受けてか、心なしか着物を掴む恵已の手の力が強くなる。

応えるようにして、秋雨も抱き締める腕に力を込めた。

二日後、慌ただしく継承の儀が執り行われた。

代々十六の娘が儀の際に着る巫女姫の衣は、十二で小柄な恵已には明らかに大きかった。

しかしそれが、妙に恵已に気迫を与えた。

化粧を施した目許に、もはや幼さは残っていない。見えない。

肅々と儀は進み、秋雨は柱の影に溶けるようにしてそれを見守つ

た。

儀を終え、部屋に入る。今までの百合の看板のあった部屋ではなく、代々の巫女姫達が使っていた部屋だ。

巫女姫の衣は脱いだものの、化粧はそのままの顔で、恵巳は張り詰めていた糸を緩めた。いつものように悪戯っぽく笑って、

「疲れたあ」

と、言った。

秋雨が「お疲れ様」と言うと、「あきもね」と返された。

儀の際には、普段よりも嚴重な結界を幾重にも張る。それも秋雨の仕事だ。

恵巳が、柵から百合の板を取り上げた。そつと、愛しげに表面を撫でる。

「……あき、聞いてくれる？」

「無論」

即答を返すと、くすくすといとけなく恵巳は笑った。

「母さまに言われて、大泣きしてからね、考えたの」

あのあと、身を清めるという恵巳とは顔を合わせていなかった。部屋の障子越しに話すこともなく、ただ近くで互いの気を感じていただけだ。

「母さまが悲しまない方法。でも、ちゃんと責務を果たす方法」

「……うむ」

薄藍の振袖を翻し、恵巳が振り向く。その眼に宿る、強い光。

秋雨はしかと彼女と視線を合わせた。

「そんなの、判んなかった。けど、母さまを悲しませない方法だけなら、わたしが変わらなければいいんだよね」

至って明るくそう言って、恵巳は秋雨に百合の板を差し出した。訳も判らず秋雨はそれを受け取り、

「？ これは」

首を傾げる。

「それ、あとで部屋の前に掛けておいて」

につこりと恵巳は笑う。きょとんとしてしまふ秋雨に、彼女は更に言った。

「わたしは、わたしでいるよ。責がないときまで『巫女姫』でなんていてやるもんか。だから、部屋から変えてやるの」

「あ……」

それは、彼女が掴んだ、選択肢。

それまでの『彼女』達にはなかった、否、気付けなかった、ささやかで、大切な自由。

「あき。わたし、間違ってる？」

りん。恵巳が首を傾げると、耳の前の髪に結ばれた鈴が鳴る。秋雨はゆるりと頭を振った。

「いや。……恵巳は聡い子だ」

認める。目を見て微笑む。

恵巳はくしゃりと泣きそうな顔で破顔した。

そして、それから少しして。

凜。恵巳の表情が晴れやかに秋雨を真っ直ぐに見つめる。

「これから、よろしくね 秋雨」

「うむ、承知した」

：参章

秋雨はひとりで屋根の上にいた。機嫌は最悪だ。

「……遺憾だ」

ぼそりと呟いてみたところで、誰も応じるものはない。

秋雨の陣取る屋根の下では、主上が恵已に謁見している。無論ふたりきりではない。お互いに大勢の取り巻きが見張るためか護るためか、とにかくついている。

例の如く、秋雨もまた幾重もの結界を張った。恵已自身にも三層の結界を　無断で　張っているの、ひとまず何か変事があればすぐに駆け付けることが出来る。

それでもやはり、側にいないというのは不安なものだ。それも主上と共にいるなんて。

恵已にとってこれは初めての責務となる。難題をふっかけられてはいないか。きづがいるし、古参の者もいるから、そう莫迦なことは言えるまいが。

「……」

と、色々考えを巡らせたところで無駄なのだ。どうあがこうとも、秋雨は少なくとも謁見が終るまでは屋根の下の部屋へ入ることは出来ない。

「……遺憾だ」

もう一度呟き、腰の愛刀の柄に触れる。名は「若月^{わかつき}」。生まれたばかりの月のように鋭く、白い刀身が特徴の、秋雨の爪だ。

今までの謁見の際も、秋雨は若月を帯び、『彼女』の背後に控えて来た。

ところが、近頃主上を取り巻く様子が転じ始めているのだと言う。その為に不必要なまでに主上は身を案じているようだった。そのびくつきようと言ったら、秋雨の記憶の中でもかつてないほどだった。そんな主上が、恵已の後ろに控えていた秋雨に言ったのだ。

「その者、なに故そこにおる」

なんという愚問だろうか。主を護るためだと答えた秋雨に、こともあろうか主上は言った。

「ではなに故、この場において刀を佩いておる」

「主を護るため以外に理由はない」

「私を斬るためではあるまいな」

何を莫迦な。そうは思ったが、口にはしない。ところが、口にしないの分別は多少あるものの、口にすることはどうしようもなく正直なのが秋雨の悪い癖だった。

「お主が我が主に危害を加えるならば、斬る」

言ってしまつてから、一応後悔はしたのだ。これは言つてはいけない類の言葉だったと。

だが、秋雨は『彼女』達に仕える妖で、妖は人とは違う理の中で生きている。秋雨にしてみれば『彼女』達より上位に存在するものなどない。だから口にしたことを悔いこそすれ、もしそんな状況に陥れば、ためらいなく斬る心づもりに変わりはない。

当然、場は騒然としてしまい、主上の取り巻きの中には色めき立ち、秋雨に掴みかかるうとする者まで現れた。

かろうじて主上が統率者として場を一旦鎮めたのだが、そのあと無作法な取り巻きのひとりが叫んだ。曰く、自分達は武器を預けているのだから、秋雨も刀を預けるか、もしくは退出すべき、と。

「私もそうすべきではないかと思う」と主上も同意したが、秋雨は頷けない。爪は妖たる自らの一部であるし、そもそも主を護る者がその手段を手放すということが信じられない。

「俺は主にしか従わぬ」

そう告げた秋雨に、主上は恵已に秋雨の退出を請求し、恵已は渋々と言つた体で秋雨にそれを命じ。

秋雨はこうして屋根で腐っているというわけだ。

「……かつこわるい……」

自らにげんがりして、文字通り頭を抱える。出来たせめてもの抵

抗は、主にひそやかに守護陣をまとわせることくらいだった。

妖は律の中で生きる。『主に従う』という律を課している秋雨に、主たる恵已に逆らうことは出来ないのだ。

ひゅう、と風が鳴って、木立を渡る。赤や黄に色を変えた木葉達が、渦巻くようにして飛んでいく。

足元にも風を感じて、秋雨は灰色の目を上げた。その視線の先には、黄褐色の、鼬に似た獣。ただ、その前脚は各々鋭い鎌になっている。

つぶらな目で獣は秋雨を窺うと、滑るようにして胡座をかけた秋雨の膝によじ登った。

「旦那」

「久しいな、朔早^{さくぞう}」

名を呼ぶと、朔早は照れ臭そうに笑った。性が人間であつた妖や、人間と交わって生きる妖以外で、『個』として名のある者は多くない。

朔早はいかにも見た通りの、鎌鼬という、他愛のない悪戯として突風に紛れひとの肌を切り付ける妖だが、何故か妙に秋雨に懐いているので、秋雨が名をつけた。それが彼女にはくすぐったいらしい。初め雄と雌とを勘違いして、もっと雄々しい名前　朔三^{さくぞう}　をつけて彼女に激怒されたのも、今となつてはいい思い出だ。

「旦那、ひとりやなんて珍しいやないか。しかもいつにもましてシケた面して。どないしたんや」

性別を間違つても仕方ないだろうというくらい男前な口振りで朔早がいう。それにしても、いつにもましてとはご挨拶だ。

だが、自らの失態で主の傍を離れなければならなくなったこの状況では、言い返す術もない。

「訊いてくれるな……」

「あらら、こら重症やなあ。なんや失敗でもして、巫女姫にどこぞ行けとでも言われたんか？」

「……」

事情を知って来たのではないかと疑いたくなるほど凶星だ。言葉を失いうなだれた秋雨に、朔早はぽんぽんと彼の膝を叩いた。慰めているつもりらしい。

「しゃーないなあ、あしが取り持ったるやん。巫女姫はどこなん？」
黄褐色の黼が鎌の腕で自分の胸を示す。「あし」というのが朔早の使う一人称だと秋雨が気付いたのは、つい最近のことだ。

秋雨はしかし、朔早の厚意にも膝を抱える。朔早が素早く屋根に降りた。

「お主も恵巳の元には行けぬ」

「なんで」

「他ならぬ俺が封じた。謁見が終るまで俺以外は何人たりとも入れん」

「……相変わらず、呪術の類が得意なやつだな……」

恐らく呆れた顔をして、朔早が零す。そのあからさまに皮肉な褒め言葉に、秋雨は顔を上げられない。

すっかり消沈した秋雨の肩に朔早が飛び乗る。耳許で、ひょう、と風を斬る音がした。

「せやけど、謁見つちゅーことは、主上が来てるんやろ？ そらピリピリもするわな」

「しかし……佩刀なんてこれまでもずっとして来たろくに。あの若造にも以前会っているし。そのときはなにも」

そこまで言って、秋雨は朔早の小さな目がじつと己を見つめていることに気がついた。

がしがしと髪を掻き回し、秋雨は「……なんだ」気まずさに耐え切れず、呟くようにして問うた。

獣は、これみよがしに溜め息を吐いてみせる。

「旦那ほどの大妖になると、しかもこんなとこに引き籠つとつたら、人間の世界のことなんかどーでもようなるんやろうけどなあ」

「そのようなことは、」

「ないつちゅーことはないやろ？ 巫女姫にしか興味がないってこ

とは、そう言うことやで」

「……」

再び返す言葉を失う。秋雨は自らを大妖だなどとは思っていないが、とにかく『彼女』を護ることは連綿と続けてきた。

そもそも将来のことなど考えず、刹那を生きているのが多くの妖の本質であるとも言える。『彼女』に迫る危険さえ排除すればいいなら、秋雨はそれ以外は考えない。

ひとを驚かせるのつぺら坊が、驚かせた相手が驚愕のあまり失神することや、ときに心の臓すら止めてしまうことを考えないのと同じだ。

「文女姐に話聞いてみたらどうや？　ちょっとくらいは判るんちゃうか？」

「文女が……」

秋雨は長い黒髪、白い顔の女の妖を思い浮かべる。性は文車妖妃ぶんぐるまようひという、手紙や書簡を収納する文車が付喪神となった妖だ。が、そもそもこの集落、それも『彼女』に届く手紙など主上からのものしかない。

そこで文女は主上からの僅かな手紙に書かれたことだけでなく、そんな状況になった理由を推察することに熱を上げた。結果、市井のどんな情報でも貪欲に欲しがっている。

ちなみに文女と言う名も秋雨がつけたのだが、薄暗い場所で小難しいことばかり言う文女が、秋雨は少し苦手だった。

判りやすい顔をしていたのだろう、朔早はとん、と膝の上に移動すると、齒を剥いた。笑っているのだ。

「旦那の性はきつと物やないなあ。じつと黙って考えんのが嫌いなんはあしも同じやから判るけど。でも多少は知ること知ってんと、巫女姫もいざつてとき旦那に頼られへんで？」

「そ、」そのようなこと、と返しかけた反駁が、目の前で起こった突風に掻き消される。当然、犯人は朔早だ。

鎌鼬は小さな目を、いやに人間臭く細めて見せた。

「今がそつとちやうの」

「つ、」

朔早の言う通りだ。秋雨の無知故に今、秋雨は恵己の傍に居られない。

主を護ると誓ったのに。

『彼女』に仕えると決めたのに。

秋雨は唇を一旦引き結び、ひとつかすかに頷いた。

「……承知した」

薄闇の中で、濡れた目と、その目尻に挿した紅とが妙に気を引いた。

文女は長い黒髪を垂らし、文車にしなだれかかるようにしていた。裾模様には小花の入った紫苑色の着物がよく似合う。

「やあ旦那、珍しいねえ」

「うむ」

軽く応じて、秋雨は文女の前に腰を下ろした。がしがしと濃灰色の髪を掻き回す。切り出す言葉が見つからない。

逡巡する秋雨に、焦れたようすもなく、うふふ、と文女が笑った。

「おひとりかえ」

「……うむ」

「ひとの世のことでも訊きに來たのかえ」

「……うむ」

そこまで見透かされていては、隠立しても仕方ない。むしろ糸口を与えてもらったことに感謝するべきかもしれない。秋雨は腹を決めて、文女の白い顔を見据えた。

「俺は知つてのような性分故、出来れば噛み砕いて教えてもらいたいのだが」

そう言い置いてから改めて頼むと、文女はまたうふふ、と笑って、つまりね、と言った。

「主上は今、転機にあるわけさ」

「む、……うむ、それは、知っておるのだが」

さすがにそれくらいは、と思った秋雨の額に、冷たい文女の指が突き付けられる。

「知つちやあいるが、判つちやあいない。ひとの世においてかつては、主上の存在は絶対だった」

「……」

「既について来れてないって顔だねえ。ひとにとっての主上は、旦那にとっての巫女姫だったんだよ」

「ああ！」

「かつては、ね」

含みを持たせた文女の物言い。思わず秋雨は眉間に皺を寄せてしまふ。

主に忠誠を誓えば、その身滅びるまで仕えるものだ。だが文女の口振りでは、まるで今ではないがしろにされているようではないか。その秋雨の不快を感じ取ったのだろう、さらりと衣擦れの音を立てて、文女が首を傾げておどけてみせる。とん、と突き付けた指で秋雨の額を叩いた。

「あたしにそんな顔されても困るよ。でも、そんな顔するってことは旦那にも判つてもらえたみたいだね、主上の今までが」

「……そのようなことが、あつていいのか」

「人と妖は違うからねえ」

あつさりと肯定して、文女は文車に肘をつき、そこに顎を預けた。秋雨は納得出来ない。若月を手放せと言われたときのような気分だ。

妖の　少なくとも秋雨の律では、受け入れられないことだ。

それが人と妖の違いだと言うのなら、人とはなんとも不可思議な生き物で、秋雨には理解しがたい。

「でも、転機だって言つたらう？　また主上を崇めようって動きが出て来た」

文女が言つて秋雨は首を傾げた。

「良いことではないか。それでなにを神経を尖らせる必要がある」

「崇めようって動きも、今まで通りでいいって動きもあるのさ。つまり、二派で潰し合いを始めてる。一派……反主上派にとって、どうすることが最も手っ取り早いのか、判らないじゃないだろうか？」

それは。

主上を、弑^{しい}せばいい。

だが、かつてとも言えども崇めていた存在ではないのか。そんなことが、本当に、本当に許されるのか。

秋雨が一抹の恐怖すら覚えて文女に問うと、文車の付喪神は気怠げに息を細く吐いた。

「まあねえ。あたしの聞いた限りじゃ、本当に主上を殺そうとしてる奴は、そうはいないよ」

殺したあと、正義にはなれないだろうからね。そう続けた文女の言葉は今ひとつ秋雨には理解出来なかったが、ひとまずぼつと胸を撫で下ろした。

何故ならそれは、立場を替えれば『彼女』達も、凶刃の的になる可能性を示していたからだ。

妖だけでなく、人からも護るとなれば、秋雨だけでは手が圧倒的に足りない。

^{はなた}縹色の袴の膝を叩き、秋雨は晴れやかな顔で立ち上がった。

「あい判った。礼を言う、文女」

「まあ、謁見も終る頃合いだろうさ」

ぎくり。低くくつくつ笑う文女の声に、秋雨は動きを止める。

「な、……なに故、それを」

「やあ、旦那はあたしを何の妖だと思ってるのかえ。それと、旦那が相談したのは何の妖だったかえ？」

「っ、」

追及を免れたとひそやかに安堵していたのに、とんだぬか喜びだ。突風をまとう妖たる朔早にかかれば、秋雨より先回りすることな

ど、ただ駆けるのと同じほどたやすい。そう言えば、「ひとの世のこと」と言って、何故文女は主上の話から始めたのか。考えれば、判ることだった。

頬に朱を昇らせて秋雨は文女に背を向け、場をあとにした。

「本当に判ってるのかねえ……」

秋雨の後ろ姿を見送り、文女は呟く。

「そうはいない、ってことは、多少なりとは、いる、ってことだよ……旦那」

その声は、秋雨には届かない。

：肆章

「怒ってないよ？」

につこり笑って、恵巳が言う。彼女の前に正座した秋雨は、俯いて顔を上げられない。

巫女姫の衣装から、気に入りの楓柄の振袖に着替えたので、あの人形じみた威厳はないが、それでも秋雨には怖い。例え相手が齡十二の女児でも、秋雨にとっては主だ。

「仕方ないよ、あきは妖だもん。莫迦正直に言っちゃうよ」

「……う、」

「仕方ないよね、わたしが出て行って言ったんだもんね。そう言わなきゃ収まらなかったからだけど」

「……うう」

「仕方ない仕方ない。わたしにとって初めての場で、わたしがすごく心細かったのなんか、あきには関係ないもんね」

「………すまぬ、恵巳……」

逐一ぐさぐさ胸に刺さる恵巳の静かな怒りに耐え切れず、とうとう秋雨は畳に拳をついて謝罪した。

弁明しようもないほどに、恵巳の言う　暗に責める　言葉は、

秋雨の落ち度なのだ。

顔を上げない秋雨に、恵巳がはあ、と息を吐く。

「………しっかりしてよね」

「すまぬ……」

「ほんとに、怖かったんだから……」

するりと恵巳が動く気配がした。どこかへ行くなら従おうと顔を上げた秋雨のすぐ目の前に、黒髪の頭があった。

抱きつくと言うよりも、ひしとしがみつく。その小さな子を、秋雨もしっかり抱き締める。

「このような失態は、二度とせぬ」

「……約束だよ」

「承知」

信じてもらえないかもしれないが。一度の失敗に後悔していると果たして恵巳が、楽しげに笑いながら秋雨を見上げた。

「でも、あきつてヘタレだからな」

「へ、へた……？」

「まあいいや。期待してるからねっ」

「う、うむ」

秋雨を突き飛ばすようにして恵巳は立ち上がる。りん、と耳の前の髪に結んだ鈴が鳴る。以前はしていなかった装飾だが、巫女姫の装束を着てから気に入ったらしい。紐の色は鮮やかな緋色だ。

ふわりと舞うように袖を振って整え、恵巳の漆黒の双眸が真っ直ぐに秋雨を捉えた。

「秋雨」

恵巳は『彼女』として秋雨を呼ぶとき、こう呼ぶようにしたようだ。自然、秋雨の背筋も伸びる。

「数日内に、町へ行くよ。そのつもりでいてね」

「御意」

秋雨は若月の柄に手を乗せて応じた。

冷えて澄んだ夜風が通る。

厚い布で仕立てた巫女姫の衣装は風を通しはしないものの、開放部からそれが忍び込んでくる。白を基調とした振袖と、飾り気の無い紫蘇色の袴というのも、見た目に寒い。

「ねえあき。これ、裾いっぱいに小花の刺繍入れたら可愛いと思わない？ 文女さんみたいにさ」

莫迦なことを、と笑われるかと思ったが、振り向いた秋雨は、月光に銀色に見える目でまじまじと袴を見て、それから恵巳の目を見

つめた。

「ふむ。可愛いとは思うが、恵已にその紫蘇色はきつい気がするな。刺繍の前に染め変えてもらったらどうだ」

「それいい！」

秋雨は妖だ。だからこそどうでもいいしきたりなんかには頓着しない。

重要な決定は恵已達、つまり巫女姫に委ねるが、些細なことならば意見を問えばきちんと答えてくれる。

実は、『しなければならぬ』ことなんて、きっとそんなに多くはないのだ。

なに色が似合うかなんかを相談しながら並んで歩いて、町にさあ入ろうというとき、ぴくりと秋雨が顔を空に向けた。

「あき？」

恵已が秋雨を見る。秋雨は眉間に皺を刻んで、頭を振った。

「……いやに強い気があるな。風がざわついている。……血の匂いもする」

肌を刺すような空気は、恵已も感じていた。血の匂いなんてものはまだ恵已には嗅ぎ取れないが、あってもおかしくないだろうと思う。学ぶ限り、古い昔から都として栄えた町だ。その分、表に陰に、流された血も多い。

今も、二派が各々に理念を掲げ、争っているはずだ。いや、その実、そんな簡単に割り切れるものでさえない。

「恵已。離れるなよ」

「しょーちっ」

秋雨の口真似をして、小走りで護り手である妖の隣に並ぶ。

通りに行くにつれ、秋雨の感じたざわつきが、恵已にもはつきり判るほど強くなってきた。恵已は秋雨の羽織を握り締める。

ばたばたと、通りを大人数が駆ける音がして、秋雨が歩みを止めた。

ややあつて、提灯の光がふたりに向けられる。鋭い誰何。^{すいか}秋雨が

恵已を背に庇うようにする。

「用向きあつて参つた者だ。お主らの邪魔立てはせん」

揃いの、派手な浅葱色の羽織。腰には全員が真剣を帯びていた。秋雨も何かを感じたのだろう。極力ことを荒立てない言葉を選んで
いるようだ。

しかし、先頭にいる男は刀に手を掛けた。

「用向きとはなにか。今時分、佩刀して幼子を連れて、このような
場に。長州訛りはしないようだが、答え如何いかんによつては、容赦せん」

あちゃあ……。

男の不遜な物言いに、恵已は額を押さえた気分になる。秋雨が
そんなことを言われて、黙っていられるはずがない。

案の定、「……なに？」秋雨の指先が痙攣するように動いた。恵
已は袖の上からその手を必死に押さえる。

「まあまあ」

と、男達の後ろから、歳若い青年が笑いながら言った。

「関係ないみたいだし邪魔もしないらしいから、いいじゃないです
か。今時分、このご時世この場で、幼子を連れてるのに佩刀してな
いって方が不自然ですよ」

「し、しかし」

青年のひとのいい言葉に、先頭にいた男が目に見えて狼狽する。

その肩をぼんぼんと青年は叩いた。

「誠の字を背負う者が、理由もなく幼子を斬るわけにいかないでし
よ？ それに、最近はなんだかピリピリしてるから、たまの大目も
良しとしましょうよ」

それから、秋雨を見る。

「でも、用事が終わったらさっさと帰って下さいね、あなたも。今宵
は会ったのが僕の隊だから良かったけど、うちの組には、あなたの
ようなひとといつだつて喧嘩したがってるやんちゃ坊主がいるん
です」

きゅ、と秋雨も唇を結んで頷いた。

「……承知した」

一団が去って行くのを見送ってから、恵巳は深々と息を吐いた。
「なにもなくて良かったね」

「うむ……」

呻くように応じた秋雨を見上げる。

「あき、顔が渋いままだよ？」

「いや。……精進せんといかな」

「強いひとでもいたの？」

「うむ」

「さつき止めてくれた、若いひと？」

「うむ……」

珍しい。恵巳は濃灰色の目を見つめた。そもそも、秋雨が巫女姫以外の人間に興味を持つこと自体があまりない。

真剣な表情で青年達の消えた道の先を見据える秋雨に、いいひと
そうだったけど、と言うと、ようやく彼も口許を綻ばせた。

「きつと、そうなのだろうな」

秋雨が、本当にそんな風に感じているかどうかは、恵巳には判断
できない。

もう十二年の付き合いになるが、やはり人と妖は根本で違つら
しく、恵巳が秋雨のことで完璧に理解していることなど、おそらくま
だひと握りなのだ。

その完璧に理解していることのひとつ。秋雨は、巫女姫を護ると
いうこと。

「行こう、あき。あのひとと言ってたし、さつさと終らせよう」

「うむ、承知」

主上からの依頼は、以前は私情から来る怨嗟に妖となつた女を開
放してやってくれ、というのが主立ったものだったらしい。

それから少しして、身の回りのたわいもない妖を近付けないよう

にしてくれ、周囲をふらつく戦に朽ちた魂を開放してやってくれと、やはり己のを中心にした依頼に変化していったそうだ。

だが、今回の依頼。

曰く、『町』の気を乱し人の気を乱す妖を、鎮めて欲しい。

人々に安寧を与えたいのだという。長く続いた平穏を、こんな形で失わせたくないのだと。気が鎮まれば、もう少し穏やかな解決方法があるに違いないと、今の代の主上は言った。

そして、先程の団体。いきり立った男達と、秋雨が認めるほどの力量を持った青年。

恵已にも少し、主上の望むところが判ったような気がした。

恵已は、ずっと冷えた空気を吸い込んだ。

人ならざる者の気配。哀しい静けさ。じつとりと重い 強い思念。

「……すごいな」

思わずと言った様子で秋雨が呟く。恵已も頷いた。

人と妖は切り離せない双極だ。人の気が荒れれば妖の気も荒れる。逆もまたしかり、だ。つまりどこかで断ち切らないと、負の連鎖は止まらない。

人の気が和らぎ楽しいと、妖も人をからかい楽しむものが増える。それをまた笑えるほど、人の気が安定しているのが理想だ。

恵已はひとつの橋の前で足を止めた。

それほど長くもない、けれど古い木造りの橋だ。それほど装飾も施されていない、実用性を重視した橋。

目を瞑る。神経を研ぎ澄ます。

橋の上にぼやりと、青白い姿が見えた。恵已は、微笑んだ。

「こんばんは」

ざわざわと空気が揺れる。橋の上の姿が恵已を見た。長い長い髪の毛、女だ。目は釣り上がり、しかし顔に感情はない。

恵已にはそれが、泣き疲れた者の顔だと感じた。

ああああ、と泣き声とも呻きともつかない音が女の喉から迸った。胸が、心が切り裂かれるような、悲痛な声だった。

聞いただけで恵巳の目が潤む。

「……つらかったんだね」

知らず知らず、呟いていた。一步踏み出すと、秋雨がすぐ斜め後ろについてきた。

あああ、と女は声を発し続ける。涙はきつと枯れ果てたのだろう、女の表情は変わらない。

恵巳は女に向けて、手を差し出した。

「わたしには、あなたの声が聞こえるよ。あなたの姿が見えるよ。聞かせてもらえないかな。あなたの気持ちが晴れるように、お手伝いさせてもらえないかな」

初めての責務だ。

だが、怖くはない。

妖にはずつと触れ合ってきた。今も後ろに控えて、恵巳を護らんとしている者がいるくらいだ。だから恵巳は、怖くない。

けれど、淋しい。

判り合うことができると思うからこそ、こうして独りで嘆き続ける妖がいるということが、たまらなく淋しい。

手を伸ばしたまま、一步一步近付く。もう少して、肩に触れる、というとき。

ぐん、と上半身がのけぞった。驚いた恵巳が声も上げられずにいると、ああああ、と女の声が一際大きくなった。

「恵巳、なにもないか」

秋雨の忍びやかな声音。恵巳は我に返った。

目の前に、秋雨の漆黒の羽織の背中があつた。秋雨に護られたのだと、瞬時に理解する。

女は、と見れば、長かった髪がひと房、斬り落とされている。若月が清光を弾く。

護られたということは、危害を加えられかけたということだ。

「だい　じょうぶ」

「言葉を失っているようだ。説得はおそらく、無理だろう」

淡々と秋雨が分析する。確かに女は、さっきからああ、としか口にしていない。恵巳の言葉にも反応しなかった。

恵巳は静かに秋雨に問う。

「あのひとが何の妖か……秋雨、判る？」

秋雨は軽く頭を動かした。その表情は恵巳からは見えないが、恵巳の問いに応じようとしているのが感じられる。

少し静寂の間を空けて、「断言は出来んが」と口火を切った。女の声はまだ続いている。

「性は人……鬼の一種だと思う。情報が少ない故、判らんが……」

橋姫ではないかと思う。そう言って秋雨はちらりと恵巳を見た。恵巳には聞き覚えのない名前だった。

眼で詳細を求める。秋雨が曖昧に頷く。

「死後転化する理由は細かく言えば色々あるが……橋を造るには人柱が使われる。大別するとその人柱に使われたひと自身が転化する場合と、人柱に使われたひとの、想いびとが転化する場合だ」

ああああ、と女の声が更に大きくなる。今度は胸が押し潰されそうほどだ。

秋雨が若月を構え、恵巳は「待つて！」その袖を掴んだ。

「待つて……」

「恵巳。待つても無駄だ、説得は通じぬ。ならば強制的にでも浄化するしかない」

「そんなことない！　哀しいんだよ。とても哀しいってきつと言いたいんだよ」

だって反応したのだ。秋雨の言葉に。たったひとつの単語に。

恵巳は秋雨の陰から出て、女を見つめた。

「『想いびと』……」

「ああああ……！」

恵巳の口から零れたひと言に、女が目から、ぼろりと涙が落ちた。

そうして初めて、女の顔に表情が浮かぶ。最初は、流した涙に驚いているそれだった。それが次第に、哀しみに暮れたものへと変わっていった。

「あああ……ああ……あの、ひと……」

「！」

叫び嘆き泣き尽くしたために掠れた声で、女が言った。

「あのひと……返して……！」

・伍章

鬼の顔はもはや、ただの女の顔になっていた。

顔を覆うこともせず、ひたすらに落涙する。

秋雨は若月を構えながらも、主導権を恵已に渡した。こうなればあとは、『彼女』の仕事だ。

恵已がまた一步踏み出す。その表情は哀しげだが、いつもの優しい恵已の顔だ。

「ここにいても、あなたの大切なひとは帰って来ないよ」

静かに、けれど厳しい事実をゆっくりと告げる。女は泣くだけで恵已を見ようとしめない。

しかし油断はできない。先程のように、髪を操って害して来るかもしれない。そうなれば次にはすべて斬り落としてやろうと秋雨は思う。

「あなたはここに、大切なひとを感じるの？ あなたの大切なひとは、まだここに縛られてるの？」

ことり、ことり、と。

大事なものを丁寧に置いていくような、そんな語調で、恵已は言葉並べていく。

その言葉に、女は確かに反応した。虚ろだった目が、大きく見開かれる。

恵已は声を紡ぎ続ける。

「教えて……あなたの大切なひとはここにいるの？ あなたはあなたは、ここにいたら淋しくないの？」

「ああああああ！」

女の絶叫が響き渡った。それは何よりも雄弁な答えのように、秋雨には感じられた。

つまり、いないのだ。

だから彼女も長く橋の上に留まり、長く相手を想ってなお、癒さ

れない。癒されないものだから、次第に相手を想う気持ちと、相手を奪われたことを憎む気持ちの比率が逆転してしまった。彼女の魂は鬼に転化してしまった。

女　橋姫は崩れ落ち、うずくまって泣いた。

その姿に、ずきりと秋雨の頭の奥が痛んだ。

「……？」

こめかみに若月を持つのと逆の手を当ててみるが、その痛みが何なのか、秋雨には判らない。

ただ、頭の奥、魂の芯が、疼くように痛む。

それはきつと、秋雨の知らない、本性の頃の記憶。

泣声を、聞いた気がした。

「あき？」

「あ、」

恵巳の声で、我に戻る。

ほんの一瞬、自分の性を垣間見た気がしたが、今はもう不明瞭だ。わずかがぶりを振って、恵巳の気遣わしげな双眸を見据えた。濡れた夜の空の色。

「すまぬ。……なにもない」

告げても、恵巳の表情は晴れない。それほど深刻な顔をしていたのだろうか。

見上げてくる漆黒から逃げるように、橋姫を見る。彼女はまだ座り込んだまま、肩を震わせていた。

秋雨の視線を追うようにして恵巳も涙を流し続ける橋姫に視線を移す。それから、ぼそりと呟くように言った。

「始めるよ、秋雨」

「承知」

恵巳が橋姫の前に膝をつく。だらりと力無く垂れ下がった彼女の両の手を、片方ずつ両手に持つ。恵巳と橋姫の腕で、円ができる。

少しだけ、橋姫が顔を恵已に向けた。なにをするのかと、問いたげな眼だ。だから恵已は微笑んだ。

「人の流れを外れてしまったあなたの魂をもう一度、人の流れに戻します。そのためには、あなたの強い気持ちが必要なんだ。わたしが言ってること、伝わってるかな」

「あ……ああ……」

橋姫が頷く。恵已の『彼女』の説得で、妖は人の心を思い出したらしい。魂の在り方を歪ませるほどの強い想い、その始まりを取り戻した。

秋雨はそれを、不思議な気持ちで見つめていた。

人としての性を見失い、妖のような異形いぎようになったというのに、『彼女』達の説得で性を取り戻した者を、秋雨はこれまで何人も見てきた。

『彼女』は、確かに人だ。妖ではない。ただ妖と触れ合えるだけで、それ以上に人を超えた存在ではない。

無論、秋雨はそれほど多くの人と関わり合っているわけではないので、どこまで言い切れるかと言えば怪しいのだが。

あるいは『彼女』なら。

秋雨は何度も浮かんで来ては、噛み殺し続けて来た想いを、また胸に抱く。

あるいは『彼女』なら、俺の性を暴くこともできるかもしれぬ……。

だがそれを口に出すことは憚られた。知りたいと願う気持ちは確かにあるのに、『彼女』からは聞きたくないと、無根拠に思う。『彼女』から聞くのが恐いと、どこかで思っている。

下らない性だったら。そう思えばこそその恐怖なのかもしれぬと、自嘲気味に思う。

「あなたはきつと、疲れてるはず。泣くにも、嘆くにも、憎むのにも、疲れてる。違うかな」

恵已の静かな声音が通る。

「ああ……疲れ、た……もう……」

虚脱しきった様子で橋姫が応じた。やつれきった女の姿。そう、今はこの妖になってしまったひとを救うことが第一だ。秋雨自身のことなど今はどうでもいい。

橋姫は縋るように、初めて恵巳の小さな手を握り返した。

「ここに……いても、あのひとの声は、聞こえないのよ……。わたしがどれほど嘆いても、聞こえない……。なのに、わたしはここを、離れられなくて……。あのひとは、ここにいないから……。声は聞こえなくても、……。いなくても……。いるから……」

悲痛な想いだった。魂は感じなくとも、肉体はここにあるのだと、思い込むことで己を慰め、同時に縛り付けていた。

おそらく肉体も、疾うに朽ち果てているだろう。橋姫もきつと、理解している。それでもなお、縋らずにいられない。

なにがしかの一念で妖になってしまった者の、定めのようなものだ。

例えば付喪神のように猫又のように、歳を経て知恵を得て妖となつた者なら、もっと自由に気ままだ。

「あのひと……。あのひと、どこへ行ってしまったの……。わたしに会いに来てはくれないの……」

「来たかもしれないよ。亡くなってすぐに、あなたに会いに行つたかもしれない。でも、あなたは生きていたから、見えなかったのかも」

恵巳も手を握り、橋姫の目をしっかりと見つめて、熱心に告げる。

秋雨は唇を噛み、若月を握り直した。まだ場には気が張り詰めている。

「でも、今はいいわ」橋姫が耐え切れないという様子でかぶりを振った。双眸から、再び人の気が消えかけていた。

「いないのよ……。いないのよ！ わたしがこれだけ、こんなに長い間、想っているのに！」

ぞわ、と橋姫の髪が躍り上がった。

「恵已！」

「だいじょうぶ！」

秋雨が若月を掲げた途端、振り向きもせずに恵已の鋭い声が貫いた。

橋姫の髪はやみくもに暴れ、目標を失っていた。手を振りほどこうと橋姫が腕を引くのだが、恵已は手を放さない。その細い指先が、色を真つ白に変えるほど、きつく、きつく握り締めている。

「放して！ あのひとはいるのよ！ ここにいるの！」

「いないわ！ あなただつてちゃんと知ってる！ あなたの大切なひとは、ここにはいない！」

大音声で叫ぶ橋姫に、負けじと恵已は声を張り上げる。

恵已の小さな身体から、湯気のような気が立ち昇っているのが秋雨には見えた。想いの力だ。橋姫の想いに負けないうちに、懸命に戦っているのだ。

「放してよ！ 放して！ あなたもわたしとあのひとを引き離すのね！」

「放さない！ 絶対にこれ以上、哀しい思いはさせたくない！」

「なによ！ なにも知らないくせに！」

「知らないよ！ あなたが話してくれないから！ わたしはいるのに！ ここにいるのに！ あなたの手を握ってるのに！」

そのやりとりに、秋雨はどこか啞然としてしまう。これまでの責務でも、こんなことが全くなかったわけではない。だが、やはりかなり稀有だった。

主上の私情で妖にまでなった女達は、さめざめと恨み言を言うか、怒りを呪いに変えて変事を起こすかだったのだ。時代が巡り、女達の在り方も変わって来たということなのだろうか。

「聞こえないの？ 判らないの？ 感じないの？ わたしはここにいて、あなたを捕まえてるんだよ……！」

秋雨の感慨になど目もくれず、恵已が続ける。じわりと氷が溶けるように、橋姫の表情の強張りも取れ始めた。

「あなたがいても……あのひとはいわないわ……！」

矛盾しきった言葉達は、彼女の魂がまだ人の気の流れに乗れる可能性だ。

恵巳の胆力が途切れないように、秋雨もそつと気を統一した。

きつ、と恵巳が目にも力を込めて橋姫の双眸を睨みつける。橋姫が一瞬、怯む。

「そつ、いないよ。だからわたしが来た。ここにあなたの大切なひとがいて、あなたが淋しくないなら、わたしなんか来る必要なんてないの」

躍っていた橋姫の髪が力無くぱさりと橋板に落ちた。恵巳の指先から、少し力が抜けたのが秋雨からも見て取れた。

けれど恵巳から立ち昇る気は、弱まらない。

「わたし、妖が好き。人も好き。哀しいのは、イヤ。だから、あなたの、本当の気持ちを聞かせて欲しいの」

「本当の……気持ち……」

「あなたの大切なひとは、もう帰って来ない。ここにいないってことは、もう転生の準備をしてるのかもしれない。わたしには判んないし、あなたの大切なひとをどうすることもできない。」

でも、わたし、あなたの魂を人の流れに戻すことだけはできる。大切なひとと同じように転生すれば、来世で会えるかもしれない。違う大切なひとを見付けるかもしれないよ」

『彼女』が紡ぐのは、呪文でもなければ絵空事でもない。ただ真摯に、事実を述べていくだけだ。

妄執、という言葉がある。妖になるほどの一念とは、まさにそれだ。そして妄執は、事実や現実を見失わせる。だから『彼女』はそれを与える。

それは、優しいものばかりではない。妖にとって、また人にとつても、それは厳しいものである方が多い。

認めないと言って状態の悪化する妖も当然いる。その場合は、人の分別を失っているとみなして、強制的に憎しみの想い、哀しみの

想いを浄化する。ただその場合、人には戻れない。妖のひとりとして、気ままに流れていくしかないのだ。

「ずっと淋しいのも、哀しいのも、疲れたんでしょう？ あなたの口から聞かせて欲しいの。人に、戻りたいって」

しん、と。

一瞬、空気が凪いで、静けさが満ちた。

橋姫は恵巳の目を見つめ、恵巳は女の名を見据えた。

震えるようにして、橋姫の唇が動いた。

「戻り たい……！」

ぼう、と橋姫の輪郭が光を帯びた。恵巳が微笑む。

「ありがとう。あなたはまだ人の気の流れに乗れる。目を瞑って、その気持ちを強く持つてね」

繋いだ手から、光の粒子が恵巳の身体に伝ってくる。

輪は魂の転生の象徴だ。腕で円を作り、そこを通して『彼女』の中の流れに触れ、思い出させる。

ただそれだけ。単純だからして、互いの想いが何よりも結果を左右する。

秋雨はそこまで見届けてから恵巳に背を向け、周囲に意識を散らせた。施術の際が『彼女』はもつとも無防備になる。魂が転化する妨げになるから、結界は使えない。

秋雨は若月を身体の前に構えて、耳を澄ました。

「戻りたい……」

女が囁くのが聞こえる。町に入ってすぐ感じたざわめきは、相変わらずそこにわだかまっていた。だが、迫る気配はない。

背後で強い気の渦巻きを感じる。

「ねえ、わたしも聞いていいかしら……？」

掠れた声があった。応じる恵巳の声は秋雨には届かなかったが、頷きでもしたのだろう。女の声が続く。

「あなたの、お名前……は？」

「恵巳。已に恵まれた子^{すで}って意味」

「そう……素敵なお名前ね。わたしは……わたしの名前を忘れてしまったけれど……」

気の圧が大きくなって、音になって聞こえ始めた。「恵已……聞いて、くれる……？」女の声が途切れがちになる。

秋雨は何故か、その声から意識を逸らせない。

「わたし……本当に、あのひとを愛していたのよ……」
ずきり。

「っ、」

息が詰まるほどの魂の痛み。

音が一層強くなる。その中で、恵已が応えた。

「判るよ」

「……ありがとう……」

その一言を最後に、女の声は音と同時に絶えた。

それでも秋雨は振り向かない。周囲に意識を配り、警戒を続ける。この責務を、何をもって終りとするかは、代々の『彼女』によって違う。だから終りを告げられるまでは、振り向かない。邪魔をしない。

「秋雨」

「うむ」

恵已の声は、まだ『彼女』のそれだった。秋雨は恵已の気配を気に掛けつつ、まだ若月を下ろさない。

向けられる気の、想いの種類が、測り切れない。だが、少なくとも相手から近付いて来るつもりはないようだ。

「詳しい場所が判んないの。どこか判る？」

確かに、周囲に気が満ちている。隠すつもりも、相手にはないらしい。ならば。

「おそらく、この場だ。呼んでみるといい。きっと応じる」

「判った」

衣擦れの音。次いで恵已が、す、と細く息を吸うのが判った。
「これで、良かったかな？」

夜半の町に、恵巳の声が通る。
ほんの少しの間の空いたあと。

「ありがとう……」

歳老いた男の声が、夜風に染み入るようにして応じた。

：陸章

恵巳は橋板の上に直接座って、話を聞いていた。秋雨は既に若月を収めて欄干らんかんにもたれかかり、腕を組んで目を瞑っている。

ふたりの前に、ひとの姿はない。話をしているのは、ふたりがいる橋そのものだ。

「可哀相な子でな。長い間共にいたが、気付いてもらえなんだ。ずっと泣いておったよ」

優しい温かな声で、橋　橋の付喪神は、そう告げた。恵巳は橋板の木目を見つめ、「そつか」と呟く。

「でも、人の流れには戻れたから。もう、大丈夫だと思うよ」

「わたしからも感謝するよ……。近頃はここいらも物騒でな。気が乱れる所為であの子の嘆きもひと際で……。見ておれなかった」

沈んだ声音で橋の付喪神が応じる。

恵巳も返す言葉がなく、俯いたまま沈黙が落ちた。気配で、その沈黙に橋の付喪神が慌てるのを感じた。だがやはり、恵巳にはどうしようもない。

「ところで」

ふいに、秋雨が言う。

そろそろ夜も深まり、空気もしんと冷える。恵巳は二の腕をさすりながら細められた灰色の目を見上げた。目が合うとすぐに秋雨が恵巳の隣に片膝をつき、黒の羽織を脱いで恵巳の肩に掛けてくれた。「すまぬ。戻るか」

顔を覗き込んでくる秋雨の目は、どこまでも恵巳　巫女姫を一番に案じている。

それを知っているからこそ、恵巳は微笑みを浮かべてみせた。

「うっん、大丈夫、ありがとう。なにか訊きたいことがあるんですよ？」

「大したことではない」

「平気だよ？」

それに途中で止められたら気になる。恵巳がそう続けると、秋雨は渋々の体で立ち上がり、橋の中央を見た。

恵巳にはそこになにかがいるようには見えないが、秋雨は長い時を生きた妖だ。恵巳程度の目では見えないものも、見えているのかもしれない。

そもそも人に姿の見える妖より、姿の見えない妖の方が多い。だから長らく、妖は人にとって不可解なものであり続けているのだ。

「ご老体、少しお訊きしてもよろしいか」

「ふむ、なにかな」

そこで、ほんの少し、秋雨はためらうような表情を見せた。骨張った指が、きり、と若月の柄を掴む。

「浅葱色の羽織を着た、人の一団がおるだろう」

「あの浪士組のことだの」

「……あの刃は、何の為のものだ」

静かに、秋雨が言う。恵巳はその顔をまじまじと見つめてしまう。何故秋雨がそれほどまでにあの一団を気に掛けるのか、恵巳には判らない。

秋雨の黒ずくめの衣装が風を孕んで踊った。

「……ふむ」と橋の付喪神が間を空けて、息を吐いた。

「人を護る妖。お主のことは何度も見ておるが、名を聞いていなかったの」

「……今は秋雨という」

「秋雨か。あの者達の剣は、お主と同じだの、秋雨。護るための、刃だ」

「……あれが、か」

秋雨の灰色の目が、驚きと、そしてきつと、恐れのために見開かれる。

ざわりと秋雨の周囲の空気が荒ぶって、恵巳は思わず身を竦ませた。

さつきから、あき、なんだか……ヘン、かも……。

長身の護り手を見上げて、思う。秋雨はそもそも、恵巳に負の感情を見せることはあまりない。いつでも刹那的な前向きさで、長く先に悩むことも過去を悔いることも　少なくとも恵巳の前では、しない。例外は、性が判らないと呻くときくらいだ。そう。

いつでもそうだったからと。あるいは、秋雨は妖だからと。そんな安易な考えに、思案することを放棄していたが。

そんな状態は、不自然だ。

先を思うからこそ秋雨は巫女姫を護り続けてこれたのだろうし、過去を思うからこそ学習してきたはずだ。

だとしたら、今まで押し殺してきたと考えるのが妥当だ。無理をしているようには見えなかったが、そこは恵巳と秋雨では生きた時間が違い過ぎる。もしくは、秋雨すら、押し殺している事実に気付いていないのかもしれない。

「護るということを見失っている剣も、ないことはないがな。時だの数だのというものは、重なり増えるほど、当初の目的を鈍らせるものだ」

ゆつくりと、橋の付喪神が言う。秋雨の指が更に若月の柄を握り絞める。

ぎり、と秋雨が奥歯を鳴らした。

「……あれは、主上に牙を向く勢力だろう」

「お上のことかかみね。そうだの……直接お上に反旗を翻すわけではない、言った通りあれは護る剣だから。ただ、お上を持ち上げる勢力を、削ぐ力ではあるのう」

秋雨が「……」口をつぐみ、恵巳は羽織を搔き合わせた。風が冷たいわけではなかったが、なにか寄る辺が欲しかった。

ふと秋雨が頭を垂れて腰を折り、誰もいないように見える橋の中心に向けて礼をした。

「あい判った。ありがとう」

言つなり、抜刀する。しゃん、と鞘走りの音が渡つて、秋雨の黒衣が翻った。

橋板を蹴り、欄干を足場にして跳躍する。啞然とする恵已の視線の先で、若月が閃く。

鈍い音のあと、橋を揺らすほどの振動を立てて、秋雨と、若月を突き立てられたなにかが落下した。

その揺れでようやく恵已は我に返り、慌てて秋雨の元へ駆け寄った。

秋雨は無造作に若月をそれから引き抜くところだった。それ

黒い鴉は、かろ^{かしず}うじて僅かに動いているが、今にも息絶えそうだ。

その様子を見て、恵已は眉を寄せて口角を下げる。

「殺してはおらん」

振り向いて、秋雨が刀を払った。そこから散る鮮血はない。と、いうことは。

「この子……妖？」

「鴉天狗の遣いだ。呪術で動けぬようにしてある」

かちん、と若月を鞘に納めて、秋雨は恵已に「処置はお主に任せる」と微笑んだ。

改めて恵已は鴉を見る。相変わらず横たわってびくびくしていて、いかにも苦しそうだ。正直、怖い。いや、それよりも気持ち悪いと言った方が適当かもしれない。

「秋雨、これ、もうちょっとなんとかならないの？」

「とは？」

「もうちょっと……緩めるとか。なんだか苦しそう」

「縛りつけた状態で暴れたらこうなるだろう。緩めればお主に害を為す。できぬ」

一蹴だ。理由は理解できたが、やはりあまり近寄りたくない。

「……こんばんは」

だがわがままばかりも言っていられない。恵已は秋雨の羽織が肩から落ちないよう、手を交差させて左右の衿を持ちながらしゃがみ

込んだ。

鴉の真っ赤な目が、つい、と恵已を見る。藻掻いていた動きが止まる。

さて、処置と言われたところでどうしようか。確かに町の気を鎮めるのが今回の責務だが、妖だからと言って片っ端から問答無用に浄化していったのでは、妖達の怒りを買う。ましてや、主従関係のあるものなら尚更だ。

人と妖は、うまく共存していかなくてはいけない。

だが、秋雨が意味もなくいきなり斬り掛かるなどということは、考えがたい。

「なにをしてたの？」

斬り掛かられるに値するなにかをしていたのではないか。そう踏んで、恵已は問いを口にした。

鴉は黒い嘴を開いて、ぎぎい、と鳴いた。

「話せないの？」

ぎぎい。

恵已は困って秋雨を見る。秋雨も困ったように肩を竦めてみせた。

「殺せ、と」

「そんな！」

「天狗の遣いである誇りがあるらしい。このように不様に捕まったのが許せんのだろう」

秋雨の言葉は淡々として、ためらいもない。やはり恵已に害を為しかねないことをしていたのだろう。

恵已は眉尻を下げてから、鴉を見た。動きを止めたその目には、理性の光すらあるように見える。

天狗は好戦的な妖だ。人の世を乱し、戦いを好む。またそうである一方で、修行を積んだ行者の転化したものであったりもして、山の神として崇められることもある。

恵已達の住む集落も、その山を治めるひとりの天狗の守護を受けることで、人の目から姿をくらませていられるのだ。つまり、迂闊

なことはできない。

「秋雨」

「うむ」

「喋らせられないかな？ この子の主の、天狗の意図」

ぎぎい。鴉が鳴く。

「言わぬ、と」

「呪術で無理にでもー、とか」

「……万能ではないぞ」

恵已がおどけて言う、秋雨が優しげに苦笑した。

そんなことを言われても、恵已は秋雨がなにができるのかなど把握していないのだから、仕方ない。

じゃあ、と鴉を見つめたまま、問うた。

「秋雨はどうして、この子を捕えたの？ ずっと見てたから、とか？」

「そうだな。ここに着いてから存在の気配はずっとあったが、話が終った途端に去ろうとしたので捕まえた、というところだ」

「じゃあ、たまたま話が聞こえただけかもしれないの？」

「うむ。だが、話の内容を報告しようとした可能性も否めぬ」

秋雨の話す間、ずっと恵已は鴉を見ていたが、ぴくりとも反応を示さなかった。その様子に、恵已は息を吐いた。

す、と立ち上がると、紫蘇色の袴の裾を払った。

「疑わしきは罰せず、かな。秋雨」

「承知」

恵已が秋雨に振り返ると、秋雨は鴉の前 恵已と鴉の間 に

膝をつき、若月を抜いて自らの額に峰を当てた。

濃灰色の髪が瞬時浮いて、横たわっていた鴉がばたたと羽ばたきながら起き上がり、ひよこひよこ数歩距離を取ったあと、すぐさま空へと飛び立った。あつと言う間にその黒い姿は夜の闇に溶ける。

それを見送って、恵已は見えない橋の付喪神へ「お騒がせしまし

た」と詫びた。老人の声は柔らかく、

「構わんよ。昔から、橋の上では色々なことが起こるもんだ」と、言ってくれた。

恵巳は微笑み、それから隣に立った秋雨を見る。

「ね、あの子の主つて、松風坊まつかぜじゃないよね？」

それが恵巳達の集落を守護している天狗の名だ。ふむ、と秋雨は首を傾げてから、大真面目な顔で応えた。

「あの方は鴉でなく狗くひん賓を連れているから、違うとは思うが。まあ、あの者には影追いの術をかけておいたし。しばしでそれも知れるだろう」

「……」

「どうした、恵巳」

秋雨の言葉に、恵巳は唇を引き結び、目を開いて平然として若月を収め直す護り手を見た。

どうしたもこうしたもないものだ。

秋雨が万能ではないと言うから、ただの思い過ごしかもしれないと匂わせるから、恵巳は気になりつつも諦めることにしたというのに。

「いつ?!」

食いかかるようにして問うと、秋雨は幼子のようにきょとんと灰色の目を丸くする。

「さて……あの者が主の元へ着いて、影に潜ませた俺の術が返って来るまでだからな。いつと明言はできぬ」

「違う！ いつそんな術かけたのかってこと！」

「縛りの術を解くと同時に」

「……」

あつさりと言われると、もはや返す言葉もない。

以前から呪術が得意だということは知っていたし、だから一度、無理を承知で要請したのだが。

例え万能でなくても、相当のことはできるのではないだろうか。

恵巳は色々言いたい気持ちを抑えて、なんとかひとつだけに言うことを絞った。

「……秋雨、わたしはあなたがなにをできるか、知らないから」
長く巫女姫に寄り添い続けた秋雨だからこそ、誤解しているかもしれない。恵巳は巫女姫だが、巫女姫は恵巳だけではないのだ。

「次の責務までには、ちゃんと教えるように」

「し、承知……」

普段より意識的にぐっと低くした声に、秋雨もなにかを感じ取ったらしい。笑みを引き攣らせながら、ぎこちなく頷いた。

それを確認して、恵巳はもう一度橋の付喪神へ挨拶をして、くりと秋雨に振り向いた。

勢いをつければ重い振袖が浮いて、舞うように見える。それを見るのが恵巳は好きだ。

「今日はここまで！」

町の気を乱す妖はおそらくまだまだ、この色々なものの雑居する都に巣くっているだろう。だが、ひと晩ですべてを終らせられるほど、この責務は甘くはない。

集中力が途切れれば、恵巳を介して妖の魂を人の流れに戻すはずが、恵巳こそ妖の流れに引きずり込まれてしまう。そんな本末転倒は、望まない。

だから、ここまで。

恵巳の初めての責務は、とりあえず完了した。

息を吸って、微笑んで。秋雨に向けて、両の手を伸ばす。

「帰ろ？ あき」

「承知」

穏やかに言って、秋雨は恵巳の髪をくしゃくしゃと撫でてから、

恵巳の右手を左手で取った。

秋雨のことで、判らないことは山のようにある。

けれど、繋いだ手の温かさは、確かなものだ。

知らないのならば、これから知っていけばいい。早くに責を継い

だ分、過ぐす時間は長くなるのだから、焦る必要はない。
だから、今は。

恵巳は秋雨の骨張った指先を見つめて、それから笑った。

幕間：ある晴れた日

青みがかって見える濃灰色の髪は少し癖があつて、髪よりは明るい灰色の双眸はおおよそ、なにを考えているか悟らせない。

寒色や無彩色の着物を好み、普段の袴は縹色^{はなだ}だが、責務の際は全身真っ黒の服装に改める。

いつでも佩いている愛刀・若月の鞘色は黒の漆塗りで、ささやかにきらきらしく螺鈿^{らでん}が散っている。柄巻^{つかまき}は鮮やかな緋色だ。実は恵巳の耳の前につけた鈴の紐は、この色を意識して緋色にした。当人には絶対言わないが。

長身で瘦躯。既に何年生きているのかも定かでないような大妖だが、妖の中でも身のこなしは軽く、呪術を得意している。

「……ちよつと違うか」

彼は性が判らない。つまり、転化の際の記憶がない。いつ転化したのか判らないのだから、何年妖として生きているのか判らないのは当然だ。

見た目は青年。多くの妖に当てはまるように、彼らは年を経ても人のようには容貌が変わらないから、それ以上に言い表すのは難しい。

「それと性格はあ……ヘタレでー、頑固でー、」

「なにをしているのだ？ 恵巳」

「わあ！」

いきなり声を掛けられて、実際に全身が飛び跳ねるほど驚いた。顔の横の鈴が、りりん、と場違いに涼しげな音を立てる。

振り向けばそこには、まさに今しがたまで特徴を列記していた護り手が、不思議そうな顔で腰を屈めていた。

「わ、あ、だめ、見ちゃだめっ！」

「いや、無論ひとの帳面を覗くような無作法はせぬが……。呼んでも返事がなかったからな。眠っているならなにか持って来ようかと」

「大丈夫！ 起きてる！」

「そのようだな」

く、と口の端を上げて苦笑を浮かべると、秋雨は背を伸ばして、なにも言わずにくしゃくしゃと恵已の頭を撫でた。

帳面を開いて書きものなんてしていたから、勉強をしているとも思われたのかもしれない。例えそうは思っていなくても、恵已が見るなと言えば秋雨は絶対に見ない。

「なにか用事？」

責務のないときは、恵已は勉強をして責務に備えて学ぶだけだ。それさえ済ませばあとはやることはない。ただ神に祈り、住む場所食べるもの着る服があることに感謝し、生きるだけだ。

「用事と言うほどのことでもないが」

歯切れの悪い言葉は、勉強を邪魔してまで提案するほどのことではないという、生真面目な秋雨の葛藤だ。

「？」

恵已は首を傾げた。

なんだろうと思う。母の元へは朝方、共に見舞ったばかりだし、そもそも責務をその双肩から下ろした母の体調は順調に回復に向かい、それほど心配する必要もなくなっていて、連れ立って見舞うことも減っているというのに。

秋雨は困ったように笑って、「やはり良い」と言って身を翻そうとした。慌てて恵已は身体を捻り、縹色の袴の裾を掴んだ。

「途中で喋るの止めるの、やめてって言ってるでしょ！」

恵已を優先するあまりに、どんなことを途切っても平気なのだから、恵已としては気になって仕方ない。

「しかし勉強を中断させるわけにはいかぬ」しかもこんなときはやっぱり無駄に頑固なのだ。ただ少し話すくらい、構わないだろうに。

「勉強じゃないから！」

「……む？」

「これ、勉強してたわけじゃないから」

「そうなのか」

そう言っただけでなく、秋雨は片膝について、恵巳と視線を合わせた。気掛かりがなくなると、秋雨の顔からおずおずとした遠慮がなくなる。

「出掛けぬか？」

「……どこに？」

予想だにしない提案に、恵巳はかろうじてそれだけを返す。「そうだな」と、秋雨はまさに今、思案する。

そして僅かな時間のあと、真面目な表情のまま、

「どこでもいいのだが」

と、言った。

「なにそれ？」

意味の判らない秋雨の台詞に、袴を掴んでいた恵巳の手がぱたりと畳に落ちる。

だが、秋雨の穏やかな顔は変わらない。

「天気がいいぞ。どこに行くのも気分がいい」

「……それだけ？」

「ずっと家に籠っていると、脚が弱るぞ」

「それは、そうだけど」

「む、じゃあ、ええと」

「……結局、大した理由もないんだ？」

「……うむ」

恵巳の問いに、秋雨がまた困ったように破顔した。

秋雨の友人がかつて、秋雨の性は物ではないに違いないと秋雨から隠れるように言っていたのを思い出す。まさか命じなければ、じつとしていられないとも言っただろうか。

だが、それは恵巳が勉強をしているときにでも散々好きにしているはずだ。

うん？

はず、という言葉に、なんだか引つ掛かりを覚える。そう言えば恵已は、秋雨が普段なにをして過ごしているかさえ知らないではないか。

思っ、気持ち沈む。いくら知っていることを書き出してみても、知らない範囲のことに思い及ばないのでは、なにも変わらない。

今度は知らないことを挙げてみて、ひとつずつ知っていこうか。そんな風にさえ思った。が。

「気分ではないか？」

「」

窺って来る秋雨に、恵已はなんだか気が抜けた。

帳面に向かい合って知らないところを数えていくくらいなら、一緒に行動してどんどん知っていった方が有意義だ。

片膝をついたままの秋雨の肩に手を置いて、跳ねるように恵已は立ち上がった。

「うつん、行く！」

言つと、秋雨も嬉しそうに灰色の目を細めた。

「うむ、行こう」

するりと少しの衣擦れの音だけ立てて、秋雨も立ち上がる。部屋を出て、気に入りの藤色の鼻緒の下駄を引つ掛けた恵已が彼の羽織の袖を掴むと、秋雨はちょっと振り向いて、尖った犬歯を見せて悪戯っぽく笑う。

「このように俺に触れてくるのは、お主くらいだぞ」

甘えている、と暗に言っているのだろう。子供だと笑っているのかもしれない。

恵已はツンと顎を上げた。

「いいもーん。わたしまだ十二だから」

歴代の巫女姫よりも四年も早く責務について、母にもあまり会えないのだ。身近な『兄』に甘えるくらい、大目に見て欲しい。

恵已が悪びれずに言つと、秋雨はまったくしゃくしゃくと頭を撫でて

きた。頭を押さえつけられる形になって、秋雨の表情は窺えない。

「行くか」と逆に手を取られ、引かれたときには当然、秋雨は前を向いていて、だから恵已はこっそりと笑う。

不器用ながらも、秋雨なりに甘やかしてくれているのだと、恵已には判る。

「ねー、あき」

「む？」

「行くところ決まってるなら、わたし、あきの友達に会いたい」

ならば精一杯甘えてやろうと考えて言うと、秋雨はちら、と恵已を見る。恵已はにっこりと笑う。

「……」

少し悩むような間があって、それから秋雨はまた前を向いた。

「……行くか」

「うんっ」

ふたり分の下駄が、からんと軽い音を立てた。

式幕：壹章

愛した、ひとがいた。

陽が雄大な空を橙色に染め上げる。陽から離れるにつれて空は青みを帯び、恵已が部屋窓から見上げられるぎりぎりのところではもはや、濃紺に移り変わっていた。

それと同時に、足元へ這い寄るように夜の冷気が満ちてくる。気の早い星が、煌々と存在を主張し始める。夜が来る。

恵已は耳の前の髪に結んだ鈴に、そつと触れる。ひと足先に夜気を吸い込んだそれは、静かに指先へ冷たさを伝えた。

息を吐いて、恵已はゆっくりと窓を閉めた。今日も待ちびとは来なかった。

「なにかあったのかな……」

待つ相手は、この山を統べ、恵已達の住まう集落を守護する大天狗。名を松風という。

初めての責務をこなして、もうひと月経とうとしている。

あるとき、秋雨に術をかけられた鴉は結局、松風坊の遣いではなかった。秋雨も恵已も、すべての妖を把握しているわけではないので、鴉の主の天狗が誰で、どういう目的だったのかは判らず仕舞いだ。

とにかく、松風坊でないのならそれはそれで良かった。

巫女姫は初めての責務を果たしてようやく、妖達にもその力を認められるらしく、責務のあとに松風坊に挨拶をすることになっている。もしその挨拶の前に、遣いの鴉に監視させていたのだとしたら、恵已は既に信頼を失っているということではないかと思えたのだ。

安堵しつつ、松風坊にお目通り願うと秋雨を介して伝えたところ、日暮れまでに松風坊の方から訪うとの返答があった。そこで日々恵已は待っているのだが。

いかんせん、その口約には日付の指定がなかった。秋雨によると、松風坊のような大妖になると、時間の感覚など人とは大きく異なっていることもあるらしい。

となれば、いつまで待てばいいのか、皆目見当もつかない。

恵已は巫女姫と言えど、所詮一介の人だ。大妖たる松風坊に何度も便りをやって、煩わせるわけにはいかなかった。

せめて次の責務が入る予定の日取りだけでも伝えるべきだろうか。それとも、松風坊の訪問を受けるまで、責務の予定をこそずらすべきだろうか。ここ数日、恵已はそればかりを考えている。

「どう思う、あき？」

「……む？」

部屋の外、廊下にいるはずの秋雨に不意に声をかけると、考えごとでもしていたのか、ややあってからばけつとした声が応じた。

「松風坊に連絡、入れた方がいいかなあ？」

それもいつものことだと気にせず続けると、「あー…」と更にぼけぼけな返答が来た。

さすがに恵已も怪訝けげんに感じて「あき？」廊下を窺った。

廊下に座り込み、若月を抱きかかえて、俯く姿。声を掛けても顔を上げない。

「どうしたの、あき。具合悪いの？」

恵已はかつてこの護り手が体調不良を訴えるのを聞いたことがない。物語などでは、妖が体調を崩すのはいつも、苦手なものに近付いたりしたときだ。そう思って周囲を見回してみても、普段と変わるところはない。

「あき、」

膝について、手を伸ばす。

秋雨の肩に触れる直前、その手を掴まれた。

「！」

「……、……じ……」

「え？」

呻くように囁かれた言葉。聞き取れずに恵巳が問い返した途端、がばりと秋雨が顔を上げた。その灰色の目は、恵巳と同じくらい丸く見開かれている。

「あ、あき？」

「え、い？」

恵巳の五度目の呼び掛けに、やっと秋雨は返事らしい返事をした。不安定に揺れた双眸が、恵巳の顔で視線を結ぶ。それから「！」慌てて、若月を掴んだ。

「誰ぞ来なかったか」

「だ、誰も来てないよ……それよりもどうしたの、あき？ 何かヘンだったけど……」

今もどこか様子がおかしい。こめかみにはうつすらと汗が浮いているほどだ。時節は冬にさしかかろうというのに。

しばらく答えあぐねるように秋雨は口を閉ざしていたが、ひとつ息を吐くと、若月とは逆の手でいつものように、くしゃくしゃと恵巳の頭を撫でた。

「すまぬ。お主にいらぬ心配をかけた」

「なにかあったの？」

「……俺の結界を逆に利用して、俺に働き掛けて来た者がおった」

「……それ、」想像もなかったことが目の前で起こっていたという事実、恵巳は言葉を失う。すると秋雨はまた困ったように笑うのだ。

「大丈夫、結界は破れてはおらぬ。お主に迫る危険はない」

「そういうことじゃないでしょ？！ あきはどのなの！ 痛いところとかはないの？ その術はもう解けたの？」

両肩を掴んでがくがく揺さぶる。半分以上は単なる八つ当たりだ。秋雨がちゃんと教えてくれないから 違う。秋雨が、秋雨をない

がしろにするから。

秋雨にとって巫女姫がなによりも優先すべきもので、護るべき対象であることは、恵已にももちろん理解できる。

だが。

恵已が巫女姫の責を負うと言ったとき、八千代は泣いたのだ。

結局のところ、誰かを犠牲にして得た結果など、誰も幸せにはしないのだろう。恵已はそれを、身をもつて学んでいた。

護るなどと言わない。護ってもらわないと自分が非力であることも判っている。ただ秋雨にも、もっと自分のことを考えるようにして欲しい。

「どうなの？」

恵已の切実な想いにも関わらず、秋雨はきよんとする。腹立たい気持ちもあったが、その表情が普段の秋雨のものだったから、恵已は少しだけほっとした。

「あ、うむ。とりあえず今は術の干渉はない、が」

「が？　どっか痛いのか？」

「客人だ、恵已」

口許を引き締めて、秋雨は恵已の部屋を指差した。

「え？」今度は恵已が、秋雨の言葉においてきぼりを食らう。首だけで指の先へ振り向いて、それきりの恵已を、秋雨が腕を掴んで立たせた。

突然の来訪者は、脂気のない肩までの白い蓬髪ほうまつに、小綺麗な山伏の衣装、ひとつしか齒のない高下駄の、天狗だった。

齢は八百を越えたところだという。天狗にしてみれば珍しい歳ではないが、容姿が十代の半ばにしか見えない少年なので、やや違和感が残る。切れ長の目尻には人里でなにを学んだのか、紅が挿してあるから尚更だ。

その天狗は、乙竹と名乗った。おとたけ

窓の外に設けられた手摺りに腰掛け、乙竹はぶらぶらと脚を揺り動かしながら続ける。

「呼ぶときはただの乙竹でいい。どうもあの『坊』ってのは性に合わなくてね。あ、と、僕のことはどうでもいいか」

「え、と」

軽口を叩く乙竹に、恵巳はどう対応したものか判らないようだった。

どうにも齢と言動の落差のある妖だった。さが性が山の神と呼ばれることすらある天狗だと思つと、より扱いにくい。

秋雨は恵巳を背にかばい、乙竹を見据えた。正式な齢は判らないが、年だけは経ている。八百という数字をむやみに恐れるようなことはない。

「して、用件は？」

彼が松風の手の者であることは判っている。契約を結んだかの天狗には、結界に傷つくことなく、秋雨に来訪を告げる術すべを伝えてあるのだ。

ひょいと乙竹は眉を跳ね上げた。

「うん、それがね。松風坊が新しい巫女姫を訪うことになってたろう。ところが松風坊が、近頃の人の気にあてられてしまつて」

「松風坊、どうかなさつたんですかっ？」

恵巳が間髪入れず、噛み付くように問う。乙竹は驚いた様子もなく、「大したことはない」口角を上げた。

「松風坊は長く山に籠つて、少し清廉になり過ぎてた。加えて近頃、人の気の流れがまた荒れ始めたから、その差異に心身の調整がうまく行かなかつただけさ」

「大丈夫、なんですか……？」

「少し休めばまた慣れる。我々天狗つてのは、もともと俗っぽいものだからね」

「……よかつた……」

藤色の着物の衿を握り締め、心から安堵の息をつく恵已を、乙竹は面白そうに眺める。左脚の腿に右足の足首を載せ、その右足の膝に頬杖をついた。

「ふうん？ 今度の巫女姫はずいぶん小さいんだな」

嘲りではなく、彼の単なる感想だと判る呟き。

恵已は少しだけ微笑んで、ごまかした。細かい事情を今乙竹に話したところで、なににもならない。

「まあその、新しい巫女姫を松風坊が回復するまで待たせるのも悪いって言うんでね。僕があんたを祝福しに来たというわけ」

あつさり告げると、乙竹は手摺りから飛び降り、秋雨の前に立った。その背丈は秋雨の肩ほどしかないから、秋雨は彼を見下ろす形になる。

不敵に笑う少年の顔が、臆することなく真つ直ぐに秋雨に向けられる。

じろじろと不躰なまでに観察してくるのを、秋雨は無表情のまま観察する。どうも恵已ではなく、今は己に興味があるらしいと感じたので、横に退こうともしなかった。

そして、ぽつりと乙竹は言った。

「ふうん 全く効かなかった、のかな？」

「なにが、」

問い返しかけて、思い至る。

「……さっき、の」

結界を通して伝わった、あの術。頭の芯を溶かすような、焼け付くような、あの痛み。

その直後の乙竹の来訪に、術者は彼ではないかと元より疑ってはいたが、こんな形で露呈するとは思わなかった。

「おっと、そんな恐い顔すんなよ。僕は良かれと思ってやったんだから」

睨みつけた途端、おどけたように一步下がって乙竹が言う。

「それに、あんたの大事な巫女姫にはなにもしてないだろう？ な

にをする気もないしな」

「……」

松風の遣いに、手荒なことはできない。そもそも、『彼女』に害が及ばないのならば、秋雨がその爪を使う理由も、ない。

秋雨の爪は、『彼女』のためにある。

ぎり、と唇を噛み締めた秋雨の考えを見てとったのか、乙竹はにこりと笑った。

「あんた、有名なんだよ。長きに渡って人を守護し続ける、性の知れない妖……。ホントによく判らない。松風坊によれば、あんたは僕よりも長い時を生きてるんだってね」

「……」

「それだけ長い間、人を護り続けるあんたの性は何なのか。気になるだろう？ あんた自身もさ。だから 引きずり出してやろうとしただけさ」

「っ、」

ちらりと背後の恵已を見る。何故だか不安げな顔をして、秋雨の羽織を握り締めている。「俺は」口を開きかけた秋雨の先を制して、とん、と乙竹は秋雨の胸に指を突き付けた。

「気持ち悪いんだよ、あんたの存在が」

ところが乙竹が最後まで台詞を終える前に、その指は弾かれた。弾いたのは、秋雨の背後から飛び出した、恵已の腕だった。

「……へえ？」

「わ、わたしの、ううん、『わたし達』の護り手を侮辱するのは、見過ごせません……っ」

きつく睨めつけるその漆黒の双眸に宿る意思は、秋雨すらも怯むほど強いものだったが、さすがに突き出された細い腕は震えていた。

「恵已、」秋雨は恵已の薄い肩に手を置こうとする。だがその前に恵已は指を握り込んで、決然と言い切った。

りん、と鈴が鳴る。

「わたしはまだ十二年しか生きてない。わたしにはあなたにこんな

口を利く権利なんてないかもしれない。でも『わたし達』には、あるはずです」

恵巳の視線に射抜かれて、八百年の時を過ごした天狗は、しばらく声を失って啞然と少女を見つめていた。

おそらく自らも乙竹と似たような表情をしているのだろうと秋雨は思う。

恵巳は聡い子だ。幼い頃より大人に囲まれ、たくさんのを学を積んで生きてきた。同年代の子供達と遊ぶことなどできなかったし、そもそもこの集落には、恵巳と同年代の子供など数えるほどしかない。

だからこそ恵巳は、自らの属する『家族』にひどく優しい。それは八千代や祖先のように、実際に血の繋がりのある者だけではなく、教育係であるきづや食事を作ってくれる者達も含まれることは秋雨も理解していた。

だが、まさかそこに秋雨さえも含まれるとは思ひもなかった。

空白が落ちて、それから乙竹の笑い声が響いた。ぎよっと身を強張らせたのは、秋雨だけではない。

驚く主従の前で、乙竹は床に膝をつき、恵巳に向けて頭を垂れた。連綿と続く神に額づく人の娘。新しき時紡ぐ、汝の名は？」

乙竹の突然の変貌に、恵巳は眼を白黒させながらも名乗る。少し声がかすれていたが、顔を上げた乙竹の表情は、あくまで真剣だ。

「大天狗松風に代わり、鴉天狗乙竹、汝の身、汝の道を、魂より寿命ぐ。変わらぬ親愛を、ここに」

厳かに告げ、乙竹は恵巳の手の甲を自らの額に当てた。

何度も見て来た、天狗との契約だ。これで恵巳は少なくとも松風の配下の妖に認められたことになる。

重さを感じさせない動きで乙竹が立ち上がり、呆然としている恵巳に言った。

「恵巳、あんたのしもべは気に食わないけど、あんたのことは気に入った。これからよろしくな」

「は、はい……」

何故気に入られたのか全く飲み込めていない恵巳は、とりあえずと言った様子で頷いた。

秋雨はそれを、どうしようもなく複雑な気持ちで眺める。胸に群雲が掛かったような気分だ。

原因不明の胸の不快感を紛らわすために、若月の柄をきつく握った。

・式章

「僕は頼りになるぞ。あんなぼけつとした妖よりずっといい」

「……え、えーと」

「別にあいつじゃなけりやいけないってことはないんだろう？　だつたら天狗が護り手って方が、箔がつくじゃないか」

「あ、あのっ！」

延々と続く『自分』の売り込みに、ようやく恵巳は割り込むことができた。

部屋の外、窓の向こうの手摺りで囲われた僅かな場所にいる彼

乙竹は、きょとんとして口を閉じた。そもそもそこは、星を見たり景色を見たりするための場所で、手摺りに腰かけて室内の者と談話をするためのものではない。

はあ、と息をついて、恵巳は乙竹の黒みがかった赤の目を見つめた。

「……乙竹さん。あなた、どうして毎日来るんですか？」

松風の代理を務めるほどの、地位の高い天狗なのではないのか。ずっと訊きたかったことを、やっと問うことができた。

乙竹は、にいと口の端を上げて瞬きする。

「ずっと言ってるだろ、恵巳。あいつの代わりに、あんたに仕えたいからさ」

「どうして？」

「それも言った。あいつは気に食わないが、あんたのことは気に入ったからだ」

「……」

雲のように捕らえどころのない返答に、恵巳は対処に困る。

三日前、彼と契約を交わしてからというもの、狙ったように秋雨の不在時には必ず、乙竹はやってくる。

ただ、恵巳自身と恵巳の部屋には秋雨の結界が張られているから、

乙竹はこうして窓の外に通いつめているわけだ。

気に掛けなければとりあえずのところ害はないようなのだが、松風の配下、しかも彼の代理として契約を交わしに来るほどの天狗を、邪険に扱うこともできない。

「……うーん」

どうしたものかと恵巳は思う。恵巳には秋雨以外の妖に護り手になってもらう気はさらさらないし、乙竹がそれほど露骨に秋雨を嫌うのならば、逆に恵巳達のことなど放っておけばいい。だがそう言ってもきつと乙竹は「恵巳は気に入った」と言うのだろう。

そもそも、山の神と呼ばれることもある天狗を従えるというのは、巫女姫として許されるのだろうか。

恵巳は乙竹をちらりと盗み見る。相変わらず手摺りに腰掛け、脚を交互にぶらつかせる彼を、恵巳は嫌いになれなかった。もちろん秋雨への仕打ちは許せないが、もしも。

もしも、本当にあきが、性を取り戻してたら。

そんなことを、思わずにはいられないのだ。性を取り戻したなら、もつと打ち解けてはくれないか。心を開いてはくれないか。秋雨自身のことを、考えるようになってはくれないか。そう、思う。

でもあき、つらそうだったな……。

秋雨が苦しむような強行策は取らない方がいいのか、多少の苦痛は付きものと割り切るべきなのか。恵巳にそんな判断は当然、できない。

思案に沈んでいた恵巳は、ふと顔を上げた。乙竹が少し眉を上げて、表情で恵巳の言葉を促す。

部屋の窓辺に座っている恵巳は、今度はまっすぐに乙竹を見つめた。

「訊きたかったんですが」

「うん」

「乙竹さんは、鴉天狗だっておっしゃいましたよね。先日、都に遣いを出しましたか？」

あの鴉。

「いや？」

首を捻って乙竹はあっさりと言った。あまりのあっけなさに、恵己の方こそ目を見開いたくらいだ。

「ち、違うんですか？」

「ああいや、確かに僕は鴉を使役する鴉天狗だ。けど、今は松風坊が人の気に当てられているからな。都になんて放って、荒れた人の気を持ち帰るわけにはいかない。ここ最近はずっと、大人しく皆、山籠りしている」

淡々と述べられるまっとうな説明。理に適ってはいる。

すっかり恵己は、あの鴉は乙竹の遣いに違いはないと思い込んでいた。遣いを捕らえられたがために秋雨を嫌っているのだらうと、勝手に理由をつけていたのだが。

「じゃあ、どうしてあきが、……秋雨が嫌いなんですか？」

「……さっきから話がぼんぽん飛んでるように思うけど」

苦笑してから乙竹は答えた。

暗い赤の双眸が眇められる。

「言った通りだ。気持ち悪いんだよ。妖つてのはそのものの性とか、なにがしかの一念に衝き動かされるもんだ。まあ そうした一念を超越して『何のために存在しているのか曖昧でありながら、他に影響力を持つもの』、それが神だとも言える。僕ら天狗がその筆頭かな」

そこまで言つて、乙竹は懐から葉扇を取り出し、口許を隠した。だがな。乙竹は声色を低くして、続ける。

「あいつは何だ？ なるほど確かに神とも呼んで差し支えない程度には生きているようだが、神とは誰に測ることもできないほどに気ままなものだぞ。」

あいつのように、『責』を負った神なんてのは、いない」

同じ妖として、あの生き方は、気持ち悪い。初めに言った言葉を繰り返して、乙竹はそう結んだ。

恵已は着物の膝を握り、乙竹の言った意味を考える。

もちろん、すべての妖が乙竹のように感じるわけではないのだろう。現に秋雨には、朔早や文女といった友人がいるくらいだ。だが、妖ではない恵已にも、乙竹の言わんとするところは理解できるような気がした。

自分達と同類でありながら、異質であることへの不安。

それなら、判る。となると、恵已が、巫女姫が、秋雨を責務から解き放てばいいのだろうか。

恵已は眉間に力を込めた。
けれど。

『何のために存在しているのか』。それは以前、秋雨自身も言っていた。性が判らないからそれも判らないと、淋しそうな表情で。

秋雨の性が知れないからといって一番苦しんでいるのは、他ならぬ秋雨だ。他者がそれを、責めるわけにはいかないはずだ。

「確かにあきは、自分のこと考えないくらい、責務に殉じてる。けどわたしは、それがあきの『存在してる理由』だと思うし、だからわたしは勝手に、それを奪うことはできない……」

たわいない子供の言葉だと、秋雨は思ったかもしれない。それでも、そうかもしれないと彼は微笑んでくれたのだ。

乙竹は葉扇で口許を隠したまま、黙って恵已を見ている。

どうしてこんなことを言っているんだろう。思いはするのに、止まらなかった。

「それに、わたしにとってあきは大切な家族だし、わたしは、あきがいないと淋しいから……」

再び考えをまとめるべく俯いて口を閉ざした恵已は、しばらく場を満たした沈黙に気付かなかった。

ふと、くつくつと忍び笑いが聞こえて、我に返る。「あっ」顔を上げると、扇を仕舞った乙竹が、肩を震わせて笑っていた。

自分がなにを言ったのか、恵已は必死に思い返す。だが、考えるのに精一杯で、あまり覚えていない。

「え、えつと……わたし、なにか変なこと言いました……？」

恐る恐る訊いてみる。その様子が愉快らしく、更に乙竹は空を仰ぐようにして高々と笑い声を上げた。

「どうもあんたは、自分の中で勝手に話を進める癖があるみたいだな。確かに賢しい。可哀相なくらいだ」

「え……？」

「思うにあんたは、大切なこと　重大なこととは違う、けどあんたにとっては大きな意味を持つことを、誰にも相談できない環境にいるんだろう。違うか？」

「……そんな、こと……」

否定できなかった。

どくと、心の臓の音が聞こえたような気がした。

「だから勝手に考えて、ひとりで動いてしまふ。なまじ賢しいから、できてしまふ。やってしまふ。十二でそれは、あまりに可哀相だと僕なんかは思っけどね」

見た目には乙竹も恵巳と似たようなものなのだが、やはり丸きり違う。見透かされたようで　いや、気付かされたようで、恵巳は怖くなる。

だって、わがままなど言える立場ではないのだ。

宙空を意味もなく注視して、恵巳は言葉を飲み込む。くつくつと、また乙竹が忍びやかに笑う。

「ああいや、そんな難しく考えないでくれ。あんたにはそういう癖があるなっていう、ただの僕の感想だから。」

つまり恵巳、あんたはあのぼけつとした妖が、他の奴なんか考えられないくらい好きで、例えあいつの性が何だか判らなくても構わないから傍にいて欲しいと、そういうことだろう？」

「え、と……」　ずばりと言われて、ためらう。

そう、なのだ。

どれだけ回り道して理屈を付けたところで、恵巳の気持ちは、そんな子供っぽい独占欲の塊だ。秋雨の気持ちを考えているようなふ

りをして、自分の気持ちを優先させて、いた。

なんて、勝手なんだろう。

思って恵巳は俯き、着物の膝をきつくきつく握り締める。鼻がツンと痛くなる。視界が揺らぐ。ヤバイ、泣く。

恵巳が懸命に涙を堪えていたら、はあ、と乙竹が息を吐いた。

「今ほどこの結界を恨めしく思ったことはないな」

「……？」

「あいつはあんたの、守護者ではあるが庇護者ではないってところかな。……恵巳、僕はあんたを責めようと思ってこんなことを言っただんじゃない」

すらすらと言われた言葉の意味が理解できず、ただ乙竹を見上げる。

乙竹は対処に困ったように、ぽりぽりと首筋を掻いた。明らかに呆れ顔だが、どこか柔らかい表情だ。

「あんたはもう少し、甘えてもいいんじゃないか、って話さ。それが自分で許せないって言うなら、話すことから始めるんだな」

「話す……」

「誰でもいい、あのぼけつとした妖でもまあいいし、僕だって聞いてやる。言いたいことがあったら言って、判らないことがあるなら今の内に訊いておくんだな。歳を喰うと、どうせやりたくてもできなくなる」

つまらなそうに、首筋に手を置いたままで乙竹はそう続けた。

八百年の時を経た天狗の台詞には、恵巳が思わず頷いてしまうほどの重みがあった。

「判り ました」

「良し」

涙は、どこかに行っていた。

乙竹が初めて嬉しそうに笑う。そして、「じゃあ早速僕からだが」と言った。

その頃秋雨は、八千代の見舞いに訪れていた。

責を下ろし、当代の『彼女』ではなくなったとは言え、生まれたときから今までずっと付き従ってきた主だ。新たな主に仕えることになったからと言って、ないがしろにはできない。

倒れた当初から比べて、八千代の血色は目に見えて良くなった。髪つやの艶も良くなったようだ。

訪れるたびにそうした変化に目を留めて、秋雨は肩の力を抜く。秋雨にとって元主である以前に、八千代は恵已の母だ。恵已のためにも、体力を取り戻してもらわなくては困る。でないと聡い恵已のことだ、またひとりで抱え込む。
だが。

八千代の回復を目の当たりにするたびに、一抹の不安にも襲われる。

これほどの重みが、恵已の細い双肩にもかかるのかと。

これまでの『彼女』達にも、確かに同じ責が課せられてきたのは承知している。それでも、恵已は『彼女』達よりも幼いのだ。不安は大きい。

「……あなたにも、苦勞を掛けますね。疲れてはいませんか？」
会話が途切れた沈黙に思案していたら、病床の八千代に心配させてしまった。

「お、俺は妖だし、お主らに仕えるものだ。氣遣いは要らぬから、お主は療養に専念してくれ」

「あら、想うこともさせていただけなのかしら」

「そ、そういうことでは……俺はお主に命令はできぬ」
慌てて言うと、八千代はにこりと微笑んだ。

「秋雨、わたしの具合はもうだいぶいいですわ」
「う、うむ」

そのようだと秋雨が頷くと、八千代は穏やかな双眸の中に、鋭い

色を宿した。

秋雨はそれを知っている。

想いの力。

抗えない、強靱な意志。

「あなたも気になっっているでしょうが、敢えて、言わせて下さい」
そう言い置いてから、八千代は手を秋雨のそれに重ねた。白く細いその手は、秋雨の手に比べるといかにも可憐で、ともすれば折れてしまいそうに頼りなく儂いように見える。

「恵已を。あの子は色々な意味で危うい子。なにがと、はつきりとは言い表せませんが、あの子の道には、きつとなにかがあります。」

……どうか、支えてあげて下さい」

静かに頭を下げる、八千代。秋雨はもちろん、戸惑いはしたのだが。

八千代の想いを汲んで、真摯に応えた。

「我が首に、誓って」

人でありながら、人とは一線を画す者達。神に額づき、巫女と呼ばれる娘達。『彼女』達が感じるのは気の流れた。

昔はその力が人に振るわれ、先読みの一族とされていたことも秋雨は知っている。だからこそ欲され、そして厭われた結果が、この集落なのだ。

その力を、秋雨は信じている。

秋雨の応えを受けて、八千代はほうと息を吐いた。それから秋雨の手を握る。温かく優しい手だ。

「秋雨がいれば、安心です」

買い被られてしまったものだ、秋雨は苦笑を禁じ得ない。だが、元とは言えど、『彼女』の前で弱音を吐いて不安にさせるわけにはいかなかった。

ならば改めて誓おう。

この爪は間違いなく、『彼女』のために振るおうと。

：参章

季節が巡り、年が明ける。

寒さの厳しい冬が過ぎて、集落でもささやかながらに新年の宴が開かれた。

ただし秋雨はあくまで妖なので、宴には参加しない。できないのかもしれないが、したいとも思わない。そもそも秋雨には時の感覚というものが薄いために、なにを祝うのかすらも理解していないのだ。

ともかく、相も変わらず儀礼ばかりで堅苦しいのだろうと 歴代の『彼女』達から話は聞いている、屋根の上に座り、その下で進められる儀式に思いを馳せる。正確には、その儀式に確実にうんざりし、退屈しているであろう、十三になった主に。

天狗との契約も終え、その後も数度、都へ責を果たしに行ったが、数百年同じことを繰り返している秋雨にとっては、代わり映えのない日々だった。

都の気はまだまだ荒れたままで、漂う血の気配も薄れることはなく、だから妖達も落ち着かなげに荒れたままだ。

そう言えば、恵巳の背が少し伸びたろうか。それでも、秋雨の肩ほどもないが。

そんな取り留めもないことを考え、暇を潰す。なにもしないでじっとしているのはどうにも苦手だ。付喪神のような精神構造にはなっていない。

だが次第に限界が近付いて、腰に帯びた若月を無為に抜いてみた。りした。

会いたい、な。

早く。

神の格ではない妖は、言わば穢^{けが}れた。集落のひとびとに、そう面と向かって言われたわけではないが、そうした考えが都に住む人の

間では通念となっていることを秋雨は知っている。だから自発的に、年の終りからしばらく恵已に会っていない。

ずっとそうして来た。

『ずっと』がいつからなのかは、判らないが。

(引きずり出してやろうとしただけさ)

不意に、恵已が契約を結んだ、小生意気な鴉天狗の言葉が脳裏に浮かんだ。同時に、あのとき感じた苦痛と、懐かしいような、感覚。

身が心が、魂が灼けるような、あの。

あんな、もの。

「……知らぬ、はずだ」

思わず声に出して呟く。それから、がしがしと髪を掻き回す。判らないことをただ悩んでいたとしても、判らないはまだ。

秋雨は立ち上がると、ひよいと近くの樹の枝へ移った。膝を曲げて衝撃を殺し、その伸びる力を使って次の枝へ跳躍する。葉擦れの音と、着物が風を孕^{ひは}んではためく音が心地いい。

恵已に直接守護陣をまわせない代わりに、集会場となっている堂には幾重にも結界を張っている。宴が終るのはいつも陽の暮れる頃だ。

ならばそれまでに、僅かばかりの友人に、人に倣^{なら}って新年の挨拶とでもいこう。

朔早、文女と、あと数人の付喪神や山姫^{やまひめ}のひなに挨拶回りをして、残すはひとりの狐だけになった。

山の中に住む、人の好きなおひと好しの、変わり者の狐だ。名は萩^{はぎ}。変わり者であるが故に群れに加わらず、ひとりで暮らしているが、萩は気ままに静謐^{せいひつ}を楽しんでいるようだ。

まだ付き合いは浅いが、秋雨は彼の持つ静かな空気が好きで、暇を見付けてはよく通っていた。

軽い足取りで萩のねぐらへ向かう途中、ところが空を切り裂くような音　否、声が聞こえた。

あまりに場に不釣り合いなために、一瞬秋雨はそれが何なのか理解できなかったが、落ち着いてみればそれは、

「……泣き声、……か？」

それも、幼子のものだ。

こんな、山奥に。それも、萩のねぐらの方向から聞こえる。

危険はないとは、思うが。

「……」

少しだけ悩んでから、秋雨は駆け出した。

落ち葉を散らして、息を切らして辿り着いたそこでは、果たして大きな口を開いて泣き喚く幼子と、それを懸命に止めようとする萩という状況が展開されていた。

幼子は男児、まだ四、五歳程度で、天を仰ぐようにして心おきなく泣いている。着物は擦り切れ、足には下駄もない。

かたや萩は本性の、まさに狐色の毛並みも艶やかな獣の姿で、幼子を背後からその身体で包むようにしている。あやすつもりか、子の前で尾をぱたぱたと上下させているが、効果がないのは一目瞭然だった。

秋雨は息を整えるだけの間を空けて、「萩」と声を掛けた。

「ああ、秋雨くん。ちょうど良かった、君、子供の扱いは慣れたるよね？」

そこで初めて気付いたらしい萩は、伏せがちだった耳をぴんと立てて、ぱたりと尾を振った。

ちなみに萩が秋雨に「くん」を付けて呼ぶのは、都でそうして呼ぶのが流行っているからであって、特に意味はないのだそうだ。

秋雨はがしと髪を掻き回した。確かに幼子とは何度も付き合ってきたが、

「……男児の扱いは判らぬ」

「きつと同じだよ。子供という点では」

「……そうだろうか」

いささか乱暴なまとめ方をして、萩が言う。釈然としないところはあつたが、とにかく秋雨は幼子の前に片膝をついた。それから。

どうしたものか。

秋雨は確かに、幼子とは何度も付き合ってきた。だが、それが数学のように等号で『うまく付き合える』とはならないのが難しいところなのだ。

しかもこれは、相手が『彼女』達であつたところで、なんら変わらないのだから、救えない。

結局秋雨は、気の利いた言葉のひとつも考えつかないまま、幼子の頭を撫でてやった。

「なに故泣いているか、教えてはくれぬか？」

幼子は秋雨を涙に潤む大きな目でようやく見て、一瞬、「ひッ！」と喉を鳴らし、泣くことも忘れて硬直し。

そしてすぐに、につこりと笑った。

「おにいちゃんは、すき」

そう言つて、秋雨の羽織にしがみついてくる。

情けない顔をしたのは萩だ。

「なんだが、扱いに慣れる慣れないの問題では、なかったみたいだね」

「い、いや、狐本来の姿だつたからではないか？」

「いやさ、僕だつて人の女性に化けたり色々したんだよ？ けどねえ。子供つてのは本性を見抜くのに長けてるなんて言うものなあ」

尾を力なく垂らす萩に、彼がどんな女性に化けたのか少し興味を煽られながらも、秋雨は気まずい話題を変えた。

「と、ところで萩。この子はどうしたのだ？」

幼子はまだ秋雨の着物の、右側に隠れるようにしている。さっきの表情の強張り、刀への恐怖だったのかもしれないと、ひとりで納得する。

秋雨の問いに、困ったように萩は耳をぴくぴくと動かして見せた。
「どうしたもこうしたもないさ。気付いたらいたんだ。きつと口減らしたろうけど、放っておけなくてね」

まあ僕が養えるわけでもなさそうだけど。そう続けて、萩の真つ黒な目がちらりと幼子を見る。

口減らしと言えば、貧しい人が養えなくなった我が子を、誰かにやるなり売るなり、殺すなり放り出すなりして、字の如く食事を摂る口の数を減らすことだ。過去を鑑みても、どうしようもないほどに、珍しいことではなかった。

確かに放っておけないという気持ちは判るが、秋雨は宴にも参加しないような集落のはみ出し者だ。集落の外が苦しいなら、集落の生活も楽ではないかもしれない。そんなところに、秋雨が『口』を増やすわけにはいかないだろう。

「……参ったよな」

萩も秋雨の立場は充分に理解しているらしく、苦笑してみせる。

妖　それも、性が狐という獣である萩に対して、人の幼子は山でひとりで生きていけるほど強くはない。

秋雨はくしゃりと幼子の頭を撫でた。きゃあと声を上げて幼子が笑う。どうやら懷かれてしまったようだ。

「お主、名は？」

「わかんない」

「いつからここにいる？」

「わかんない」

快活に応える様子からして、嘘ではないようだ。ついでに、見た目の様子よりもずっと当人は元気らしい。それらを確認して、安心すると同時に不安になる。意味がない。

「仕方ないな」言つて、ゆらりと萩が立ち上がった。無言で幼子が緊張して、秋雨の羽織を握る手に力を込めた。

「でき得る限り、僕が面倒を見よう。放っておいても死ぬだけなら、ちよつとの苦痛は我慢しておいてもらうしかないね。なに、大きく

なったら出て行けばいいさ」

柔らかい声音で萩が幼子に語り掛ける。だが、幼子は秋雨にしがみついたまま、夢中で首を左右に振った。

「……やれ嫌われたものだ。傷つくなあ……」

「萩はいい妖だぞ。俺はお主を連れて行けぬ。萩の世話になるといい」

秋雨も奨めてみるのだが、幼子は頑^{かたく}なだ。きつく落ち葉を踏み締め、拳を握り固め、頭を振り続ける。

途方に暮れた秋雨と萩は、お互いに顔を見合わせた。それから、揃って息を吐く。

「……あい判った」

こうなれば、秋雨も言うしかない。

幼子が顔を上げ、秋雨を見上げる。そこには期待するような、おこがましい色合いはない。ただ純粋な疑問。そのことに少し、秋雨の良心が痛む。

「お主を俺の主のところへ連れていこう」

幼子はその意味するところを理解しかねて首を傾げ、萩は「秋雨くん」苦い声を出す。

もちろん秋雨も、これで終りではない。軽く手を挙げて萩を制し、幼子と「だがな、」視線を合わせた。

「主のいる集落はここよりそれなりに遠い。俺は歩いて帰る。お主が俺についてこられるなら、来るといい。俺は俺の速度で行くぞ。途中でお主が止まっても泣いても、俺は歩を緩めぬ。しかも、頑張っ
て俺の主に会ったところで、お主の居場所ができるとは約束はしかねる。それでもいいなら、ついてくるといい。置いて行かれたり無駄足を踏むのが嫌なら、ここで大人しく萩の世話になれ」

「おにいちゃんといく!」

即答だった。

話している間、逐一頷いてはいたから、理解していないということはないはずだが。

秋雨はもう一度萩と視線を合わせる。ひとの好い狐の妖は不安げに耳を動かし、なにか言いたげにしていたが、結局なにも言わなかった。

そうして、秋雨と幼子は歩き出した。

最初秋雨は、幼子が追い付けなくなれば、あとでひなにでも頼んで萩のところに送り届けてもらおうと考えていた。だから本気で歩速を落とすつもりはなかった。

ところが。

秋雨が考えていたより易々と、幼子はついて来る。楽しげな表情さえ浮かべて、軽い歩みで。

山に慣れたか。

単純に感心して、特に会話もないまま、秋雨は歩き続けた。

さすがに道程の三分の二も過ぎる頃には、幼子との間に距離ができ始めた。約束であるので、秋雨も速度を変えはしない。それが律だ。

ただ、『連れていく』と言ったことも律としてあるので、振り向いても幼子の姿が見えなくなれば、足を止めて待つ。すると、また幼子は追い付いてきた。

何度目かのそのやりとりが繰り返されたあと、秋雨は幼子に向けてぼつりと、

「お主は強いな」

と呟いた。

幼子は、嬉しそうになにつこりと笑った。

女兒と男児ではやはりなにかが違うらしいと、秋雨は勝手に納得した。そして、前を見る。

幼子の足に合わせた為に、すっかり陽も落ちてしまった。木々の間には暗く闇がわだかまり、虫の音や夜行獣の低い唸りさえ聞こえ始めている。しかし、集落はもうそこだ。

秋雨は肩で息をしている幼子の小さな手を取った。

この暗がりに人の目で、秋雨の寒色の着物を探せというのは酷だ。

ここに来て獣や妖に拐^{かどわ}されたりしても可哀相だ。

「よく頑張った。あとは共に行こう」

見上げてくる双眸に、そう言っただけで微笑んでみせる。こくんと大きく幼子が頷いた。

「と、言うわけなのだが」

「……」

年末から 恵巳にとっては 実にどうでもいい理由で顔を見せなかったと思ったら、年始の挨拶もせずに秋雨は男の子を紹介して、そう締めくくった。

つまり恵巳が大人達に囲まれて面倒臭い儀礼をこなしている間、秋雨は友達のところへ渡り歩き、新しく弟まで見付けてきたというわけだ。

「ふうん」

そう思ったら低い声が出た。するとすぐに秋雨の表情が強張る。

「や、……やはり、許可できぬだろうか」

違う、ばか。

自分ばかり遊んでるって言うてるの。口には出さずに秋雨を批判するが、当然秋雨には届かない。乙竹に考えは口に出せと指南されたものの、どうにも秋雨相手にはうまくいかなかった。

だがとにもかくにも、秋雨の連れてきた男の子に罪はない。

恵巳は改めて男の子を見る。着物や肌は汚れているし、髪もばさばさになっているが、利発そうな眼をしている。さすがに今は疲れた顔をしているが。

「ねえ君、お名前は？」

「……わかんない」

男の子は急に怯えたように、秋雨の羽織をぎゅうと掴む。その姿に、なんだか少し、気持ちがざわついた。

「……？」

その意味が判らない。だが確かに、落ち着かないというか、心の表面がさざめき立つというか。

恵巳は自分自身に首を傾げて、それから気を取り直し、男の子に笑いかけた。

「じゃあカツコイイ名前を考えようね」

「！」

「？」

秋雨が我がことのように顔を輝かせ、男の子は逆にぼかんとした。
「まあ、わたしにも弟ができるようなものだし、それは、嬉しいし、ね」

言って秋雨に振ると、彼は素直に頷く。

それに、

「ちゃんとした話はきづ達と話し合って決めるから。今日はあきと寝てね」

今度は、ふたりが兄弟のように同時に、こくんと頷いた。

あきが喜んでるなら、いつか。

初めて恵巳は、いつも尽くしてくれる護り手のために、なにかをしてあげられた気がした。

・肆章

「雪くん^{ゆき}っ」

呼ぶと、ぱつと顔を上げる。色素の薄い茶色の髪はきづの手配で整えられ、身体も湯を使って綺麗になったために、雪と名付けられた『弟』は、見違えたようになった。彼用に仕立て直された、秋雨の古い薄藍の着物がよく似合っている。

とことこと窓辺から近寄ってくる子の頭を撫でて、その顔に浮かぶのが純粹な疑問であることに、恵巳は困り、それでも微笑んだ。

「雪くん、屋根は危ないから登っちゃダメって言ったでしょ？」

やけに秋雨に懷いているこの男の子は、秋雨の真似をして屋根に登ろうとする。妖であり身の軽い秋雨とは違う。幼い雪が屋根などに昇り、足を滑らせでもしたら大変だ。

だが何度忠告しても雪は理解していないらしく、どうにかして屋根によじ登ろうとする。当然と言えば当然だろう。『兄』たる秋雨が、そこにいるのだから。

秋雨は秋雨で、屋根の上が唯一の憩いの場なのだから仕方ない。また、誰にも邪魔されることなく剣の稽古をしたり、術式を練ったりできる無二の場であることも、恵巳は知っている。ならばそれを恵巳の独断で奪うことはできない。

自分より年下の者が身近にいることなどなかった恵巳は、こうした場合、どのようにすべきか判らなかった。教育係であるきづに預けようとしても、秋雨が恵巳の姿が見えないようになった途端に泣き喚くのだから、手に負えない。

「判った、雪くん？」

「んー……」

判らないらしい。適当に「うん」と言わない分、素直ではあるのだが。

「母様ならどうするのかなあ」

「恵巳」

恵巳がうーんと首をひねったそのとき、頭上から、ばさりと羽音。そうだった。今、秋雨はここにいない。そういうときにはこのひとが来るんだった。

「乙竹さん」

いつもの指定席にふわりと舞い降りると、早速雪に目を留めて、乙竹は自分の赤いそれをしばたたかせた。姿形もあいまって、とても幼い印象になる。

雪は警戒するようにさつと恵巳の後ろに隠れ、顔だけ覗かせて乙竹を観察する。

しばらくそうしてふたりの少年は視線を交わしていたが、ついに乙竹が顔を上げて、恵巳に訊いた。

「恵巳の弟か？」

「……そんな、感じです」

「いたのか」

「できた、と言いますか」

「へえ、それはめでたいな」

例え本当に雪が新しく生まれた弟だとしても、それは四、五年は前の話になるはずだが、乙竹は手放しに喜んだ。やはり長い時を生きる妖というのは、時間感覚が恵巳達、人とは異なるらしい。

乙竹はしゃがんで雪と視線を合わせて手招くと、「やるや」と言ってひとつの面を差し出した。木彫りの、鴉のような嘴の生えた、妖好みな

率直に言えば少し、いや、だいぶ恐い　面だ。

「ちょうど昨日、眷属けんぞくに加わった者がいてな。それ用にお遊びで作ったものの、試作で悪いが」

それをわざわざ持って来たということは、その恐い面を恵巳に超越すつもりだったのだろうか。思っ
て恵巳は苦笑する。

雪は出された面に興味津々で、一度ちらりと恵巳を窺い、恵巳が頷いたのを見ると、小走りで乙竹のところまで行って、両手でそれを受け取った。雪は特に恐いとは感じていないようだ。

「ほら雪くん、お礼は？」

「ありがとう」

そそくさと恵巳の背に隠れ、それでも嬉しいらしく、面を逆から覗き込んだり掲げてみたりする。乙竹もそれを楽しそうに見ているから、子供が好きなものかもしれない。

ん？

なにか引つ掛かるものを感じて、恵巳は思う。

もしかして、乙竹さんがわたしを気に入った理由って……。

恵巳より少し上の男の子にしか見えない乙竹の、実年齢が八百を超えることを考えれば、充分に有り得る。つまり、祖父が孫を見るような、そんな気持ちなのではないのか。

そう思うと、なんだか気が抜けた。

「乙竹さん、子供がお好きなんですか？」

「ん？ うん、そうだな。幼い内は妖も人も似たようなものだから」「そうなんですか？」

「無垢で感情に素直だ。まあ妖は歳を食っても、感情には素直だが」くつくつと喉で笑うと乙竹は恵巳を見上げ、それからついでのように「それよりも恵巳、」言った。

恵巳は自分もしゃがむべきか少し悩んで、結局そのまま乙竹の白い髪を見つめた。

「はい？」

「松風坊からの依頼だ。山へ続く気脈に、ちやちな妖が巢食っていてな。僕らが叩つ斬ってやりたいが、まだ松風坊が回復していない。僕らがあまり都をうるつくのは、まだ控えたいから、排除を恵巳に頼みたいと」

「わあ」

まさか責務だとは思わなかった。恵巳は慌てて膝をついて、頭を垂れた。

「わ、判りました、お受け致します。……あの、」

「うん？」

顔を上げると、乙竹はしゃがんだままで、面白そうに恵已を見ている。後ろからは突然伏せた恵已を心配して、雪が覗き込むようにしている。

風に山伏の衣装や髪を躍らせながら、乙竹が「ああ、」得心したように告げた。

「あいつには会ったぞ。屋根の上にいたから、必然的にな。用件を言ったら通してくれた。あいつはまさに番犬だな」

「悪かったな」

乙竹が声に出して笑うと、からん、と音を立てて、屋根から秋雨が降ってきた。窓の外の場合はそれほど広くないから、秋雨と乙竹が並ぶだけで窮屈に見える。

雪がぱつと顔を輝かせて、秋雨に駆け寄る。手にした面をぐいぐい押し付けているのは、秋雨にもそれを見て欲しいのだろう。微笑ましい光景のはずだが、恵已の胸がまたざわつくのは何故だろうか。

秋雨は雪の頭を撫でると、乙竹に振り向いて、

「松風坊のお具合は、まだ優れぬか」

と、恵已も訊きたかったことを訊いた。

その問いに乙竹がようやく膝を伸ばして、困ったように首を傾げた。右手をうなじにやって、さするようにする。

「僕がこう言うのもなんだが。あれは治す気がないんじゃないかと思っな……」

「え？」

「もちろん都の荒れようは酷いもんだし、妖も東から西から、縄張り関係なく入り乱れてる。癒しがたい類の不調であるのは僕らも判るが……どうせ百年もしたら落ち着くだろうと、そういう腰の据え方に見受けられるな、あれは」

百年暇を潰す僕らの身にもなつて欲しいと、乙竹が続けてぼやいた。これには恵已もぽかんと開いた口が塞がらない。さすがの秋雨も「らしいと言えば、実にらしい……」と呆れ顔で呟いた。

苦笑いを浮かべ、乙竹は

「じゃあ、頼む。そういうことだから、急ぐ必要はないからな」と言い残して、飛び去って行った。

何度見ても、人と同じ形に翼が生えて羽ばたく姿というのは感慨深い。恵巳は乙竹が見えなくなるまで見送って、それから窓の外に立ったままの秋雨に視線を移した。

秋雨の足元には相変わらず雪がまとわりついていて、正直に言っても、秋雨は弱り顔だ。子供が苦手だということではないようだが、ここまでべったりされることは、彼の長い歴史の中でもなかったらしい。

「お仕事はいいけど、問題は雪くんだね……」

名を呼ばれて、雪の双眸が恵巳に向く。その頭上でこくりと秋雨も頷いた。

ここしばらく責務はなかったために考えないでいられたが、危険も伴う責務に、幼い子供を連れていくわけにはいかない。

わたしも、大概だけど。

そんな恵巳よりも小さいのだ。加えて、秋雨にこれだけ懐き切っているのは、責務の際に秋雨の足枷になるかもしれない。ただでさえ、恵巳という足枷　守護対象　がいる上に雪まで増えるとなると、さすがの秋雨でも手が足りないだろう。

だが、雪は秋雨や恵巳が傍を離れると泣き喚く。そんな子を置き去りにするのは、恵巳の気が引けた。そしてそれは、秋雨も同じらしい。

「……母様に訊いてみよっか」

恵巳の提案に、秋雨も頷いた。

結果として、その案はとても良いものだった。

雪を恵巳の母　八千代　のところまで連れて行き、責務の間、彼女の元にいるように言い聞かせたところ、こくと雪は頷いたのだ。部屋を出るときにも、いくらか寂しそうな、不安そうな顔はし

たものの、泣きもしなかった。

だから恵巳と秋雨は、こうして夜の都に足を踏み入れることができた。

一連のことを振り返って、恵巳はほうと息を吐く。

「でも良かったよね、雪くんが母様に懐いてくれて」

「うむ。やはりあれくらいの幼子は皆、『母』が恋しいものなのかもしれないね」

「あきは絶対なれないもんね」

「そればかりは何年生きてても、無理だろうな……」

苦笑混じりに秋雨が返す。服は責務の際の黒づくめに改めている。恵巳の巫女姫の服は相変わらず寒々しい色合いのままだが、季節が巡ってそれもあまり感じなくなってきた。染め変えは当然のようにきづに反対されてしまったが、こつそりと袴の裾には薄紅色の小花の刺繍を施している。今はまだ少しだが、まだまだ増やそうと恵巳は画策していた。

「ところであき、松風坊ってどんなひとなの？」

「うん？」

「松風坊の代わりに乙竹さんが来たから、わたし、会ったことないんだよね」

「ああ、そうか　そうだな……」

都と言えども山に近い郊外のこと、ひとの気配はない。ふたりの下駄の歯が土を噛む音だけが、静けさの満ちた空気に響く。

以前のように、浪士組とやらに出会うこともなさそうだと、恵巳はそつと胸を撫で下ろした。あの浪士組の話になると、秋雨の目の色が変わる、気がするのだ。それが恵巳には少し、恐い。

しばらく言葉を選ぶように宙空に視線をさまよわせたあと、秋雨が言った。

「まあ色々な意味で、器の大きい方だな」

「……ふうん……？」

よく判らない。そう思ったのが顔に出たのだろう。秋雨は歯を見

せて笑って、恵巳の頭をくしゃくしゃと撫でた。

「いずれ会えよう。自分の目で確かめるといい」

その大きな手を見上げて、そう言えば、ふたりでこんな風にするのも久しぶりだなと感じた。

ああ、そっか。

秋雨に接する雪を見たときの、あの気持ち。胸がざわつく感じ。

あきを取られるかも、なんて。

そんな、子供のようなことを考えていたのかもしれない。思い至って、恵巳は思わず口の端を上げた。

莫迦みたいだ。いつでも秋雨は、恵巳の隣にいるのに。

（つまり恵巳、あんたはあのぼけつとした妖が、他の奴なんか考えられないくらい好きで、例えあいつの性が何だか判らなくても構わないから傍にいて欲しいと、そういうことだろう？）

「っ！」

不意に乙竹の言葉が甦って、何故か顔が熱くなった。両手で頬を包む。実際に言われたときは、恥ずかしいよりも情けない気持ちが強かったのだが、よくよく考えると、

すごいこと、言っていない？

「恵巳？」

突然俯き、顔を両手で覆う恵巳に、秋雨が不思議そうな声を掛けた。骨張った手で、髪を梳くようにして恵巳の表情を窺おうとする。その手を、いつも追っていたのは、何故だろう。その手を、いつも求めていたのは、どうしてだっただろう。

だって、秋雨は、

その続きが浮かばなかった。目の前で怪訝な顔をする秋雨が、恵巳にとって何だというのか。護り手であり、兄役である以外に、一体なにが。

考えれば考えるほど、深みにはまる。頭を振って気持ちを切り替えようと顔を上げた、そのとき。

きん、と空気が張り詰めた。

「秋雨……！」

「御意」

秋雨が弾かれたように振り向く。すらりと抜かれた若月。秋雨の表情が一変したところを見ると、ここが乙竹の言う気脈ではないのだらう。

だが、感じられた気配は確かに、妖のそれだった。

「……なんだ」

そして、秋雨が肩の力を抜いた。

彼の視線の先に現れたのは、ひとつの提灯ちんちんだった。張られた紙の中程が裂けて、中の蠟燭が覗いている。それが、火が消えるのではないかと思うほど機敏に、びよんびよん跳ねていた。

「不落々々（ぶらぶら）だ」

秋雨の呆れたような声音。不落々々なら恵已も知っている。見たままの提灯の付喪神で、ひとを驚かすつもりもない、気ままな妖のひとつだ。つまり、何の害にもならない。誤ぼやって小火を起こすこととはあるらしいが。

不落々々はただびよんびよんと全身で跳ねるだけだ。秋雨は若月の切っ先を下げると、不落々々の前にしゃがみ込んだ。

「まさか気脈に巢食うておったのは、お主か？」

びよんびよん。

「む、違うのか」

びよんびよんびよん。

「ならばお主は、」

どうしてあれで会話になるのかな……。

半ば感心して恵已は、跳ねる提灯とそれに語り掛ける青年という珍妙な構図をただ眺めた。妖の存在を知る恵已にしてみれば、なんだかのどかな光景ですらある。

少し気を抜いて、何とはなしに周囲を見渡した。上弦の月が綺麗だった。風は随分優しいものになった気がする。相変わらずひと気はない。

「なに……？」

硬い声に、振り向く。途端に、空が陰った。
風が巻いて、足が取られる。髪が、着物が煽られる。鈴の鳴る音が、小さく聞こえる。

「恵已！」

秋雨の音がする。不落々々が跳ねている。

若月が、綺麗に見えた。

・伍章

突如出現した、巨大な影。

不落々々が騒ぎ続ける。秋雨は手にした若月の柄を握り締めて、ぎりとお歯を鳴らした。

莫迦な、と思う気持ちと、やはり、と思う気持ちがないまぜになる。

恵已をいともたやすく掴み上げた、まばらに建つ平屋の屋根をゆくに越す身の丈を睨め上げる。体軀は屈強な人のもので、頭は牛だが、目は大きなものがひとつ、鼻筋の上にあるきりの妖。

牛鬼だ。

歴史の長い妖の一種で、特にひとつ目の者は妖術に長けるのだと聞く。

都に着いた時点で　もしかしたら、それ以前から　術にかかっていたのだろう。そうでなくては、あれほどに強大な妖の気を掴み損ねるはずがない。今になって思えば不落々々にしたところで、背後に近付かれるまで気付かないなど、考えられないことだった。秋雨とて、都に入ってからには厳戒とは言えずとも、警戒はしていたのだ。

だが、そうだとすると、疑問が残る。

何故？

牛鬼は確かに凶暴な妖だが、それはあくまで敵だと認識された場合のことだ。例えば気脈に住み着いていたのがこの牛鬼で、追い出そうとした際に抵抗されたのならまだ得心も行く。けれど秋雨らは、まだ気脈にも着いていなければ、都に踏み入った途端に術をかけられる筋合いもない。

四つ足動物の捕食をひとびとが禁止されて久しく、農耕に活用されるばかりの牛に対して、そうした人の営みからは切り離された恵已が怨みを買うこともないはずだ。

終りの見えない思考を、秋雨は舌打ちをひとつして切り上げた。
若月を構える。

「埒が明かん！ 恵已、斬るぞ！」

『彼女』を害す者には手加減も容赦も必要ない。

恵已からの応答がないのが焦りを募らせる。まさか、目を見たか。
跳躍した。恵已を捕らえる太い腕に、逆袈裟に斬りつける。腹に
響く声で牛鬼が鳴く。隙を見て、秋雨はもう一度、今度は指の付け
根を斬った。

小さな恵已の身体を、抱え込むようにして着地する。すぐさま顔
にかかる髪を梳いて様子を窺う。

「恵已っ……？」

緊張のために表情は強張ってはいるものの、秋雨の呼び掛けに、
恵已はぎこちなくもなんとか頷いた。

「びっ……くりしたあ……」

いつも通りの彼女の様子に、秋雨は安堵する。怪我もないようだ
し、牛鬼の目の妖術にもかかっていないようだ。それらを確認して
からすぐに、守護陣をまとわせた。

恵已の双眸を見つめ、しっかりと見返して来るのを確かめて、若月
の鞘を腰から抜いてその手に握らせる。

「鞘に気を籠めて、少し待っていてくれ。すぐに終らせる」

「う、うん」

手首を返し、抜き身の若月を振るう。呻き続ける牛鬼に向き直り、
構えた。

殺めはしない。憎しみや怨みの想いを斬り抜うだけだ。

もちろん秋雨ひとりが殺めるつもりで斬りつければ、程度次第で
相手は死ぬだろう。そうならないために、鞘を『彼女』に預けてお
く。刀と鞘はふたつでひとつだ。鞘を通じて、『彼女』の力で刀身
を清める。

だが、そうした刃でも 否、そうした刃だからこそ、かもしれ
ない、斬られると怨みに蝕まれた妖は苦しいらかった。秋雨

が斬ってきた数多の妖達は、いつも長く呻きを上げ、しばらくはのたうちまわるほどだった。

だが。

秋雨は目を眇め、牛鬼の赤い巨体を見上げる。

『彼女』を害した者。

許しはしない。

『彼女』からの制止もないのだ。ためらう理由も必要もない。

ぎよろ、と牛鬼の大きなひとつ目が秋雨を捉えた。だが、からくりさえ判っていればいくらでもやりようはある。恐れることはない。あいにく、こちらとしても呪術ならば得意とするところだ。

「多少の手負いは覚悟せよ」

地を蹴った。

振り下ろしてくる逞しい右腕を斬り払い、横に薙いで来た左腕に若月を突き立てる。痙攣したように動きが鈍ったそこを足場に、牛鬼の胸元へ跳躍する。勢いのままに、若月を引き抜き、振り上げる。

「あつ」

「巫女姫を害す者がおるのが、それほどに目障りか」

斬る。そう思った瞬間に、恵巳の短い声と、静かだが通る男の声が重なって、びくりと刃先がぶれた。

誰だ。僅かな雑念が過ぎった。

その一瞬に、牛鬼の右腕が襲う。

「くッ！」

目障りな羽虫を追うような、払い飛ばす攻撃が来ると思った。だから若月の刃を体と水平に構え、少しでも衝撃を殺そうとした。

なのに、衝撃は背後から来た。否、背後からも、だ。

牛鬼は右手が傷つくのも厭わず、両手でもって秋雨の身体を握り込んだ。かろうじて秋雨の両腕は自由になるものの、若月は動かせないし、身体はその怪力に軋みすら上げる。

下では秋雨、と恵巳の声がした。泣きそうな声だ、と秋雨は思う。心配するな、それよりも決して動くな、牛鬼の目を見ないように

しろと言つてやりたいが、叫ぶための息を吸い込む隙間さえ与えられていない。浅い呼吸を繰り返すので精一杯だ。

ばさ、と軽い羽音がして、咄嗟にそちらを向きそうになるのを、意思で押さえ込んだ。ただ不覚を取った焦りを、短い呼吸と共に吐き出す。

牛鬼の頭の方から、忍び笑いが聞こえた。

「変わらん、秋雨」

「……なるほど。誰だか知らぬが、お主が牛鬼を操つておったか……」

牛鬼は人語を解さない。筋道立てた考えもあまり持たない。だからこそ安心してた。油断していたのだ。そしてだからこそ、疑問だった。

だが、この第三者が牛鬼を煽り操り、裏から指示を出していたのだとすれば、全てに説明がつく。

ならばお主はなにが目的だ。そう問うた秋雨に、けれど声は素っ頓狂に返した。

「誰だか知らぬとな？」

そのあまりに驚いた風な声音に、秋雨は懸命に記憶を探る。長い時を生き過ぎた。知人の声を聞き分けられないとは。姿を確認すれば早いだろうが、間違いなく牛鬼はこちらを見ているだろう。牛鬼の妖術の効果は様々らしいが、どんなものであれ喰らわれないに越したことはない。

羽音がしたからには、翼のあるもの。翼のある、妖。

「私のことが判らんかね、秋雨？」

「……覚えが、ないな」

「淋しいのう！」

大仰に息を吐きつつ声が言つて、ならば、と続けた。

「私の姿を見ても判らんかね？ 牛鬼には目を伏せさせる故、こちらを見てくりやれ」

「お主が俺の方に下りてこれば良からう」

「それでは劇的にならんでもないか」

「……」

果たして己の知り合いに、こんな莫迦はいただろうか。秋雨は軽く痛むこめかみを指先で押さえた。

そうまでして全く記憶になかったらどうしようか　どうしてやるうかと思案しつつ、秋雨は細く息を吐いた。恵已に確認させるわけにもいかないし、このままこんな莫迦げた状況を継続させるのもやはり莫迦げている。

「ではまず、この手を緩めてもらおうか？」

「ほう、何故？」

「お主が命じて牛鬼が本当に従うかを確認したい。お主にいきなり斬りかかったりはせぬ、安心しろ」

「……良からう」

声が応じ、牛鬼になに事かを告げるのが聞こえて、秋雨を握り締めていた牛鬼の手が緩んだ。だが抜目なく、身体ごと飛び出せるほどではない。

仕方なく秋雨は若月を引き上げ、顔の前に掲げる。これで牛鬼の目を直視する危険は減るだろう。

「目は伏せているか？」

「おう、いつでも良いぞ」

ならばと秋雨は声の方向を窺い見た。声の言う劇的な展開とやらに、付き合ってやるつもりも毛頭ない。

赤い大きな牛の頭、巨大な人の肩に乗っているもの。それは、黒い鴉だった。

それを確認した秋雨の脳裏に最初に浮かんだのは「最近よく見るな」という、実にどうでもいい感想であり、つまりなんの感慨も湧かない。

嘴も濡れたような漆黒で、秋雨をまっすぐに見つめる双眸は紅玉。脚までが黒い、と思ったとき、牛鬼の肩に立つそれが、三本あることに秋雨はようやく気付いた。

「八咫鳥……」
やたがらす

妖と称するものも憚られる、神獣のひとつだ。秋雨の呟きに、神獣は嬉しそうに一度跳ねた。

だが、「ようやくと判りおったか！」というその言葉は、秋雨は否定せざるを得ない。

「すまぬが、お主の性は知れたが、お主自身のことはやはり知らぬと言うよりないようだ」

八咫鳥の風体など有名過ぎて、そんな知人がいるなら覚えているはずだ。だが判らない、それはつまり、この八咫鳥とは知人ではないということだろう。

秋雨が若月の陰から淡々と告げると、安定した三本脚の上で、八咫鳥はわざとらしくよろめいた。どうにも逐一の反応が大袈裟な輩らしい。

「のう秋雨、本当に知らぬか」

ばさりと翼を広げ、誇示するように言われたところで、知らないものは知らない。

しかしここまで必死になると、いささか後ろめたい気持ちにもなる。秋雨は困って己を握り込んでいる太い牛鬼の指に視線を落とした。

それが、いけなかった。

「のう秋雨、教えてくりやれ。本当に 忘れたか」
ばさり。

「っ？」

羽ばたきの音と同時に、若月が突然傾いた。八咫鳥の三本の脚が若月の峰を掴んで体重を預け、その重みに指が柄巻を滑る。

思いがけないことに驚き、秋雨は咄嗟に、顔を上げてしまった。上げてまっすぐ向けられていた、牛鬼の目を捉え、そして捉えられた。

しまっ……！

悔いる暇すらなかった。

流れ込む思念と、襲い来る、自らの芯が焼け付くような痛み。魂からなにかを引きずり出されるような感覚。

これは、知っている。

あの生意気な鴉天狗に掛けられたものと同じ類の呪術。記憶を掻き回されるような、『知らないこと』を、『思い出す』ような。

なにか、奥に仕舞い込んでいた術を、無理やりに解かれるような。

愛した、ひとが居た。

霞む視界の中で、弾けるようにして、『彼女』を思い出した。

長い緑の黒髪の。きらきらした目の。『あの頃』の自分の目にも

鮮やかに映った、風に躍る着物の。

彼女の名は、そう、……紅葉^{もみじ}。

最初の、『彼女』。

俺、は。

いつも彼女の、傍に。

言葉を交わすこともできない存在だった、『あの頃』。それでも

彼女は、紅葉は、優しく接してくれた。

そして。

そして……。

「綺麗な髪ね」

淡い色の髪に指を通しながら八千代は言う。与えられた紙に筆を走らせていた雪がふと視線を上げる。

山の中に独りでいたのを妖に拾われ、それを秋雨が連れて帰って来たのだという。捨てられた子なのだろうと、集落で育ち世間をあまり知らない八千代にも察しがつく。

ただ幸か不幸か、雪にはあまり人里にいた頃のことを思い起こす

ことがないようだ。捨てられたことを、恨んでいる様子もない。それを良かったと思う反面、ひとりの子の親である八千代は淋しいと感じてしまう。

さらさらと髪を撫でながら、まっすぐに見てくる雪に微笑む。秋雨と恵已の、両方から離された途端に泣き喚くのだと言われていたが、八千代の前では実に大人しくしていた。

「恵已と秋雨がいないから、元気がないのかしら？」

からかい混じりの八千代の問いに、雪は驚いたようにパッと目を丸くした。それから、ぶるぶると雨に濡れた犬のような仕種で首を振る。

「そんなこと、ない」

「そう？ わたしとしても楽しくないのではない？ 一緒に駆け回ったりもしてあげられないし」

「そんなこと、ない」

目が回るのではないかと思われるほど首を振り続ける雪が愛しく思え、八千代は苦笑しながらその頭に「判ったわ」静かに手を乗せて止めた。

だが、雪はまだなにかを言いたそうにしている。ありがとうねと宥めてもそれは変わらず、だから八千代はなにかあるのかと訊いた。しばらく雪は悩み、言葉を選んで口を開いた。

「おにいちゃん、の、仕える相手だから」

「まあ」

そんな堅苦しい理由で大人しくしているのかと思うと八千代も心苦しい。それ以前にそんなことをこんな幼い子に教えたのかと、僅かに秋雨に対しての腹立たしさも沸いた。

八千代の心情を敏感に汲み取ったのだろう、雪が再び慌てて首を振る。

「ぼく、は、おにいちゃんと一緒にいるから。山犬は恐いし、犬みたいなのも恐いけど、おにいちゃんは違うから、ぼくはおにいちゃんといることにした」

ここまで聞いて、八千代はようやく眉をひそめた。

「……雪くん、……何の話をしているの？」

すると雪はなんだか傷付いたような顔をして、伝わらないことがもどかしいと手振りを交えて必死に訴えようとする。

あーとかうーとか言ったあと、八千代をぴしりと指さした。

「おねえちゃんと、同じ血。おにいちゃんが、仕える血。だから、ぼくは白児（しらい）だから、おにいちゃんと、おにいちゃんの仕える血と、一緒にいたい」

すつと、指先が冷えるのを感じた。

白児なら知っている。山犬に襲われて亡くなったとされる子の魂が、妖に転化したものとされている。

雪は、自分がそうなのだと言っている。白児だから、秋雨の傍にいたいのだと。

その、意味するところは。

代々巫女姫に仕えてきた妖。それが血筋に憑いていたのだと考えれば。

ならば、秋雨は。

言葉を思い出したのだろう、雪が嬉しそうな顔で、ぱんとひとつ手を打った。

「おにいちゃんは、犬神だから！」

：陸章

呼んだ声が、届いていないのかもしれない。恵巳はもう一度大きく息を吸い込み、彼の名を叫んだ。

「秋雨！」

しかし、僅かな反応も返らない。脚が三本の鴉に若月の角度を変えられ、牛鬼の大きなひとつ目を直視してしまってから、秋雨はぴくりとも動かないのだ。

牛鬼はただ秋雨を握り締めたままで、危害を加える様子はないが、それもいつまでのことだか知れたものではない。

恵巳の背後では不落々々が怯えたように身を縮めている。心なか、提灯の中の灯も、心許なく小さくなっている気がする。

きッ、と音のしそうな速さで、恵巳は鴉　八咫烏を睨んだ。若月を止まり木にした鴉もどうやら恵巳を見ていて、真っ赤な両目が恵巳のそれとかち合う。

恵巳は鞘を握る手に力を籠めた。集中する。途端、八咫烏は羽ばたいて飛び上がった。

そしてそのまま、恵巳の前まで急降下する。「っ！」怯みそうになるのをぐつと堪えて、恵巳は瞬きもせずに見守る。

大丈夫だ。秋雨が張ってくれた守護陣がある。そう必死に心の中で自分に言い聞かせた。

恵巳から数歩離れたところに下りた八咫烏は、やけに人臭くひよこりと会釈した。

「初めまして、先読みの巫女。私は白い夜と書いて白夜、性は見ての通り、八咫烏だ」

「……わたし達がそう呼ばれてたのは、昔の話だよ。わたし達には、もうそんな能力は、ない」

掌に汗が滲む。

白夜の大きさは普通の鴉のそれと大差ない。なのに、その双眸が

ら感じる圧力は、恵巳がこれまで接してきた妖達と比べものにならないほど強かった。

朔早や萩と初めて会ったときも感じたことだが、人の形をしていない者の口から人語が発せられるということに、大きな違和を感じる。

「判っているとも。君らにそんな能力が残っているなら、護り手など必要ないだろう。だが私は、君自身の名を知らないのですね」

「……恵巳……」

鞘を握り締めたまま、呻くように名乗る。白夜の氣に吞まれないようにすることで、精一杯だ。

白夜がいかにも有名な神獣であろうとも、秋雨になにかをした、それによつて秋雨が動かない、それだけで、恵巳にとって好ましい者ではない。

「秋雨に、なにをしたの」

食いしばった歯の隙間から問う。ひょこ、と白夜は首を傾げた。どこか白々しい。

「私はなにもしておらんよ。あやつが牛鬼の眼に当てられたただけだろう」

「じゃあ、あの妖術の効果は？ あの子はあなたが使役してたはず。それは判るでしょ」

恵巳が畳み掛けると、白夜はばさりと羽を広げた。おどけているつもりなのかもしれない。

ぬるい風が煽られて、柔らかく恵巳の頬を撫でる。

「さすがに先読みの巫女は物怖じせんな。なに、大したことはない。あやつものおの術にはただ幻を見せるだけの能力しかない」

「幻……」

ただ幻を見ているだけで、全身が凍ったようになるものだろうか。むしろ勝手に身体が動いてしまいそうな気がする。

白夜を視界から外さないようにしながら、恵巳は秋雨を窺う。まるで人形のように、意思を感じない。

「本当に、それだけ？」

「それだけだとも。あやつの術はな」

探りを入れた恵已に、飄々（ひょうひょう）と白夜が応じる。つまり、牛鬼の妖術以外にもなにかがあるということだろう。

月に雲が掛かって、空が陰る。光の減った中で、恵已は白夜の紅い目を見据えた。

「……秋雨に、なにが起きてるの」

くく、と鴉が喉を鳴らす。どうやら、笑ったようだった。智恵の覗く双眸が、今度は恵已を探るように動く。恵已は更に指先に力を籠める。

「そんなに、あの妖が大切な」

「……答えて」

「君はあやつの性すら知らんのだろう？」
「まだ。」

かつ、と頭の中が真っ白になった。

「それが何だっけ言うの！」

叫んでいた。

共に生きてきた。護られてきた。性が判らなければ大切に想ってはいけなくとも言うのか。想ってはいけなくとも言うのか。

気を籠める。刀と鞘は、ふたつでひとつ。

白夜が気圧けおされたように一歩跳んで退いた。それから取り繕うように、ばさりと翼を開く。鋭い嘴が開いて、どこか楽しげな声が出る。

「なるほどなるほど。これはいい。もしも君が生き残ることができたなら、今度は君の側についてみようか」

「何の、話……」

「私と君の話さ。虐しいたげられ、陰に追いやられてきた者が鬱憤を晴らすことのできる、いい話だ」

判らなかった。

そんなことよりも、秋雨の方が心配だった。あの牛鬼が拳を握るだけで、秋雨の身体は潰されてしまっただろう。なんとか、鞘から刀に気を届けなくては。

秋雨。

「あの牛鬼の術は、」

恵巳の邪魔をするつもりなのか、集中しようと気を澄ませた途端に白夜が語り掛けてくる。思わず恵巳は目を^{すが}眇め、白夜を睨んだ。

その恵巳の反応すら楽しそうに、白夜はついと胸を張る。

「妖の中核を成す魂に術式を刻み付ける類のものだ。だがあやつ之魂には既に、誰が課したか術式が刻まれておつてな。お互いが重なつてお互いがずたずたになって、つまり元あった術さえ解けかけておるのだよ」

「っ？」よく喋る鴉だと、冷めていた恵巳の眼が見開く。鞘を握る手が緩む。

クク、とまた白夜が笑った。

「私の知る限りでは、確かあやつに掛かっていた術は、過去を封じるものだったと思うが」

「じゃあ、」

秋雨は記憶を取り戻せるのだろうか。ずっと判らなかった性が、判るのだろうか。

だが、そんな期待を抱くと同時に、動かない秋雨に不安が募る。果たしてそれは秋雨にとって、いいことなのだろうかという、言い知れぬ不安。

乙竹に似たようなことをされたとき、秋雨はあれだけ苦しんでいたではないか。もしかしたら今も、秋雨は苦しんでいるかもしれない。

苦しむことが判っていたから、封印していたのではないか。思い出せば、いけないのでは、ないだろうか。

しかし、性が判らないからと彼が苦しんでいたのも、事実だろう。

あき……。

目を瞑り、鞘を抱き締める。それしか、恵已にできることはなかった。

灼ける。

目の奥が煮えたぎるような、どうしようもない、だが耐え難い熱さが苛む。

紅葉。

彼女の名を呼ぶと、僅かな癒しと、更なる痛みが同時に訪れた。出会ったのは、彼女が十二の年の秋だった。同じく秋の生まれの彼女とは、それこそ姉弟のようにして育った、ように思う。

個としての名をくれたのも、彼女だった。

愚かだと、自身でも思う。

それでも、思えば己は確かに、彼女を愛していただろう。

だからこそ、この癒しと痛みなのだろう。きっと、そうなのだ。思い出す。

彼女の一族は類い稀な能力を持っていて、そのために妖や神々から愛されていた。その能力や人ならぬ者に愛されるが故に、人々からは嫌われてしまった。

そんな中でも、彼女は鬱屈することなく、まっすぐに相手の目を見ることのできる強さと優しさを持っていた。

ああ、

そう言えば、彼女を慕うものの中に、あいつがいたかもしれない。三脚の鴉。名は確か、白夜。

あの頃から既に、好きにはなれなかった。

白夜が彼女の能力を測ろうとしているのが、己には見えた。そしてその先に、なにかあるように思えたのだ。決して彼女に良いばかりでないことが。白夜は共にいるためだなどと言っていて、そんな

風に彼女と口を利ける白夜を、酷く羨んだものだった。

白夜の思惑の存在に気付きながらも、それでも彼女は優しくかった。思い出して、しまう。

彼女の面影を、彼女の表情を、声を、仕種を、撫でてくれた手の柔らかさを、温かさを。

彼女を。

今更だ。それこそ、まさに、どうしようもない。

だが、それでも焼け付くような熱さと共に、一途に想う。

彼女を、どうしようもなく、愛していたのだと。

ただの、獣の分際ではあつたし、彼女が己の気持ちを知ることなど、最期の最後までなかっただろう。それは仕方のないことで、僅かばかり悲しく淋しいことではあつたが、だからこそ己は彼女の傍にいられたことを思えば、良かったのだろう。

正しく伝わる想いなど、膨大なその総数において、ひと握りにも満たない。もちろんそれは、妖や獣や人の分類を越えて、誰しもに等しい。

そうして受け入れてきた。そうして、諦めてきた。

彼女との思い出は、そうやって過ぎ去ったものだ。

ふとそう思った途端、身体が重さを持つのを感じた。掌から温かい気を感じる。

なにか懐かしい気持ちさえする。

もみじ、

半ば夢うつつにその名を呼ばわろうとした途端、温かだった気が、弾けるようにして熱を放った。

『

！』

「っ、」その強さに、ばやけて形を成さず崩れかけていた思考が、輪郭を帯びた。

そうだ。己はこんなところでなにをしている。なにを呆^{ほう}けている。

水を浴びたあのように、激しく頭を振るった。

胸の痛みは、どこか遠い。

僅か、自嘲にも似た苦笑が浮かんた。彼女との思い出は、正確に考えてみれば、こんなものなのだ。過ぎ去ったものと、己でも知っていた。

だから、今は『彼女』のために爪を捧げる。

恵已。

今、大切な『彼女』。

大切だった、彼女。
咆哮^{ほえ}。

「それが、何だと言う！」

覚醒した。

居心地の悪い夢でも見ていたような気分だった。

手にした若月を逆手に直し、勢いをつけて牛鬼の指に突き立てた。地鳴りのような呻きを上げて、牛鬼は指を開く。

「恵已！」

放り出される直前に若月を引き抜き、勢いのままに宙空で回転して体勢を整えた。

恵已の黒いた双眸が、まっすぐ秋雨を見つめて、どこか嬉しそうに輝いた。

「うん！」

恵已が鞘に気を籠めるのが、柄を握る掌に直接伝わってくる。優しい気の流れた、と意味もなく思う。

若月を低く構えて、神経を研ぎ澄ます。足元の影で、牛鬼の動きを測る。

痛みに任せ腕を振り回し、敵を認識し、捕えん叩き潰さんと手を伸ばす、

今！

地を蹴り、牛鬼の腕を足場に、懷に飛び込んだ。
狙うは、妖の芯を成す魂。その魂に絡みついた、怨嗟えんさの念だけを
斬り抜う。

このときには、なにかを斬った、という感覚は手に残らない。ただ強いものに触れる。それが熱いような気が、初めて、した。

怨みを忘れよと願った頭が、ずきりと刺したように痛んで、引いた。

「？

」

訝る暇もなく、ふと若月がもういいと伝えてきた。もしくは恵巳の気なのかもしれないが、秋雨は突き詰めて考えたことはない。刀を引いて、くるりと回りながら地に下りた。

見上げれば牛鬼は瞬きもせず虚空を眺めていた。その目に、妖術の光はない。

怨みを斬られた妖は、いつもしばらくはこの状態になった。今まで縫っていたものが不意に奪われるのと同じなのだろう。

だが、少し経てば必ず皆、怨み以外のなにかを見付けて動き出す。だから秋雨はすぐに恵巳の元へ向かう。そこには、三本脚の鴉もいる。

「白夜」

「おう、思い出してくれたか、秋雨」

恵巳に異常がないのを素早く確認して、少し安堵した。若月は構えている。

相変わらず飄然とした白夜は、お互いに過ごした長い年月を感じさせないほど、あの頃のままだった。

「懐かしいものを見た」

「して、一応訊こう。お主はこのままで良いのか？」
ぴくりと若月の斬っ先が揺れた。

白夜が笑う。

秋雨も、笑った。

「お主に何故そのようなことを言わねばならんのか判らぬが、強いて言うなら、このままが、いい。この先も、我が牙は彼女の為に振るおう」

恵已を見る。緊張で顔は強張り、若月の鞘を握り締めてはいるものの、漆黒の双眸が少しだけ和らいだ。

それを、嬉しいと感じる己がいた。

だがそれとは対照的に、白夜はゆっくりと左右に首を振る。

「まだだな」

「なに？」秋雨は思わず眉間に皺を刻み、白夜を睨み付けた。白夜は意に介さず、数度跳ねてから、空へ舞い上がった。もはや秋雨のことは見向きもせず、真っ直ぐに恵已を見据える。

「もう一度言おう、先読みの巫女。君が生き延びることができたら。そのときは、私は君の傍に従おう。覚えておいてくりやれ」

「っ、必要ない！わたしの傍には、秋雨がいるから！」

恵已が叫び、白夜は笑って、そのまま空へ消えた。

背後でゆっくりと、牛鬼が動き出す気配がした。

幕間：ある風の日

昼の温度は木々の陰にいても日々上がり、暖かい陽気に包まれていくのを感じる。

こんな春の日には、陽の当たる場所に出て毛皮を光に晒したいところだが、今日はどうにも風だけが強く、落ち着かない。

そんなことを考えながら、萩はひげを風にそよがせ、目の前でなにやら騒がしく言い立てる朔早に視線を戻した。

「聞いてんの、萩はん」

ちようど、ぎろりと朔早の黒く丸い目が向けられる。萩はぱたと尻尾を振って見せた。

「聞いていたよ」

「嘘つきなはれ。旦那の性が知れたんやで？ これは巫女姫には判らん。あしら妖が祝つたらな」

ざくざくと鎌になった腕の先を地面に突き立て、朔早が言い募る。聞いていようがいまいが、さっきから朔早が言っているのはその一点だけだ。

萩は愛想よく微笑んで見せる。

「そうだね」

萩とて、彼の性が知れたことを寿ことほいでやりたい気持ちは同じだ。

いつもどこか後ろめたさのようなものを抱えていた、朔早の言う旦那こと秋雨が、これで自信を持てるならばいいことだと思う。

だが。

秋雨の傍には、雪と名を与えられたあの少年がいる。

山犬に殺された子の魂が転化したとされる、白兎しろうという妖まじなだったらしい彼は、犬と似た姿の萩を毛嫌いしているようなのだ。

「私が、彼らを祝えるかな」

地面を前脚で軽く掘りながらぼりと萩が呟くと、「彼らあ？」訝しげな顔で朔早が言う。

風が強く吹いて、萩は目を伏せる。さくりとまた朔早が地面に鎌を突き立てる音がした。

「あしが祝いたいのは旦那だけや。巫女姫や小^ちつこいのは関係あらへん」

憤慨したような口調で言い募る朔早に、今まで黙っていた山姫のひながくすくすと笑った。

萩は目を開いてそちらを見遣る。真つすぐに切り揃えられた黒く長い髪が風に揺れて、赤い小袖が風を孕む。物腰はたおやかで、黒目がちの顔は愛らしい。

「朔早ちゃんは、本当に秋雨兄さまが好きね」

「な！ なんや好きで！ 誰があんなばやばやした妖！」

途端に尻尾の毛を全部逆立て、朔早が大声を上げて抗議する。

「秋雨くんはそれほど抜けてはいないよ」と呟いた萩は、射抜かれそうな眼で睨^ねめつけられてしまった。

「じゃあ朔早ちゃんは、秋雨兄さまが嫌いなの？」

おっとりとしなが訊いて、朔早は短い耳をぴくぴくと動かす。

「き！ 嫌い、やないけどやな……。そないなこと、今どうでもええやろ！」

「あら、ひなは訊きたいわ。ね、萩兄さま？」

「わ、私に振らないでくれ……」

朔早の鋭い視線から逃げるようにして、萩は鼻の上に前脚を乗せる。

秋雨を慕う妖は、彼に個としての名を貰った者がほとんどだ。言わば親のようなものであつて、つまり萩からすれば『嫌い』が『嫌い』相手である。だから朔早のようにむきになる必要はないとも思ふのだが、そうもいかないのだろうと判つてもいる。

ちなみに『萩』は自らで名乗り始めた名だ。都に近頃増えた、識者達の故郷なのだという。むろんその地のことは全くと云つていいほど知らないが、流行りには乗つておけば面白い。だから少し前にはまた違つ名を使つていたが、今ではもはやどうでもいいことだ。

「とにかく！ 性が知れんで悩んでたんは旦那やねんから、あしらが祝うんは旦那やる！」

ざくざくと土くれを散らしながら朔早が強引に話をまとめた。もちろん最初から異論はなかったひなが頷く。萩も雪がないのならば気兼ねせずにいられる。ひとつ頷いてみせると、朔早は満足げに「よし」と言った。

それから、他に誰を集めるかの相談が始まる。文女あやめはどうか、松風坊とやらにどうにか連絡は取れないか。

「それはいいとして」

萩が口を開くと、ふたりの視線が集まる。

「祝うつて、なにをするんだい？」

「……」

ふたり分の沈黙が落ちて、ひょう、と風が葉を揺らして渡った。皆の性は野山に棲む獣であったり、人の手による道具であったりする妖である。祝うとひと言に言っても、盛大に宴を開けるわけもない。

よりにもよって、人に一番近い生活をしているのは、主役たる秋雨だ。

まあ、秋雨くんが我々にケチを付けることはないだろうけどね。そうは思うが、現実的に考えて、やはり出来ることに限界はある。萩の言葉に、朔早とひなが俯いた。

しばらくして、ひなが手を叩く。

「だいぶ春めいて来ましたし、ひな、お花をたくさん摘んで来ますわ。多少は場も華やかになりますでしょう？」

「せやなあ……人と違ってあしらに豪華な料理は必要ないしな……」
朔早も呻くようにしながら頷いた。

妖の中には人と同じように口から取る食事をするものもある。だが、そうでない妖が圧倒的多数だ。人の恐怖や驚愕、怨み、楽しさなどの感情を糧とするものから、眷属である木々や岩石、風などに力を分けてもらうものまでいる。朔早は前者で、ひなは後者

だ。ちなみに萩は本性の頃のままだ、木の実や鼠を好んで摂取する。その点秋雨で言えば、以前から食物を口にすることはなかった。性の知れた今となつては、犬神である彼は、憑いた血筋である巫女姫と共にいることで力を得ているのだらうと察しがつく。

ひなの提案以上の名案は浮かばず、三匹の妖は頭を抱えた。

喜んで欲しいのに。

嬉しいと思つて欲しいのに。

なのに、なにも考え付かないことが、口惜しい。

「妖つて、こうしてみると色々不便ですわね……」

「友達を祝うことすらできないなんてね……」

『人』のようにひとつでない分、交わるのは難しい。そんな中で絆を得ることができた喜びも、元がひとつでないだけ大きいというのに。

風が草をさざ波立てて抜けていく。

「……しゃーない」

険しい表情で朔早が呟いた。萩とひなが彼女に顔を向ける。

「できへんことばやいても変わらんわ。あしらにできることをやるだけや」

そう宣言すると、ほんの少しの打ち合わせのあと、強い風を選んで朔早はすぐさま秋雨と呼びに行った。

しばらくして、はなだ縹色の袴の裾を風に遊ばせながら秋雨が歩いてくる。その肩には、朔早が乗っかっている。

萩とひなを目に留めて、秋雨は顔を和らげた。

「萩。ひな。朔早に急げと言われて来たが、皆して、俺に何か用事があるのか？」

「旦那。あしら、色々考えたんやけど、これぐらいしかできへんから」

朔早の言葉に呼応して、ひなが花束を差し出す。明らかに面喰らった顔をして、「え？ え、と……？」それでも秋雨はそれを受け取った。

ひなが、花に負けなくらい可憐に笑う。

「秋雨兄さま、性を取り戻されたこと、ひなも我がことのように嬉しく思いますわ」

ふ、と、秋雨の眼が真剣味を帯びた。萩も進み出て、秋雨を見上げた。

「今までの君が妖でなかったと言うつもりなんてさらさらないけど、これでまた少し、踏み込んだ話もできるかと思うと、私も楽しみだね」

最後に朔早が、エヘンと咳ばらいした。

「まあなんや、その。これからもまた仲ようしたってや」
贈ると決めたのは、皆の想い。

それはきちんと秋雨に届いたらしく、彼は萩が、少しらしくないと思うほどに相好を崩した。

「あ　ありがとう。とても、その……嬉しい」

強い風にも消されることなく、その言葉は耳に届いた。

参幕：壹章

なにかが壊れる、音がした。

繋いだ手が、徐々に温かくなっていくような気がする。

きらきらとした粒子をまとった老人は、うつすらと目に涙を浮かべ、それから背後に横たわる小さな男の子を見て、俯くように頷いた。

「この子には、つらい思いをさせてしまったねえ……」

男の子は穏やかな寝息を立てて眠っており、老人の声には応じないが、それでも老人はどこか嬉しげで、そしてまたどこか、淋しげだった。優しい眼で、両手を繋いでいる恵已に向き直る。

「ありがとう、お嬢ちゃん」

「うん。忘れないでね。この子があなたを大好きだったから、あなたはこの子の身体を使えたんだって、こと」

「忘れやしないよ」

その言葉を最後に、繋いだ手の感触がだんだんと薄れて、消えた。手に残った温かさも、儚く薄れていく。

終わった。

様々なことへ対する安堵から目尻に滲む涙を、右手の甲で乱暴に拭って、恵已は顔を上げた。

「あき」

「うむ」

しゅる、と衣擦れの音を立てて、秋雨が片膝をついた状態から立ち上がり、眠ったままの男の子を抱え上げる。

青みがかって見える深い灰色の髪が揺れる。淡い月光の下でも、灰色の双眸は光って見えた。

性は犬神という妖。

呪術と剣術を得意とする、恵巳の一族へ仕える、もとい血筋へ憑く、守護者。

「帰るか」

穏やかな声音で告げられて、「うん」伸ばした手を、秋雨の黒い袖に触れる直前で止めた。

秋雨はそのまま数歩足を進めて、それからついて来ない恵巳を訝って振り向く。

「恵巳？」

「う、うん、なにもない」

慌てて笑って見せながら、伸ばしていた手を引っこめた。秋雨は首を傾げながらも、腕に男の子を抱えているのでそのまま眼で行くぞと促す。恵巳は頷き、今度は大人しく秋雨の影を踏んで追った。

先の八咫鳥の一件の後、性を思い出したと恵巳は秋雨自身から話を聞いた。あの八咫鳥　白夜　とは、最初の巫女姫、紅葉と共にいた頃の知り合いなのだという事とも。

恵巳にとっては、何代前かもはっきりしないほど、遠い先祖の話だ。それほど遠く過ぎ去った話だと判ってはいるのだが、どうしても恵巳には、紅葉のことを語るときの秋雨の眼が、つらかった。

恵巳を見るそれとは、明らかに違っていたから。

性を知り記憶を取り戻したところでなにも変わらないと思っていた。だが確かに秋雨は、そして恵巳自身も、なにかが動いた。どこかが、ずれてしまった。

そんな、気がする。

すっかり温かくなった夜風に、紫蘇色の袴の裾と白い袖をはためかせながら、恵巳は深く息を吐いた。

「わたしって、ほんとダメだなんて思うの……」
「そうか？」

「もつと喜んであげられると思ってたの。お祝い、してあげられるって、思ってたの。なのに、わたし、すごく汚い……」

鼻の奥がツンとして、なんだか目まで潤んだ。

秋雨にとって紅葉というひとが、これまでのどんな巫女姫よりも特別であつたという想いが、その眼から言葉の端々から、窺い知れた。

そして彼女が、今もなお、秋雨にとつては特別なのだ。秋雨の中心できっと、彼女はまだ生きている。

それだけのことが、こんなにも心に重い。気持ちが乱れる。

ごし、と手の甲で目尻を擦る恵巳に、いつもの指定席についた乙竹がうなじに手をやった。脂気のない白い髪が春の風に揺れる。

母・八千代の元へ行くと言った秋雨に雪を連れていってもらい、故意に作つた、ひとりの時間だつた。乙竹にはしばらく会っていなかったから、この自分の変化について聞いてもらいたかつた。なんだか乙竹の前では涙を堪えてばかりだ。

初めてだつた。

秋雨に傍を離れていて欲しいと思つたのは。

その一連の話を聞いた乙竹の反応が、今のこの状況だつた。

「犬神、ね……」

「乙竹さんも、秋雨と同じ立場だつたら、こんな風な態度取られるの、ヤですよ……？」

頭では判つてはいるのだ。だが、想いが追い付いてくれない。

恵巳の問いに、乙竹はあからさまに眉を寄せ、形の整つた唇をひん曲げた。

「……やっぱり、ヤですよ……」

「というか、僕はあんたが、僕になにを望んでるのがさっぱり判らないんだけど、恵巳？ それから、あんたが秋雨になにを望んでいるのかも、あんたがあんた自身になにを望んでいるのかさえも、判らないね」

うなじに手をやったまま、乙竹はカンと下駄を一度打ち合わせた。

その音に、恵巳はなんだかいたたまれなくなつて俯いた。

そんなこと、恵巳にだって判らないのだ。

答えを見付けられない恵巳に追い打ちをかけるように、乙竹は言葉を紡ぐ。

「確かに僕も、あんたがここまでだとは思つてなかったかな」

「！」

恵巳の胸に、その言葉はずしりと響いた。

（恵巳は聡い子だな）

昔からよく秋雨に言われたその言葉。恵巳が聡いと秋雨が喜び褒めてくれるのだと、ならば聡くあろうと、いつからか意識するようになった。つまり反対を言えば、愚かだと、嫌われてしまう。

だから恵巳は、自分の愚かさを特に嫌っていた。だというのに、今の自分は、どうしようもないほどに愚かだった。

膝の上で、生き成なりの白に若緑の模様が可愛い小袖の生地を握る。

耳にはさわさわと葉は擦すれの音。時折乙竹の袴が風に鳴る。

「恵巳」

「……はい……」

その固い声音に、自分の愚かさを怒られると思った。自然、姿勢も丸く縮こまる。

「話しかけてるんだから、僕の顔を見なさい」

怒られた。

それから、恵巳が視線を上げた先で乙竹は困つたような顔で、それでも笑つた。その思いがけない優しい表情に、恵巳はぽかんと口を開けて見入ってしまう。

「恵巳、僕はあんたにもつと甘えていいと言つたはずだ。考えてることを、全部声に出して並べてごらん。そうすれば、」

乙竹はいたずらっぽく片目を瞑つてみせた。

「それが例え、どれだけ意味不明で支離滅裂で破茶滅茶だったとしても……とりあえずは僕に伝わるさ。そこから一緒に、整頓していこう」

「っ……はい！」

なんだか少し酷い言われようをしたような気はしたが、恵巳はとにかく乙竹の好意が嬉しくて、勢い込んで頷いた。髪に結んだ鈴の音も、心なしか弾んで聞こえた。

それから、思い付く限りの言葉を並べていった気がする。自分が声に出すことで新しく心に浮かんだ想いも、また次々と声にしていた。

乙竹は時折相槌を打ちながら、基本的には黙って聞いていた。

そんなことを続ける内に、恵巳にも少しずつ見えてきたものがある。それは乙竹にも同じだったようで、恵巳の言葉が途切れると彼は言った。

「よっぽどあのぼけぼけした妖のことが大切なんだな、恵巳は」

「……はい……」

だって、生まれたときから傍にいたのだ。傍にるのが当たり前で、いつでも恵巳のことを考えてくれていた。

失いたくない。

嫌われたくない。

と奪られたく、ない。

「やっぱり、ただのわがままですよね……」

恵巳が項垂れると、乙竹は「いいや」と言った。

「実に当たり前で普通で、よくある考えだと僕は思うよ」

からん、とまた下駄が打ち合わされる。白い髪が風にそよぐ。

「むしろ、そんな想いを抱くからこそ、人は可愛いものだと僕なんかは思う」

「か、かわいい、ですか？」

恵巳は虚をつかれて目を真ん丸にする。乙竹はにこにこしたまま頷いた。

「恵巳。愚かであることは、悪いことばかりではないよ。人は神じやない、愚かなところがあっていいのさ。神にだって、愚かなところはある」

「はい……」

「ただ、愚かなばかりではいけないということだ。その点において恵已、あんたは愚か過ぎるほど愚かで、同時に賢明だよ」

「……えっ、と」

返答に困る。ありがとうと言うのもおかしいし、すみませんと言うのもなにかずれている気がした。

恵已がまごまごしている間に「あーあっ」突然乙竹は空を仰いだ。紅い両目がきらりと光る。

「え？ えと、どうしたんですか？」

乙竹の行動の意図が読めなくて、恵已はおろおろしてしまう。機嫌を損ねてしまったのだろうか。

くつくつと喉で笑いながら乙竹は恵已を見た。まっすぐに、見据えた。

「ほんと、あんたがここまでだとは思わなかった」

「え？」

「悔しいね。正直、すごく悔しいよ」

「え？ え？ なにがですか？」

掴めない。瞬きを繰り返す恵已に、乙竹は紅を挿した目尻を和らげてみせた。

「あのぼけぼけした妖には直接言わないと伝わらないよ。僕に言っ
たみたいに、言ってやるといい。あいつがどういう反応をするか、
少し、見ものだね」

「あ……え、と、でも」

そんなことを秋雨に直接言うことを考えると、頬が熱くなる。本当の想いだというのに、いや、だからこそ、伝えるのが難しいのかもしれない。

以前に乙竹に同じことを言われたときも、やっぱり秋雨にはなにも言えないままだった。

だって。

紅葉というひとが秋雨にとって大切なひとであるという事実は変

わりようもないし、変えようもない。そう判っているのに、奪られたくないなんて、そんな、

「そんな、子供みたいなこと……」

「僕らからしたらあんた達、人は、いくら背が伸びようとよぼよぼになろうと、子供みたいなものだよ」

「……あ」

あっさりと言われて、恵已はぽかんと口を開けた。

いつも忘れがちになる。今この目の前にいる少年も、八百歳を超える鴉天狗なのだ。秋雨に至っては 紅葉がいた頃を計算すれば判るのかもしれないが、とりあえずは 年齢不詳である。

十三が十六や二十になったところで、なにも変わらないのかもしれないなかった。

「……なんか、それはそれで物足りないなあ」

恵已の無意識の呟きに、乙竹が盛大に噴き出した。

「ッあつはは、あんたつてホントに面白いな！」

「なんで笑うんですか」じとりと睨んだ恵已にも構うことなく、

乙竹はさも愉快だと言わんばかりに、全身で笑った。

下駄と落下防止用の柵とがぶつかって、コンと木の響く音がする。

「あー、はは、だつて『いかにも』だからさ。あー、やっぱり悔しいな」

さつきから乙竹が言うことが、恵已にはさっぱり理解できない。

自分の中だけで話を進めるとはこういうことか、と恵已は思いがけないところで学習した。

確かにこれでは全く話が通じない。

「あ、あの、悔しいって……わたし、なにかしましたか……？」

「言わなきゃいいのに、言わずにいられない自分が悔しいのさ」

その強い、黒みを帯びた紅い目。射抜かれて恵已は言葉を失う。

なんだか吸い込まれそうだ。風に浮いた白い髪まで、なんだか恵已の意識を奪う。

もしかしてなにかの術だろうか、なんて思ったとき、ふとその双

眸が細く笑んで、恵已も力を抜く。

「恵已。あんたが秋雨を想うのは、おそらく僕があんたを想うのと同じなんだよ」

「へ」

あまりに思いがけない台詞に、喉から変な声が出た。

だって恵已の秋雨への想いと言えば。

失いたくなくて、

嫌われたくなくて、

奪られたくない、なんて。

そんな。

だって。

「だって、乙竹さんは、子供が好きだから、わたしに構って下さってるんでしょう？」

「『下さってる』とは光栄だけど、僕がいつそんなこと言った？」

乙竹の淡々とした口調に、恵已は黙った。確かに彼が直接そう言っただけではない。

でも、とか、だって、とか、恵已は頭を抱えて別の答えがないかと探す。だが、見付からない。

くつくつと、乙竹が喉で笑った。

「最初からそう言ってるのに、あんたが気付かないからさ。言うしかなかった。想いつてのは、伝えないと伝わんないね」

「ご　ごめんなさい……」

なぜか、謝っていた。

「なんで謝るんだよ。想いつてのは身勝手なもんだろ。きちんと伝えようとしてなかった僕が悪いのさ」

「で、でも」伝えてはいたはずだ。恵已がただよくも考えずに流してしまっただけだ。そう言いたかったが、「だから恵已」乙竹の紅い目に見据えられて、口をつぐんだ。

「あんたも想いを伝えるくらいはしていいんだ。いや、後悔したくないなら、伝えるべきだ」

後悔。

いつすることになるのか、判らない。

でも、するのは嫌だ。そう思う。

凜とした重みのある言葉に、思つて恵己は恐る恐る頷いた。途端に、乙竹がころつと表情を変える。

「まあ、想いが実るかどうかはあんたとあいつの関係次第だけどな」「ううっ……そうですよね……」

「あつは、今さっき僕をあんなにきつぱりフツといて、そこであんたが悩むなよ」

「き、きつぱりなんて」

言つてない。

「ごめんなさいって言つたら」

「あう……」

言つてた。

「あーあ、あんたがこんなに秋雨莫迦だったなんてなあ。ちょっとくらい付け入る隙があるかと思つただけど」

「……ごめんなさい……」

なぜか、謝っていた。

・式章

苦い匂いが鼻についた。

ごつごつした石をくり抜いて作った鉢に乾いた草を入れて、すりこぎで潰して粉にする。ざらざらとした感触が掌と鼓膜へ伝わる。

鉢の底にいくらかできた、砂のような色の粉末を見るともなく見て、秋雨は考える。

恵巳の様子が、近頃おかしい。

理由は、恵巳の様子が変わった時期を考えれば、己にあるのだろうことくらい、秋雨にも判る。だが、それがなにかが、判らない。

犬神。

それが、己の性。

知ってから、呪術を扱うことが、以前よりもたやすくなったように感じた。元より性としてその素質には長じていたのだろう。見失っていた性を認識することで、より術を練りやすくなった。

『彼女』を、更に護りやすくなった。

そう、思っただのに。

恵巳は聡い子だ。告げてはいない、そうした秋雨の変化にも気付いただろう。そしてきつと、いくつかあるそんな変化の内のどれか、あるいはどれもが、気に入らないのかもしれない。もしくは、

「言っていないことが、気に食わないのか……」

「お兄ちゃん？」

秋雨の独り言に、隣で秋雨の手元を見物していた雪が首を傾げた。「あ、いや」何故か慌てて取り繕う。手を突然動かしたために、危うく鉢をひっくり返すところだった。

雪は、白児こいぢという妖だったのだという。白児は犬神に付き従い、従属する。そのために白児は犬神を見付け出すことに長けているのだという。だから萩よりも秋雨を選んだのだと、今なら判る。

そうしたことも含めて、思い出したことは全て恵巳にも八千代に

も告げたはずだ。

草の筋を鉢から除いて、粉末を油紙に包む。黙々と作業をするこ
とでなんとか考えをまとめようとするのだが、頭に浮かぶのは取り
留めのないことばかりだ。

やはりただじつと考えることは性に合わない。

「いつかのように、文女あやめに話をしに行こうか……」

文女ならば、このもやもやして捕らえどころのない気持ちも含め
て、理路整然と語ってくれるかもしれない。

だが、恵已をあまりひとりにしておくことも、己に対して許しが
たかった。

かと言って、

秋雨はちらりと雪を見る。あどけない顔で、雪は真っ直ぐに秋雨
の目を見つめ返してきた。

雪に言えば、雪は一目散に恵已のところへ行くだろう。しかし恵
已はどう考えてもひとりになりたがっていて、秋雨とて恵已を護り
たいのであって、監視したい訳ではない。

恵已の年頃の『彼女』達は総じて不安定で、そうでなくとも、か
つては先読みの巫女などと呼ばれた『彼女』達は多感だ。下手なこ
とをして傷つけたくなかった。

視線を外そうとしない雪の髪をくしゃくしゃと撫でてから、秋雨
は立ち上がる。

隣の部屋には八千代がいる。具合はだいぶ良くなって、近頃では
起きていることが多い。

「雪、白湯ゆたかをもらって来てくれ。あと、灯りも」

「はいっ」

ものを頼めば、雪は秋雨や恵已のいないところでも行けるらしか
った。元気良く駆け出す後ろ姿を見遣ってから、秋雨は文机につく
八千代の斜め後ろにあぐらをかいた。まだ陽はあるが、障子の閉じ
られた部屋は薄ぐらい。

くすりと、不意に八千代が笑う。

「そこにおいては顔を見て話ができませんわ、秋雨」

「あ、ああ、すまぬ」

仕えて控えていた頃の癖だった。秋雨は髪をがしと掻き回しながら八千代の隣へ移動し、油紙に包んだ薬を差し出した。

「いつもありがとうございます」

白くたおやかな八千代の指が紙を受け取る。そして、穏やかな漆黒の瞳の中に、なにか鋭い光を宿した。

何故かいたたまれなくなって、秋雨は顔を背けてしまう。

「秋雨」

「す。すっかり良くなったようで、良かった」

「……秋雨」

二度目の声音は、静かながらに強かった。そもそも妖である秋雨が、自らが律として主と認めた者から逃げられるはずもない。

おずおずと八千代を伺うと、八千代は綺麗に微笑んだ。

「なにか、迷っていますか？」

薄闇に通る声。疑問の形でありながら、既に確信しているような、それ。

勝てない。

そう思う。

「恵巳のことですか？」

「……うむ」

そこまで言い当てられては、白を切り通す自信もない。秋雨は小さく頷いた。自らの青みがかった灰色のはずの髪が視界の端で揺れる。今それは、周囲の薄闇を吸い込んだように黒い。

意を決して、八千代を見据えた。

「八千代。俺は恵巳に、嫌われてしまったのだろうか？」

「はい？」

「む？」

秋雨にとっては至極当然で、重大な質問だったのだが、八千代は目を真円にした。なにかおかしかっただろうか。

沈黙が落ちて、雪が灯りと白湯を運んで戻ってきた。八千代はゆっくりと薬を喉に流し、息をつく。

「……その、」静けさに次第に耐えられなくなって、秋雨は口火を切った。元より、じっと思案するのは性に合わない。

「俺の本性が知れてから、恵已が、その……そう、よそよそしいように感じる。俺の、性が気に食わなかったのだろうか？」

護るなどと言っても、犬神である己は所詮、恵已の血筋に憑いているのだ。気味悪がられても、嫌悪されても仕方ない。

だが、もしも。もしも本当に、恵已が秋雨を疎んじ始めたのなら、己はどうすればいいのだろう。恵已から離れるべきなのか。だがそれでは護れない。この爪を、振るえない。

嫌だ。

閃くように思った。

情けないまでに稚拙で、だからこそどうしようもないほどに頑なで一途な想い。

灯りが揺れて、雪が頼りなげな顔で秋雨を見上げていることに気付く。

笑ったつもりだったが、うまく笑えたかは判らなかった。

「それは、恵已に訊いてみるしかありませんね」

きつぱりと、八千代が言った。

「今のあなたが仕えるべき巫女姫は、恵已ですから、わたしも恵已の決定に従います」

真っ直ぐに目を見つめて言われた台詞に、秋雨は嘘はないのだろうと直感的に知る。こういうときの八千代は、己を絶対に曲げない。普段のたおやかさからは想像が付かないほど、芯は頑固だ。

恵已が秋雨を受け入れられないと言えば、八千代は秋雨に一切の庇いだてをすることもなく頷くのだろう。

「ですが」

にこりと、八千代の形のいい唇が楽しげに笑みを象る。

「少なくともわたしはあなたを嫌ってなどおりませんし、わたしが

言つのもおかしいかもしれませんが、あの子、とても聡いんですよ」

知ってらして？　そう気取って言われて、思わず秋雨は笑ってしまった。

「うむ。よく知っておる」

なんだかそう言われてしまうと、悩んでいるのが莫迦らしく思えた。笑つてしまえば、大したことではないように感じる。

信じるしかなかった。これまでの己の成してきたことと、主と己の関係を。そしてそれはそれほど脆いものだと、秋雨自身も思えなかった。

「雪くんは少しまたわたしと遊んでいきましょうね」

「あ、いや、八千代。雪は俺が、」

「文女さんのところへ行きたいのでしょうか？　その間、預かりますわ」

「え、な、なに故それを」

「まあ、大きな独り言。聞いて欲しいのかと思いましたが。ねえ？　ころころと八千代が幼い娘のように笑う。雪も大きく頷く。

どうやら、いつの間にか考えていたことを口に出してしまっていたようだ。秋雨は髪をがしと掻き回し、苦い笑みを浮かべた。

「……すまぬ。では、しばしの間、よろしく頼む」

「ええ、承知、です」

そして秋雨は、明るい気分で文女の棲む薄暗い廊下へ足を向けた。

だが。

相変わらず文机に頬杖をついた文女は、なにかを恐れたような、戸惑うような視線でもって、秋雨を迎えた。

「なにかあったのか、文女？」

いつものように秋雨が文机の前にあぐらをかきながら問うと、文女は一度恭しく頭を下げてみせた。

「？ どうした」

「性が判明したそうぞ。おめでとうと、とりあえず言っておくよ、旦那」

「あ、うむ、ありがとう」

含みを持った文女の言葉に、素直に頷けない。居心地の悪さを感じて、座り直す。

顔を上げた文女は、ほとんど睨むようにして秋雨を見据えた。

「さて。これがあたしの杞憂であるなら良し。そうでなくても、早い内に旦那が来てくれて良かった」

「な、なんだ。俺はお主になにかしたか？」

必死で記憶を辿る。だが苦手意識を持っている文女に秋雨が会いに来ることは稀で、憑喪神である文女は本体からそれほど離れて行動することはできない。気付かない間にでも、互いに干渉することはあまりないはずだ。

少なくとも秋雨の記憶には、なかった。

秋雨の狼狽とは裏腹に、どこまでも落ち着いた声で文女が応じる。

「あたしじゃないよ。旦那と巫女姫の、これからのことさ」

ぴくんと、全身が反応した。

秋雨が文女に訊きたかったのは、まさにそれだ。

眼で続きを促した秋雨に、しかし文女はしばらく物憂げに長い髪に指を通して、言葉を探すような素振りをした。散々そうして悩んでから、文女はちらりと秋雨を見た。

「旦那。旦那の性は、犬神で間違いないんだね？」

「……間違いないかと言われると、やや自信はないが。犬神である」と自覚してからの調子が以前よりいいのは確かだし、白兎である雪も俺を犬神だと認めておる」

「そうかえ。それで旦那は、性を知ったときになにか思わなかったかえ？」

「……いや。ああそうか、と、その程度だった、気がする」

曖昧に応じた途端、くら、と頭が揺れた気がした。

紅葉のことは思い出した。白夜のことも思い出した。自らが犬神であることも、元は紅葉に飼われていた犬だったことも思い出した。だが、なにかが足りない気がする。

決定的に、なにかが欠けている。

それは、なんだ？

空洞に気付いて戦慄する。ぞわりと背筋が冷たくなった。

白夜の声が、頭の中でがんがんと痛いほどにこたまに響く。

（まだだな）

なにがだ。あいつは、なにを知っている。

「旦那」

いつの間にか見開き、焦点のずれていた目を、なんとか声の主
文女に向けた。握り締めた拳は蒼白で、文女の表情を見れば今の
秋雨自身がいかに不安定なのか判る。

思い出してはいけなないと、これ以上突き詰めてはいけなないと、魂
が叫んでいた。

だが、『彼女』達に関わることなのだとしたら、知っておかなく
てはならない。そう思う己も、確かに秋雨は感じていた。

「旦那。あたしは言うべきかえ。それとも、口をつぐんだ方が旦那
のためなのか」

「…………いや。聞こう」

奥歯を噛み締める。「そうかえ」長い息に乗せるようにして、文
女が呟いた。

「先に言っとくよ。今から言うことが旦那にとってどんな意味を持
つにしろ、旦那が今まで巫女姫達に爪を捧げてきたことは、消えは
しないからね。これは皮肉じゃなく、あたしは素直に誇って欲しい
よ」

「…………うむ」

いつになく回りくどい文女の言葉に、秋雨の不安は際限なく膨脹
する。息をするのも苦しいような気がする。

文女も言葉にしづらいのだろう、形の綺麗な爪を軽く噛んだりし

て、間合いを測る。

まとり付くような沈黙のあと、意を決したように文女は居住まいを正した。

「犬神の成り立ちは、地面に首だけ出して埋めたその前に餌を置いて、餓死させた犬の首を断ち……いや、ここいらでいいね」
ちらりと秋雨を見て言葉を切る。それほど酷い顔をしているらしい。

もう既に頭の中がぐちゃぐちゃだ。

目が回る。

吐き気がする。

身体すべてがぐらぐらと揺れていて身の置き場がないような不安定さと、いつそ身体に中身なんかなくて空っぽになってしまったような虚無感がないまぜになった。

「だから、簡単に言えば犬神は、人を怨ませることで人為的に作られた妖……」

細く長く息を吐き、「つまりね、旦那」文女は囁いた。ひそやかに、できるならば伝えたくないとも言つかのように。

「旦那は、巫女姫を怨むが故に生まれたはずの、妖なんだ」

指先が冷たい。

では、俺は、何のために。

紅葉。

紅葉。紅葉。紅葉。

大声で叫んで、呼んで、ただ質したいのに、彼女はもういない。張り付いてしまったかのように、喉も動かない。

欠けていたのは、妖になった理由だ。妖として転化した際の記憶だ。

紅葉。

君が俺を殺したのか。

：参章

言おう。

惠巳は乙竹の去ったひとりの部屋で、何度目かの決意をした。ひとりでぐだぐだ悩んでいたって、なにも変わりはないのだ。

うん、言おう。

頷いて自分を励まして、それから頭を抱える。

いつ言おう？ どうやって、なんて言おう？

さつきからその繰り返しだった。心の臓が脈打って、そわそわする。

乙竹に言ったようにすべてをぶつけてみようか。だが、それでは肝心なところがきちんと伝わらないような気がするの、きつと惠巳の思い過ごしにはならないだろう。

ひとりで悩んでたって、しょうがないのに……。

判っているのに割り切れない。割り切れるならば最初から悩んだりしないのだ。

例えば惠巳が秋雨に「誰にも奪られたくないから、ずっと傍に居て欲しい」と告げたとする。きつと秋雨はいつもの表情で少し首を傾げてから、「当然だ」と応じる。

それでもいいかと一瞬思いかけて、惠巳は首を振る。違う、ダメだ。耳の前の髪に結んだ鈴がりりんと鳴った。

それでは、ただの主従の誓いになってしまつて、惠巳の気持ちは、惠巳の想いは、届かないままだ。それでは、意味がない。

惠巳は厚めの布を敷いた床に座り、帯が歪むのも気にせず壁にもたれた。

「……あきは、わたしのこと、どー思ってるのかな……」

数いる巫女姫の内のひとり、なんて答えられたら、しばらくは立ち直れる気がしない。惠巳は自分の勝手な想像に打ちのめされ、がつくりと頂垂れた。

そのとき、ぱたぱたと廊下を走ってくる足音が聞こえた。反射のように、がばつと恵巳は顔を上げる。

雪だ。ならば、秋雨も一緒に違いない。

どうでしょう！ まだなにも決めてないのに！

意味もなく立ち上がり、着物の裾を直したり、窓に寄ってみたり、落ち着きなく部屋をうろつく。

「おねえちゃん」

すぐに雪の声が障子の向こうから聞こえる。どうしようもなかった。

「う、うん、どうぞ！」

上擦りそうになる声を必死になだめる。ところが、障子を開けて入ってきたのは、雪ひとりだった。それだけではなく、雪の表情も心なしか晴れない。

恵巳は膝を折って雪の顔を覗き込むようにした。

「どうしたの、雪くん？ どっか痛いのか？ あきは？」

かすかに眉をひそめてさえる雪は、先の問いには首を振って応え、後の問いには廊下を指さすことで応じた。

廊下に顔を出してみると、件の護り手が壁にもたれて座り込んでいた。青みがかかった濃灰色の前髪の下で、顔色すら蒼い。

それどころか、恵巳に気付くとびくりと肩を震わせた。

その尋常でない様子に、恵巳は息が詰まるような苦しさを感じる。転がるようにして廊下に出て、秋雨の傍に寄る。途端に顔を引き攣らせ、慌てて距離を取ろうとした秋雨の袴を握り締めて縫い止めた。「どうしたの、あき！」

これまで、秋雨が恵巳を避けたことなどなかった。

それだけではない。どうやら秋雨は、なにかに怯えている。それが『恵巳』なのか『人』なのか、『女』なのか『巫女姫』なのかは、判らない。

震える秋雨の唇が、かすかに開いて、それから散々の逡巡ののち、「すまぬ……」意味の通じない謝罪と共に、固く閉じられた。もど

かしい。

恵已はイライラして、握った布を引いた。びっくりと秋雨がまた肩を震わせるが、知ったことではない。

「あき！」

背けようとし続ける目を、真っ直ぐに射る。青ざめた顔が、ようやく恵已を見た。

それだけでも恵已はなんだか安心して、ほうと息をついた。

「あき、どうしたの？ なにがあつたの？ 言いたくないなら訊かないけど。聞いてもいいなら、話して」

「あ……」

灰色の目が揺れる。そろりと左手が若月の柄に触れて、それからおもむろに腰帯から鞘ごと引き抜いた。恵已に向けて突き出す。

「……恵已。しばし、預かっていてもらえないか」

「えっ」

急な提案に、恵已は目を真ん丸にした。

若月は秋雨の爪であり、恵已らを護るための手立てだ。主上に言われたときですら手放すことを阻んだというのに、こういうことなのだろう。

戸惑う恵已はしかし、刀と共に突き出された拳が色を失っているのを見て、頷く。

「わかった」

若月の螺鈿らでんの巻いた黒漆の鞘に両手を伸ばして、強張った秋雨の指から受け取り、そつと大切に抱いた。

それは思ったよりも長くて、そしてずしりと重い。

その重みに、腕よりも肩よりも、胸が痛んだ。

なにがあつたのか、恵已には全く判らない。だが、この爪を手放したということは、秋雨が今、恵已達を護るつもりがないということだ。もしくは、なにかがあつて護ることができない。

しかも、その理由は恵已には言えないらしい。

きゅう、と喉が締め付けられたように息苦しくなって、目尻にじ

わじわと涙が溜まる。秋雨がそうして、なにかもをひとりで決めてしまうことが悔しい。信賴していないのだと、言われている気がして。

秋雨が恵巳の涙に気付いて、ぎよっとした。

「え、恵巳」

その及び腰のヘタレな声が引き金になって、ばたばたと大粒の涙が頬を滑り落ちていく。

けれど同時に、恵巳は全身全霊の力を込めて、嗚咽おえつを殺して引き結んだ唇の両端を、上げて見せた。涙は流れ続けてはいるものの、なんとか精一杯の、微笑みを浮かべる。

秋雨が息を呑むのが判った。

「預かつてるからね」

「っ、」

それだけしか、言えなかった。

屋根の上で、ひとり秋雨は呆ほうけたように空を見上げた。

そろそろ、もう秋に差し掛かるうとしている空は徐々に高くなり始め、さっきまで中天にあったはずの陽は、既に西の空に落ち掛かっている。反対側の空にはじわりと夜が侵食を始め、紫と紺の混ざったような色が、赤や橙と調和して不思議な色を成す。

これで、良かったのだ。

軽くなった左の腰に手を滑らせて、言い聞かせるように秋雨は思う。

恵巳の傷ついた顔が頭から離れない。あの顔を見るに、どうも己は嫌われていたわけではなさそうだと、今更ながらに思って自嘲する。

そうして、頂垂れた。

この胸に沸き上がる想いが、間違いであればいいのに。せめて、

一時的なものであると思えばいいのに。
頭がぐるぐる回るような気になる。許されない想いだ。判っている。だからこそ、秋雨は若月を手放した。

『彼女』を、喰い殺してやる、と。

どす黒い憎悪が身を蝕む。

『彼女』を怨むが故に生まれた妖。その、本当の性を、想いを、思い出してしまった。

許されないことだ。また、有り得ないことだ。何故なら秋雨は『彼女』を護ることが己の律で、それに秋雨は、恵已を怨むつもりはなかった。

なのに、魂は納得しない。今の『彼女』は恵已だと、だから恵已を殺してしまえと、唸りを上げて呻きを上げて、秋雨をさいな苛む。きつと、混乱しているだけだ。落ち着けば、冷静になれば、きつと。

胸が苦しいほどの焦躁。

こんな状態で、爪を携えたまま、恵已の傍にいるのが怖かった。己の弱さに負けて、己の本性の所為にして、衝動を理由にして、いつか、この手で。

ぞつとする。

そんなことは、許されない。

そんなことは、嫌なのだ。

言い訳のように、胸の内で唱え続ける。だが、魂に宿った憎悪の想いは、消える兆しすら見せないまま、数日が過ぎた。

都からの急使が来たのは、そんなときだった。
早馬を乗り潰して、息も絶え絶えにやってきたその男は、恵已にすぐにも謁見を求めた。その一部始終は、屋根にいた秋雨にも知れた。

「なにが……」

降りようか瞬時迷う。恵已にも顔を見せていない。たった数日のことなのに、だいぶ長い間会っていない気がする。

「会いたい、な……」

延々と続く黒い憎悪とのせめぎあいの中で、忘れかけていた想いだった。

漆黒の髪と双眸の、可愛い子。

幼く、優しく、聡明な子。

きつとつらい思いをさせた。

もう、大丈夫ではないか。なにがあつたにせよ、傍にいてやるべきではないか。彼女が、許してくれるのならば。

僅かな葛藤のあと、近くの梢に跳んでから、久々に人の領域へ入った。そうしてしまうと、もはや足は迷いなく、恵已の部屋へ向かった。

まだ急使と謁見している頃合いかもしれないが、そんな場に乱入できるほど、今秋雨は恵已と近しくない。

ひと気のない廊下を音もなく進んで、目的の場所を目指す。屋敷の内のここに、落ち着かなげな空気を感じる。浮ついたようなざわついたような。

案の定もぬけの殻だった恵已の部屋の前に腰を下ろし目を伏せて、主を待った。

どれほどの時が経っただろうか。

衣擦れと、かすかな鈴の音。秋雨は静かに両目を開いた。

「恵已、」

認めた彼女のその様子に、掛けた声が、途中で途切れた。眼に光がなく虚ろで、足取りもふらついて安定しない。秋雨はすぐに立ち上がり、駆け寄った。

「恵已っ」

二度目の声に、ようやく恵已は顔を上げた。ぼんやりと魂が抜けたような顔で、秋雨を見る。

「あき」

ただひと言、小さく恵已が零す。途端に、大きな目に涙が溢れてくるのを秋雨は見た。しゃくり上げることもなく、なにかが壊れてしまったとしか思えないような、とめどない涙が溢れて落ちる。

泣いた顔ばかり見ている。

そんなことをふと思ひながら、秋雨は恐る恐る恵已の前に片膝をつき、視線が合うようにした。何度も何度もためらってから、そつと恵已の肩に触れる。

なにがあつたのか、さっぱり判らない。

ただ、触れた手を恵已は拒絶しなかった。

「恵已、なにが、あつた……？」

恵已は応えない。

秋雨は肩に置いた手を、涙に濡れる頬に移す。言いたいことは色々あるのに、言葉にならない。

少しでも想いが伝わればと、もう片方の手は恵已の手を握った。

小さな手に、力はなかった。

「恵已、無理しなくていい。堪えなくて、いいから」

己のしでかしたことは棚に上げて、莫迦なことを言っている。そうは思ったが、声もなく泣き続ける恵已を見るのは耐えられなかった。

「……恵已、」

「しんだんだって」

「え」

ぽつりと、恵已が言った。

あまりに唐突なその台詞を、理解するのに若干掛かった。

「し　死んだ？」

こくりと恵已が頷く。

「ご崩御、されたの」

「崩御、って」

その言葉を死の際に使われる人間を、秋雨はひとりしか知らない。「主上。が」

さっきの急使はそれを伝えに来たものだったのか。

こくりともう一度恵已が頷く。くしゃくしゃと顔が歪んで、唇を噛み締める。真っ赤になった顔に、秋雨は妙に場違いな安堵を覚えた。

確かに今代の主上はまだ歳若く、予想だにしていない訃報ではあったが、秋雨にとっては恵已が歳相応に感情を表出してくれることの方が大切だ。そうでなくても元々、人の命とは妖に比べると儂い。恵已を刺激しないように、緩く抱き寄せる。

「そうか……。恵已は、優しい子だな」

いくらか関わったとは言えど、他者の死に涙を流せるのは人として美德だろう。そう思って言った秋雨の胸で、けれど恵已はかぶりを振った。

「？」その意味が判らなくて恵已の頭を見下ろすと、恵已は着物の衿に顔をうずめたまま、涙でぼやけた声で言った。

「どく、だつて」

「……え、」

「毒。あのひと、殺されたんだって……ッ！」

悲鳴のような恵已の鳴咽。

ざわりと、身体の芯が総毛立つような感覚が秋雨を襲う。

主上を、弑せばいい。

そんなことが、本当に、本当に許されるのか。

かつて己が信じられなかったことが、起きた。起きて、しまった。みしみしと、魂が音を立てて軋む。

泣きじゃくる恵已をただ抱きながら、愕然とする。想いの隙間から、再び黒い憎悪がその手を伸ばして、秋雨を絡め取る。

全身が冷たい。

腕の中の小さな子。

『彼女』。

許されないこと。

だがその均衡は今、崩れた。

腕の中の。

「嫌だ……」

今なら。

「嫌だ……!」

今なら、

「嫌だ!」

恵巳の身体を掻き抱いて、秋雨は咆えた。

この小さな子が責を負うとなった日に、同じようにこうして抱き締めて、護ると誓ったのに。

護ると、誓ったのに。

久しぶりに顔を見せてくれた秋雨とふたりで

そう、何故か秋

雨も 泣いて。

泣き疲れて眠って、嘘みたいな夜が明けると。

秋雨は静かに、姿を消していた。

：肆章

からん、と軽い下駄の音を聞き付けて、恵巳は立ち上がる。真っ直ぐに窓に向かい、開け放つ。

「こらっ！」

「！」

背の高い樹の梢から屋根に移ろうとしていた雪が、全身を跳ねさせ、伸ばしていた手が空を搔いて、慌てふためいた。

妖ならば多少のことでは大事に至らないから、もう恵巳も容赦はしない。がさがさと寒くなってもなお緑のままの葉を落とし、しばらくもがいて、ようやく雪は体勢を立て直した。

「屋根はダメって何度も言ってるでしょ？」

腰に手を当てて唇を尖らせると、雪は大人しくしゅんと俯いた。

ちゃんと降りるんだよ、と言いついて、恵巳は部屋に戻る。その後ろで再び梢を鳴らし、最後に下生えの草を踏む音が聞こえた。

雪が屋根に登りたがる理由は、恵巳にもよく判る。そこに行けば秋雨がいるのではないかと、そこにいれば秋雨が戻ってくるのではないかと、そんな希望に縋ってしまうのだ。

雪は妖だから、多少のことでは大事に至らない。けれども恵巳が雪の屋根登りを禁じる理由は、ただひとつ。そこは、秋雨の場所だからだ。

秋雨が姿を消して、もうだいぶ経ったというのに、彼の不在に、未だに慣れない。仕方ない。生まれてからずっと、一緒だった。慣れるはずがない。

年がまた明けて、恵巳は十四になっていた。

主上の崩御は、混乱の元になるとして、新年を迎えるまで伏せられていたようだ。お陰で責務の命めいは下らず、皮肉にも秋雨がいなくても支障を来たさずに済んでいた。

だがその平穏も今日までだ。

今日、今年新しくその座についた主上がやってくる。

恵巳はひとつ息を吐いた。

壁には、預かったままの若月が掛かっている。集落の者にやり方を聞いて、きちんと日々恵巳が手ずから手入れをしてはいるが、主を失った刀は、鞘すら弾く光をくすんで弱々しいものになっているような気がする。

「恵巳」

窓の外から、声が掛かる。本当は重たげな羽音で少し前から気付いていたけれど、呼ばれるまで振り向かなかった。

見れば、白い蓬髪に山伏の恰好の少年。乙竹。

恵巳が「こんにちは、お久しぶりです」微笑んで見せると、乙竹はどこかが痛いみたいな顔をした。秋雨がないのだから結界もないのに、彼もがんとして部屋に入って来ようとはしない。

「少し、髪が伸びたかな」

そう言って、乙竹はどう見ても無理やりに笑った。

「そう、ですか？」

恵巳は自分の黒い髪に指を通す。そう言えば胸元まで垂れている。巫女姫の責を負うまでは、いつも肩口で揃えていた。

耳の前の鈴は健在だが、鮮やかな緋色だった紐は、少し褪^あせてしまった。

「乙竹さんは……ちょっと、お疲れですか？」

暗紅色の目に点^{とも}る光が、以前より弱い気がする。この優しい鴉天狗が、自分のために秋雨の居場所を掴もうと奔走してくれているのを、恵巳は知っている。

「僕が？ まさか。有り得ないね」

「ふふ、そうですか。それは失礼しました」

「全くだよ。天狗なんてのは自由気ままに生きてるんだ、疲れるはずがない」

ただ、彼はそれを隠したがっているようなので とぼけたがっているようなので 、恵巳も調子を合わせる。

それでいいはずなのに、どこか白々しくてぎこちない感じがするのは、やはり否めない。

ああ、

秋雨がいなくなってから、なにもかもがずれてしまった。それをこんなとき、痛感する。

恵巳は俯いて、少しだけ笑った。

それを目敏く見咎め、乙竹が眉をひそめる。それから、「……恵巳」低い声音で小さく呼んだ。

「あんた、今年でいくつだっけ？」

「十四、ですが」

「苦しくは、ないのか？」

唐突にも思える乙竹の問いの意味が、恵巳にはよく判る気がする。今までの巫女姫達が責を受けてきた歳よりも、まだ二年も早い。

「あの莫迦がいなくなってから、泣いてないんだろっ、どうせあなたのことだから」

「……」

否定の言葉は出ない。できるだけ、母を真似たような穏やかな笑みを口許に浮かべて見せる。

そんな暇なんて、なかったのだ。だって、たった半年しか経っていない。

まだ半年。そう、まだ半年なのだ。

「いいか、恵巳。僕じゃ力不足なのかもしれないが、なんでもいい、ちゃんと吐き出さないとあんたが、潰れちゃうぞ」

乙竹が本当に心配してくれていることがひしひしと伝わって、「

……、「大丈夫、と言おうとして、やめた。

今なら後悔すると言った乙竹の言葉の意味が、判る。永い時を生きた大妖の忠告に、間違いはない。

けれど。

「ありがとう」

恵巳の喉から出たのは、ただその感謝の言葉だけだった。

ここで誰かに頼ってしまつたら、諦めることになりそうで、怖かった。

若月は、預かっているだけ。彼の姿が見えなくなつて、まだたったの半年。

秋雨は、帰ってくる。

だつて約束、したから。

どんなひとだろう。

巫女姫の装束に身を包んだ恵巳は厚い布の上に座り、今は誰もいない、一段高くなつた場所を見た。そこにも似たような布が敷いてあつて、高価な布を張られた脇息きょしやくまでしつらえてある。

主上が座するための場所だ。

つい半年前までそこに来ていたあのひとが既に存在していないということは、恵巳にとってまだ受け入れがたい。そもそもそれほど頻繁に顔を合わせていたわけでもないから、ひょつこりと当たり前のような顔をして、彼がそこに座るのではないかと思う気持ちが、まだある。

新しい主上が来たなら、この気持ちも切り替えられるだろうか、恵巳はどこか他人事のように考えた。

する、と衣擦れの音を感じ取り、恵巳は静かに平伏した。

ぎ、ぎ、と床板が軽く軋んで、それから視界の上端に若緑色の着物おもてが座つたのが見えた。

「面を上げよ」

「、は、い」

あまりの驚きに反応が遅れてしまつたのは、掛けられた声が想像していたよりも遙かに穏やかで、そして若かつたからだ。

視線を上げた恵巳は、そこに座る男性の顔に、絶句した。

そこにいたのは、恵巳と同じか少し年上程度の、少年だったのだ。見た目としては乙竹と同じくらいだろうか。

恵巳の驚きを他所に、少年は　新たな主上は、にこりと微笑んだ。

「こんにちは、巫女姫。私は、
「上さま」

恐らく名乗ろうとした主上は、横に控えた古参の供回りの者に諫められる。ああそうか、とのんびりした口調で応じて、主上は眉尻を下げ、情けない顔で笑った。

「名を教えてはいけなかったか。えっと、君の名も訊いてはいけないのだったかな？」

「え　いえ、そのようには、
言われていない。ただ、前の主上は恵巳の名になど興味を持っていなかった。

名乗った恵巳に、うんと主上は頷いた。それからあぐらをかいだ膝を、ぽんと叩く。

「じゃあ私のことは、そうだな、柳、やなぎとでも呼んでくれ。よく柳のようだと言われる」

この通り、緑の着物を好んで着る所為かな、と袖をつまんで見せるが、恵巳は「はあ……」絶対に内面のことだ、と思った。

話を聞いていくと、彼はまだ十六の年を迎えたばかりなのだという。だが、名と言い、何故それほど踏み込んだ話をするのか、恵巳は釈然としない。

そんな恵巳の想いを汲んだのか、主上　柳は、目を細めた。

「これから長く付き合おうというのに、互いの呼び名すらない、なにも知らないというのは、どうにも味気ないだろう？　それに、我々は互いにただひとりで、換えの利くものではないと、知らしめる必要がある」

変わらないおどけたような口調で告げられた言葉に、恵巳は息を呑む。

そう、このひとの親は、何者かに殺されたのだ。毒殺という方法からして、きっと近くに仕えていた者に。

渴き切った喉をなんとか動かして、恵巳は懸命に声を紡いだ。

「こ、この度は、まことに」

「恵巳」

しかしやんわりと柳の声が遮る。恵巳の目を正面から見据えて、柳は笑った。

「堅苦しいのは抜きにしよう。相手が病では嘆きようもないさ」

え？

耳を疑う。

思わず柳の顔を凝視した恵巳に、柳はあっけらかんとして言った。
「あれ、聞いていなかったかな？ 私の父は、病に倒れたのだよ」
そういうことに、したのか。

真っ先に、そう思った。主上が暗殺されたとなれば確かに混乱は
大きくなり過ぎるだろう。けれど柳の表情は一貫して諦めたように
穏やかで、恵巳は判らなくなる。

もしかしたら、本当に最初から病だったのかもしれない。

邪推するなら、毒殺だということを、柳が純粹に知らないのかもしれない。
知らされていないのかもしれない。

だが例え恵巳の推測のどれが当たっていたとしても、もう恵巳は
迂闊なことは言えなくなった。柳の笑顔に、一礼する。

「はい」

まさに柳のように捕らえどころのない新しい主上に、恵巳は気を
引き締めた。

その様子に、柳はどこか満足げに頷いた。それから「君のことは
多少聞いてきた」と話を切り出す。

「本当はまだ、責務につく年齢ではないのだった？」

「はい」

「そうかい。私もだ。こんな歳で継ぐつもりじゃなかった。だが継
いだ以上、手探りにでもやっていくしかない。至らぬところも多々
あるだろうが、よろしく頼む」

言って柳は、おもむろに頭を下げた。

驚いたのは、恵已だけではない。柳の供回りのひと達も、恵已の背後に控えた者達まで、主上のその行動に度肝を抜かれた。これまで主上というのはそんなことはしなかったし、またするべきではないと恵已ですら思っていたからだ。

「上さま！」

「なになん？」

血相を変えた付き人の悲鳴にも似た呼び掛けに、ことの重大さが判っているのかいないのか、のんびりと柳が応じる。そのあまりに動じない様子に、呼び掛けた付き人が声を失うほどだ。

啞然とする恵已達の前で、若き主上は静かに居住まいを正した。

「さて、本題に入りたいのだが、その前に少しいかな」

「は、はい」

柳の黒い瞳に、蠟燭の灯りが射して炯^{けい}と光る。

「恵已、君には責務の際に君を守護する者がいると聞いた。あ

あいや、その節は父が無礼を働いたね」

途中、なにかを思い出して柳が笑う。だが恵已は、後に続く言葉を理解して、身体が強張った。

固い表情のままの恵已を見て、柳も苦笑を残してから笑いを収める。

「うん。その護り手が、今はいないと言うことも聞いている。そこで問いたいのだが、恵已。その者がいないままで、君は責務を果たせるのかな？」

胸が軋んだ。

預かったままの若月。

唇を引き結ぶ。

「はい」

自分でも驚くほど、はつきりと答えることができた。

柳が少しだけ眉を上げて、眼で理由を問うてくる。恵已はひとつ

頷いて、笑顔を返した。

「わたしには、彼の他にも、頼りになる友人がいますから」

声を掛け、助けを乞えば応じてくれる妖には心当たりがある。妖でなくても、集落には腕自慢の男だっている。事実、集落を警邏しているのはそうしたひと達なのだ。松風坊の結界は、人には作用するものの、野の獣達には意味がないから。

どこか安堵したように柳は「そうか」と頷き、表情を和らげた。

「ならば任せたいのだが、ただ恵已、約束してくれ。君に大きな危険がある場合は、『責務だから』などと思わずに、逃げると。これは責務とは名ばかりの私からのわがままであり、そして君も私の大切な臣民のひとりであることを、忘れるな」

「判り、ました」

ざわざわとまた互いの横や背後で付き人達が囁いているのを知りつつも、恵已は再び頭を垂れた。

なにもかもが、型破りだった。主上とは古来よりの神の系譜であるという。そんな血筋の方が、恵已のようなひと目を避けて生きる者に頭を下げ、責務をわがままだと言い切り、だからそれよりも命を大切にすることを約束しろと言うのだ。周囲の大人が慌てる気持ちも判る。

人間的と言ってしまうえばそこまでだが、そうであるが故に革新的だ。

恵已と視線が合うと、改めて柳はにこりと微笑んだ。

「私は、私が私として存在することで、なにがしかの命が失われることは良しとしない。したくない。だから恵已、君の命も失わないという前提で、頼む。

都でひとの乱心を扇動する妖がいるようだ。これを、なんとかして無力化して欲しい」

真摯な双眸が、恵已を見据える。

その眼に少し秋雨の姿が重なって、恵已は可能な限りの誠実な想いで頷いた。

：伍章

夜も闇が濃くなつてから、都へ着いた。

足元で風が巻いて、耳許でもひょう、と音を立てる。

恵已は胸に抱いて握り締めた若月を見下ろして、ひとつ頷いてみせた。

だいぶ増えた袴の裾の、小花の刺繍。さすがにその数が十を超えた頃、きづにバレてしまったが、怒られはしなかった。もうどうせ、やってしまったことだ。

秋雨とこの袴の話をしたのが、つい最近のように思う。

訴えかけるような視線を感じた気がして、恵已は慌てて顔を引き締めた。

「あ、うん、そうだよ。今はそんなこと考えてる場合じゃないよね」

歩き出す。静けさの中に、下駄の音が妙に響いた。

秋雨がいなくても、この妖の気配は判る。隠すこともない、荒々しく力強い、意思。そしてそれはどこか楽しげで、弾んでいる。

面白がつて、いる。

とん、と辿り着いた橋の真ん中で、若月を下ろして柄尻に両手を置いた。気を研ぎ澄ます。

「……出て来て」

けけ、と笑う声がした。

血の臭気がきつくなつて、恵已は眉をひそめる。背後で、かんと欄干を踏む音がした。

振り向いた恵已に、相手の昏い緑の目が細められる。

「どーも。こないだは俺様の眷属にヨロシクしてくれたみたいだなあ？」

唇の端をつり上げて、山伏の恰好をした妖は傲然と笑った。黒々とした髪は豊かで、高い位置でひとつに結われている。見た目の歳

の頃は、二十代後半といったところか。

そして背中には大きな黒い翼。 鴉天狗。

恵巳はできるだけ毅然とした態度で、その妖と対峙した。

欄干の上で、ひとつ歯の下駄だというのに器用な動作で、鴉天狗はしゃがみ込んだ。

「よお、こないだ俺様の眷属にふざけた術まとわせてくれた妖はいねーのかよ？」

きよろきよろと視線をさまよわせるその姿を、恵巳は睨めつける。けれどそんな視線など気にかける様子もなく、つまらなそうに鴉天狗は呟いた。

「……ひとりか、小童^{こわっば}。俺様もナメられたもんだな」

恵巳は唇を引き結ぶ。姿が見えなくとも、あの優しい橋の憑喪神が不安げな表情をしているのが感じられる。

錫杖^{しゃくじょう}をじゃんと鳴らして振り抜き、鴉天狗は不快さを隠そうともせずに立ち上がった。

「あの小賢しい術使いならまだしも、小童ひとりでなにができる。その刀も抱いてせいぜいだろうが」

「……」

「それじゃ足んねえ。足んねえよ。そんな力じゃ何の足しにもなりやしねえ」

ひとしきりひとりで喚くと、鴉天狗はじゃら、と錫杖を恵巳の喉元に突き付けた。

「それともなにか？ 実はめえひとりでも俺様をぶっ倒せるくらいの器量と技量があんのか？ 小童」

昏い緑の瞳の中に、狂気の色が宿る。

恵巳はごくりと喉を鳴らした。

「小童じゃない。わたしには、恵巳って名前があるの」

「はン？」

「わたしは、恵巳。あなたのお名前は？」

主上の、柳の言葉を、閃くように思い出す。

それぞれが、唯一の存在であることを。

鴉天狗は顎を上げ、眇すがめた目で恵已を見下ろした。

「……七芝ななしは」

思ったよりも素直に応じてくれたことが嬉しくて、恵已は「ありがとう」破顔する。

けれど鴉天狗七芝は、渋い顔のまま錫杖を引いて肩に乗せた。じやん、と重い音。

「てめえの問いには答えた。俺の問いにも応えてもらおうか」
うん、と恵已は頷く。

「わたし、多分あなたと正面きつて闘えば、簡単に負けると思う。ホントに、赤子の手を捻る感じで。でも闘わずに話したら、もしかしたら、勝てるかもしれないよ」

「はッ」

七芝が一笑に付す。

「それじゃ足んねえつつつてんだろーが。もっと挑めよ、振りかぜせよ。もっともっと、荒らし尽くせなきゃ意味ねえんだよ」

「……あなたの、目的は何なの？」

滔たうとう々と語る七芝に、恵已は訊いた。

にや、と七芝の表情が変わる。目の奥の光が燃え上がるように強くなる。きりりと錫杖を握り締めて、七芝は実に楽しそうに言った。

「目的？ 目的なんかねえよ」

その眼の色に、ぞっとする。

秋雨や、これまで交流を持ってきた妖達とは明らかに違う、人とは異なる律に生きる、本性の剥き出しになったそれ。

邪気のない、悪意。

「人が争い世が乱れ、血にまみれたあの時代が、また来たら面白いじゃねーか」

「ッ！」

天狗は争いを好むという。時代によっては時の権力者やその敵役かたきに肩を入れ、世の混乱を思いのままにしてきたと、まことしやかに

語られるほどだ。

かつての乱世の、数え切れないひとびとの犠牲の上に成り立った、今の数百年の平和だ。それがまた、覆されようとしている。再び多くの犠牲が、生み出されようとしている。

そしてその犠牲のひとりに、殺された主上がいる。

みしみしと音がしそくに、目の奥が軋んだ。血が煮える。

「そんなこと　させない！」

「ツヘーえ！　てめえになにがでkindだよ、小童！」

恵巳の言葉に七芝は口を三日月型にひん曲げて、じゃん、と錫杖を振るった。腕に重い打撃が。若月の黒漆の鞘に、傷が走る。

「つくう！」

指が痺れる。

七芝の黒い髪が揺れる。

錫杖が星の光を鈍く弾く。

若月を抜こうにも、鞘を狙われてうまくいかない。焦りと、じわじわ染み込むようにして恐怖が襲ってくる。

「おら、その刀抜いて俺様を斬ってみせろよ！　力を振りかざせ！　破壊を望め！」

振り回される錫杖が、空を切るたびに身がすくむ。気持ちばかりが焦る。

なんとかしないと、護ってくれるひとはいないのだ。なんとか、怨みだけを。

ひゅ、と風を切る音がする。鈍く光る錫杖が眼前に迫り、恵巳は咄嗟に目を瞑った。きつく若月を握り締める。

嘘つき……！

護るって、言った癖に！

目尻に涙が浮いて、そして痛みが　、　いつまで経っても、訪れなかった。

代わりに、いくつかの下駄が橋板を踏み鳴らす音が交錯する。時折混ざる、鳥のような羽音。ギィィ、と高い耳を突く声が飛び交う。

「……？」

恐る恐る臉を開くと、そこには黒い翼を背負ったふたりのひと影が対峙していた。白い蓬髪が風に躍る。

七芝が唇をひん曲げる。面白くないと、顔に大きく書いてある。

「ンだよ、てめえ。同じ鴉天狗の癖して、なに邪魔してくれてんだ」

「はッ、僕の髪を見ても判らないなんて、よほどの幼子おさなこだな。名乗りを上げれば理解できるかな？」

ばさりと翼が開く。恵已にはその表情は窺えないが、その声、その口調。間違うはずがない。

「あんたと同じだなんて恥ずかしい限りだが、仕方ない。僕は乙竹。大天狗松風坊が配下の、白い異端の鴉天狗だ」

「う　嘘つけ、松風坊の眷属は今、都に入れないはずだろ！」

「確かに。一応禁じられているから、しばらくは里に入れてもらえないかもしれないけど。まあそれでも、どうしても放っておけなかったのさ、この莫迦娘を」

乙竹は振り向かない。それでも恵已には、彼がとんでもなく怒っているのがひしひしと伝わった。

恐くなって、若月を抱き締め、身を縮める。

七芝はちらりと恵已を見て、聞こえよがしの舌打ちをした。その昏い緑の目が、燃える。錫杖をじんと鳴らして肩に担ぎ、欄干に跳び乗って距離を取る。

「音に聞こえた白鴉と一戦交えるのも楽しそうだけだな。かの松風坊に喧嘩売るつもりはねえし、俺様自身で闘うことが望みでもねえ。ここは退かせてもらうぜ」

「残念だがここで退くとあんた、二度とこの都は荒らせないぞ。さつき言った通り、僕はしばらく里に帰れないからな。ここにいないかない」

凜と言い放った乙竹に、だが七芝はにたりと笑って見せた。

「ンなこたアねーよ。整えるより乱す方が、万倍も楽なんだ。同じ天狗だ、てめえも判んだろ？」

「……」

乙竹の沈黙に満足げに顎を上げ、七芝は黒い翼を広げた。何度か羽ばたくと、ふわりと下駄が欄干から離れる。そして空へ舞い上がったかと思うと、すぐに夜の闇に溶けて、見えなくなった。

だいぶ長い間、乙竹は気を張り詰めたまま七芝の消えた方角の空を睨んでいた。

恵巳は若月を改めて抱きかかえて、俯く。

恐かった。

今更になって、そう思う。

しばらくしてから、乙竹が振り向いた。恵巳はまたぎゅっと身体を縮める。なにを言われるのかは、簡単に想像がついた。

「……何で、こんな無茶をした？」

聞いたこともないような、低い声音が告げる。

恵巳は顔を上げない。

「恵巳」

上げない。

「話しかけてるんだから、僕の顔を見なさい」

聞いたことのある言葉。だが、上げない。上げられない。

何故なら、恵巳の瞳からは、大粒の涙がばたばたとこぼれ落ちていたからだ。

秋雨がいなくなってから、初めて流す涙。

そうして思うのは、想うのは、ただひとつ。

違う。

「……恵巳」

気遣わしげに呼ぶ声が、肩に触れる手が、違うのだ。

「ひとりで行くなんて、なにを考えてるんだ。あんたは自分の能力^{ちから}をよく把握してるはずだろ。そんなに僕が、僕らが、頼りなかったのか？」

纏^{まと}う空気も、恵巳が抱く安心感も、なにもかもが、違うのだ。

「違うのっ……！」

しゃくり上げる隙間から、恵巳は夢中で叫んだ。髪を振り乱して、首を振る。

乙竹も朔早も村の男衆も、頼りにしていないわけじゃない。信じていない、わけじゃない。

でも、どうしても、違うのだ。

圧倒的に、どうしようもなく、違うのだ。

「わたしの護り手はッ、あきなの！ あきだけなの！」

莫迦げた理由だと、自分でも思う。

それでも、どうしても、譲れなかった。他の誰かに、声を掛けることができなかった。

後悔した。

傍にいて欲しいと言う前に、秋雨が姿を消してしまって、恵巳は涙も出ないほどの衝撃と共に、後悔したのだ。

そして思った。

言っていれば、秋雨はいなくならなかったのだろうか。傍にいてくれたのだろうか。

もしそうだとしたら、それで秋雨は、良かったのだろうか。

人の想いを押し付けて、秋雨は妖になったのだという。その秋雨に、更に恵巳の想いを押し付けていいのかと。

（お主達と離れたいと思ったことは、一度もない）

かつてそう言っていたのは、本当だろうか。性を取り戻してなお、そう思えただろうか。

（あき。一緒にいてね。あきがイヤになるまで）

（では、俺が嫌にならないようなひとになってくれ）

秋雨は、恵巳の傍にいたことが、嫌になってしまったのか。

混乱した頭に、取り留めのない思考が浮かんでは消える。

なにもかもが遅い。傍にいる間に言っていれば、訊いていれば、判ったこともあっただろうに。

それができなかったからこそ、秋雨の想いを知る前に、秋雨以外の者を護り手とすることはできなかった。秋雨が護ると言ったから、恵已はどれほど危険だと判っていても、秋雨以外に頼る気が起きなかった。

しゃくり上げる恵已の肩に置かれた乙竹の手が動いて、頭を撫でた。

それきりで、お互いにそれ以上の言葉はない。

どれくらいそうしていただろう。ようやく涙も落ち着いて、恵已はやっと顔を上げた。

乙竹の紅い目が、迷子になった子供みたいな表情いろを帯びて恵已を窺う。

「……ごめんなさい……」

その様子に、ようやく恵已にも周りを見る余裕ができた。

迷惑を掛けた。心配を、掛けた。それを申し訳なく思う。

そしてこんな状況に陥ってなお、恵已の秋雨を待つ気持ちが変わらないことに。

それだけは、なにがあっても譲れない。

譲ってしまったら、多分恵已はきつと恵已ではなくなってしまうような、そんな気さえする。

くしゃりと、ずっと恵已の頭に乗っていた乙竹の手が動いた。泣きそうな顔だ、と思う。もしかしたら、全て見透かされているのかもしれない。

「……悔しいな」

聞き覚えのある台詞。

「もう少し、たった十数年早ければ良かったのにな。人にとってその月日は大きいか」

「乙竹さん……」

掛けられるような言葉を、恵已は持っていなかった。何故こんな自分を、そんなに想ってくれるのが不思議で、申し訳なくて、そしてどうしようもなく、嬉しかった。

「乙竹さん、わたし」

「ッ！」

白い蓬髪を翻し、乙竹が振り向く。暗く闇のわだかまる都の通りを、ゆらりと歩いてくる大きなものが見えた。

妖。

四つ足の、恵已が見上げるほど大きなそれ。緩慢な足取りで近づくその妖は、巨大な黒い犬の姿をしていた。鋭い牙の覗く口許からは、低い唸りが聞こえる。

灰色の目が恵已を捉えた。

「恵已、下がれ。見たことのない妖だ、どんなことをしてくるか判らない」

乙竹が低く言って、けれど恵已は一步、前へ踏み出した。

黒い毛並み。

月明かりの下でそれが、濃い灰色であることが明らかになる。青みさえ帯びた、それ。

「……あき……？」

「なっ？」

「あき……秋雨、だよね……？」

消え入りそうな呟きに応えるように、妖は月を仰いで咆えた。

なにかが壊れる、音がした。

・陸章

「嘘だろ……？」

隣で呟く声がある。

恵巳は巨狗を見上げたまま、言葉が出ない。

青みがかった濃灰の毛並み。灰色の双眸。姿は掛け離れて違っているが、この妖が秋雨だと、恵巳は確信していた。

だが、彼の眼にはいつものような、恵巳を優しく見守るような、慈しむような表情^{いろ}は、ない。

そこにあるのは叩きつけられるような剥き出しの敵意と、そして底の見えない虚無だ。

圧倒されそうなそれらに、恵巳は唇を引き結んで耐えた。

「犬神が、こんな姿になることは、ないんですか？」

秋雨から視線を外さないまま問うと、答えにためらうだけの間を空けて、応えが返る。

「……犬神という妖自体が、少ないんだ。奴らの情報が、まず、ない。それほど奴らの存在は……禁忌だから」

人の意志で造られた妖。

それは、同族ですら理解されない、禁忌の存在。

「そう、ですか」

だがそれは、彼が望んだことではないのだ。彼の存在自体に、なにひとつとして罪はない。

「ほんとにコイツ、あの莫迦なのか？ 恵巳」

「たぶん」

「曖昧だな……」

「でもわたし、間違わないと、思いますよ」

自然と相手は絞られてくる。これだけの殺気を、恵巳に向けて放つ妖と言えば。

巨大な犬が、ぐると低く喉を鳴らす。

恵巳には、彼を渦巻く暗澹あんたんとした混乱の気が感じられた。恵巳を殺して、積年の怨みを彼に呪いをかけた血族にぶつきたい気持ちと、優しい彼の気持ちとが葛藤しているのだろう。

こんなときまで、あきは優しい……。

妖に転化してしまうほどの強い怨みを、魂の奥に閉じ込めて、しまい込んで。紅葉というひとの傍にいたとき彼は、どんな想いだっただろう。

そして紅葉は、どんな想いだっただろう。

「ったく、あんたは時々ほんと酷いよね……」

嘆息と共に呟くのが聞こえて、恵巳はやつと「えっ？」振り返る。乙竹はうなじに手をやって、片目を細めた。

「どんな姿になっても、あの莫迦だけは判るって？ はいはい」

「えっ？ えっ？ あ、ちが……ッ」

そんなつもりはなかった。犬の妖と乙竹にきよるきよると視線をさまよわせ、言い訳しようか悩んだ揚句、結局気まずくなって、若月を抱え直す。

なにを言っても、乙竹を本当に慰めることはできないだろう。恵

巳は、秋雨を選んだのだから。

その沈黙に、乙竹が笑ったのが判った。

「そついう、賢明なあんたが好きだよ」

「っ、」

「さて恵巳。あの妖があゝの莫迦なら、あんたの力が必要になる」

乙竹の紅い目がまっすぐに恵巳を見据える。先の言葉で恵巳の頬は赤らんでいたが、その視線の強さに俯くこともできなかった。

うなじに手をやったまま、気怠げに乙竹が犬の妖を睨む。犬の妖 秋雨は、身を低くして土を掻き、再び低く唸った。

「はい」

「いい返事だ。やることはただひとつ、簡単なことだ。あんたがあいつをその刀で斬る、それだけだが、……あんたの腕じゃ、なかなかキツイかもな」

「……斬る？」

あつさりと、淡々と告げられた言葉を飲み込むのに、少し時間が掛かった。現実味が欠如している。

わたしが、あきを、斬る？

そんな、莫迦な。

空を震わせる声を上げて、秋雨がもう一度咆る。それを見遣つて、乙竹が立てた指を二本、唇に当てた。

「なんだ、いっちょ前に『縄張り』に手を出すなつか？ 目を離したのはお前だろ？」

顎を上げて挑発する乙竹の身体に、気が満ちるのが判る。白い光のような、眩しい気だ。

「恵已」呆けていた恵已に振り向くことなく、指先を唇に当てたまま乙竹が低く言う。

「僕があいつを止める。あんたの能力で、あの莫迦の怨みだけを斬つてやれ」

「！」

「できるはずだ。あんたがやれないなら、残念だが僕はあいつよりあんたを優先する。あいつを 滅すよ」

松風坊の信託を受けた者を、僕の目の前で死なせるわけにはいかないからね。そう続けて、乙竹は秋雨を見据える。

今度は、怯まない。

はつきりと大きく、恵已は頷く。

「やります」

月明かりの下、青みを帯びた灰色の獣が、後ろ脚で強く地を蹴つた。夜が質量を持って降りかかってくるような、圧倒的な恐怖が襲う。

鞘を振り払うようにして若月を抜いて、無我夢中で両手に構えた。型もなにもない、見よう見真似の中段。仕方がない。神に仕える身として、恵已に殺生は許されていない。刀など初めて抜くし、だから切っ先どころか全体がぶるぶる震えた。

振り下ろされる、白銀に閃いた爪。こんな重いものを持ったまま、逃げることもできない。だから信じる。

真っ直ぐに灰色の双眸を見上げ、恵已はどこか冷静な眼で考えた。あきつて、本当にすごかったんだ。

こんな重いものを軽々と振り回して、あれほど身軽に飛び回って。今更の、そして場違いの感傷に耽る恵已の背後から白い光が走り、秋雨の爪の先、目の前、耳許で無数に爆ぜた。数え切れない光が続く。白い髪をなびかせて、乙竹が口角を上げた。

「そんな単純な攻撃で僕に勝てるっても？」

「アアアアア！」

長い尾を逆立てて、巨狗が牙を剥く。長い咆哮が轟き、ぴん、と空气中に光る青色の直線が引かれて、消えた。

見知った呪術だ。防護陣。

かつて恵已を護ったそれが、今は恵已を阻む。陣と同時に、揺るぎない現実を突き付けられた気がした。

無意識に半歩退いた恵已の肩に、ほんの僅かだけ乙竹の手が触れて、離れた。質量を感じさせない足取りで間合いを詰めると、恵已にはなにも見えない場所にある平面に、両手をつく。

「この、莫迦がっ！ その技は僕には効かないと、」

乙竹の掌が白く光って、

「知ったはずだ！」

爆ぜた。

どん、と鼓膜どころか全身を震わせる音がして、恵已は堪らず若月を取り落とした。がしゃんと鳴るはずの音は、獣の咆哮に掻き消される。

「アアアアアア！」

前脚を鼻面の上に乗せ、それから藻掻くようにして頭を振り乱した。その暴れ回る巨狗に飛び乗り、乙竹が手を触れる。

「呪術に秀でてるのは、お前だけじゃない」

「アアアアアア！」

「多少の鬱憤^{うつぶん}は、晴らさせてもらってもいいだろ？」

がく、と秋雨の脚が折れたかと思うと、その大きな灰色の身体が崩れ落ちた。びくびくとのたうつその動きに、恵巳は見覚えがあった。

七芝の遣いである鴉に、外ならぬ秋雨が使った、あの術だ。

横たわった状態で、灰色の目が恵巳を強く睨む。剥かれた牙の大きさに、ぞつとする。

犬の背の上から、乙竹が叫んだ。

「恵巳！」

「は はい……！」

慌てて落ちた刀を拾い上げて、ふと、思う。

後悔、したのだ。

想いを伝えられないというのは、とても、とても、つらかった。

それは、どうしても伝わり切らないときには、怨みを斬ってきた。伝わらない想いの方が、きつとこの世には圧倒的に多いに違いない。けれど、今の秋雨なら、まだその想いを伝えることができるかもしれない。それが失敗に終わったとしても、乙竹がいる。強行手段は、まだもう少し後でもきつと、大丈夫だ。

「乙竹さん！」

「あ？ どうした、手でも痺れたか？」

このひとも、こんなに優しい。その優しさに、厚意に、甘え過ぎている気がする。

でも。

「ごめんなさい！ 今度、おいしいものをたくさん、振る舞います！」

「なッ？ おい、恵巳？！」

若月をざくりと地面に突き立てて、恵巳は秋雨の喉元に駆け寄り、届かないそこに腕を回した。そうすることで、輪を作る。それは、

輪廻の象徴。

思いがけず柔らかな毛並みが頬に触れる。秋雨が唸り呻くと、抱き着いたそこが震えた。

気を集中する。

これも、いや、これこそが、恵巳の、巫女姫の、そして紅葉の能力^{から}だ。

「恵巳！ 僕の術だつていつまで保つか判らないんだぞ！」

乙竹の声。彼の術が解けたなら、秋雨の鋭い牙はあっさりと恵巳の身体を噛み千切るだろう。そうは思うが、現実味がまるでない。

ただ今判るのは、この肌に触れる温かさだけだ。

「そのときは 乙竹さん、お願いします」

これで秋雨を蝕む狂気から取り戻すことができなければ、そして恵巳が屠^{ほふ}られてしまえば、後は乙竹に任せるよりない。元より自分は、涙が出るほど無力なのだ。

灰色の毛並みに頬を擦り寄せて、囁く。

「いいんだよ、あき」

獣の低い呻き声。

恵巳は口許に笑みすら浮かべた。

嘘でも救うためでも、秋雨に刃を向けるのが嫌だった。怖かった。だから、こうするよりない。

そつと瞼を下ろす。意識が秋雨と自分だけに集中する。

（イヤだったら、言つてね）

「もう、我慢しなくて……いいんだよ」

覚悟は、決めた。

まず流れ込んできたのは、強い戸惑い。

恵巳の行動に秋雨が、なによりも誰よりも困惑しているのがひしひしと伝わってくる。莫迦なことをと、かつての秋雨ならば一喝でもしたかもしれない。

なにをする。なにを。なにを。

強い戸惑いの中で、秋雨が咆る。

放せ、放せ、放せ。

秋雨の気が、想いの流れを止めようとする。恵巳はそこに、無理矢理手を伸ばした。

ごめんね、あき。

想いつていうのは、強いものなの。簡単に身を毒してしまえるくらい。

だから、わたしに向けた想いなら、受け止めるから。

あなたがなにをしたいのか、わたしに教えて。

やめろ。

やめろ。

……ごめんね、秋雨……。

呻きに混ざって、不意に聞こえた囁き。びくりと、明らかに秋雨の身体が跳ねた。

否応なしに流れ込む、女性の横顔。儚げな様子は母・八千代に似ている気もするが、それよりも恵巳は水面を覗き込んだような、落ち着かない感覚を覚えた。

きつと彼女が、紅葉だ。

(似ている)

昔秋雨が呟いた言葉。あれは、紅葉に似ていると言いたかったのだろう。

ずきりと胸が痛んだ。

秋雨の中に残る紅葉は、涙を流していた。

ごめんね……。

赦さない。

秋雨が咆える。

赦さない、赦さない。

咆える。咆える。咆える。そのどこか悲痛な声に、恵巳はじっと耳を傾けた。

喉が枯れるのではないかと思うほどに秋雨は咆え続け、そのびりびりと重い圧に恵已は耐え抜く。全身にぶつかっては碎けるような、頑なで意固地な想いだ。

この牙は、貴様の為に。

貴様の息の根を、止める為に。

「！」

初めて剥き出しの言葉を叩きつけられて、思わず恵已は怯む^{ひる}。緩みそうになる腕を、懸命に押し止めた。

今の秋雨は、記憶の中の紅葉と、恵已の区別が曖昧になっている。そしてその想いを共有している恵已自身すら、過去の巫女姫と自分の境があやふやになっている。

彼女に向けられた言葉は、そのまま恵已の胸をえぐった。

「あき……。紅葉、さんのことを、やっぱり怨んでたの……？」
教えて。

どうしたらわたしは、あなたを救える？
ぐるる、と低く獣の声。

怨んでいる。

こんな姿にした。

裏切った。

だから怨んでいる。

「そっか……」

息が苦しい。だが、ここで引き下がっては秋雨は救われないままだ。

事実を。そのためには、もう少し、秋雨の想いを見せてもらう必要がある。

「もう少し、紅葉さんのことを教えて？」

だから、赦さない。

秋雨が咆えて、空気が震えた。

恵已の中に流れ込む紅葉の横顔が、より鮮明になる。その、涙に濡れた頬。少し乱れた髪。恵已の中で、なにかが噛み合った。

「あき。紅葉さんは、」

赦さない。

赦さない。

「病氣、で」

先に死ぬなんて、赦さない。

秋雨の、悲鳴のような慟哭どうくが響く。

俺はお前を怨んでいるから、勝手に死ぬなんて赦さない。

死ぬな。死ぬな。

その声に、我知らず恵已の目から涙が流れ落ちていた。視界が潤んで、なにも考えられなくなる。

切ない想いだ。

愚直なまでに一途な、願い。

……嫌だ……！

おそらく秋雨は、彼女を連れ去る死の理不尽さに、必死に抗っていたのだ。紅葉を怨んでいる。だから彼女を殺すことを目的にしている。だから、彼女を殺すのは自分である。彼女は、自分が殺すまで死なないのだと。

それが、叶わぬことと知りながら。

そしてあまりの苦痛にか、長い年月の間にか、その偽りの憎しみの想いが、本物の想いとしてすり替わってしまったのか。いつかの、あの悲しい橋姫のように。

恵已は唇を引き結び、秋雨に事実を伝えるべく、ゆっくりと言葉を選んだ。

「あき。秋雨。本当はあなた……紅葉さんを、怨んでなんか、ないんだ」

・漆章

なにかが壊れる、音がした。

目の前の、強い眼差しの小さな人は、奇妙な力でずけずけと魂に触れてくる。閉じておいた扉を簡単に開けて、中にうずくまっていた臆病な己を、引きずり出そうとする。

やめろ。

何度も叫んだ。

ずっと怨んでいた。抑え込んでいたのに、暴いた上にその気持ちすら偽りなのだと事実を突き付けられて、混乱した。困惑した。

違う、違う、違う。

怨んでいる。ずっと、怨んでいるのだ。

だからあいつは、死んではいけないかった。

……死んで欲しく、なかった……。

思考がまとまらない。ぐちゃぐちゃになって判らなくなる。怨んでなかったのならば、何故。

何故俺は、妖なのだ。

犬神は禁忌の靈毒こどく。人に埋められ、飢えたまま殺されて人を憎み、転化したはずだ。そう、裏切った。だから怨んでいるはずだ。

「嘘！ 怨んでるひとに死んで欲しくないなんて、思わないはずだよ。現にあなたはさっきまで、……わたしを、殺そうとしてた」

何故か悔しそうに、小さな人が呻く。

では、何故ここにいるのだ。何故、死ねなかったのだ。その苦悶に、小さな人が首に抱き着く腕に力を籠めて応えた。その手は僅かに震えている。

「秋雨が、今のあなたが、生まれたときのことを思い出して。あなたは大切な思い出に蓋をしてるだけ。しまい込んでしまってるだけ。それを思い出してしまったら、つらいから……」

「……」

「でも大切な思い出を、知らないフリしてる方が、きつとつらい…
あきも、紅葉さんも」

小さな人の声がかすれている　泣いているのか？

何故、お前が泣く？

「だから、もう少し、あきの想いをわたしに伝えて。わたしは紅葉さんのこと、なにも知らない。あきの記憶から考えるしかないけど、その思い出があきにとっての事実だから、そこからわたしも、考える。

このままじゃ、あきも紅葉さんも、可哀相だから。つらいままだから」

判らないことだらけなのに、引き込まれる。否応なしに、脳裏に『彼女』の声が去来する。

（ごめんね、秋雨…）

日々痩せていく紅葉に添うのはつらかった。怨みを果たせないまま、命を終えようとする紅葉が、憎かった。

逝くな。置いて逝くな。

お前が逝ったら。

俺は、何のために。

視界が開けた。

幼い少女が、長く黒い髪を翻して、踊るようにして笑う。

「あき」

紅葉。

ただの獣の分際で、彼女の家を護る番犬の存在で、『彼』は彼女に恋をした。

「紅葉」

背後から彼女の母が歩いてくる。その表情は険しくて、紅葉は驚いたように駆け寄る。平素の母は、もっと穏やかなのだろう。

「どうしたの、母様」

「夕刻、秋雨を連れて、堂の裏までおいで」

「あきを？」

紅葉が彼を見る。彼も彼女の困惑を見て取って、首を傾げて見せた。

母の苦々しいような表情は変わらない。判ったね、と言い置くと、さくさくと落ち葉の掃^{はら}われた小道を去って行った。その母の後ろ姿を見送って、紅葉は彼の頭を撫でる。

「お堂の裏だつて。なんだろうね、あき？」

ぱたぱたと彼は尾を振る。彼にとって、彼女の母など興味の対象ではなかった。彼女の母は、実の子である紅葉のことを疎んじているくらいすらあったのだから。

（あの子は、近過ぎる）

いつか、紅葉の母が言っていた。

なにに近いのか、彼はそのときには判らなかった。後になって考えてみれば、紅葉は妖と近過ぎたのだらう。彼女の能力はどうやら、^{すた}廃れかけていた彼女の一族への、信仰にも似た信用を取り戻してしまうほどに、強かったのだ。

八咫鳥を呼び寄せるほどの能力。

彼女は　紅葉は、連綿と続く今の一族の、二度目の始祖だった。だが、彼にはそんなことは関係ない。彼にとって紅葉は愛しい幼い子であり、彼にとつての唯一の主だった。だから、彼女を害する者は、彼にとつてすべて悪だったのだ。

そうしてその日暮れ、紅葉と引き離されて、集落の男に捕まって、彼は首までを土に埋められた。禁忌の呪法。そんなことは彼には判らない。ただ、生理的な苦痛には勝てず、目の前に置かれた食事にあと少しで牙が届かないことと、土にじわじわと締め付けられて息が苦しいことが耐え難かった。

なによりも、紅葉と会えないこと、彼女の泣き声を遠くに聞^{さいな}くし
かできないことが、彼を苛んだ。

「やめて、やめさせて母様！ あきがなにをしたって言うの！」

「我慢してちょうだい、紅葉。あのこの先の、秋雨の想いがわたしの思うほどに強いなら、あなたにとってもっといいことが起こるから」

「いいことなんて要らない！ あきが死んじゃう方がやだ！ お願
い母様！」

「秋雨の想い次第では、秋雨は死なないのよ」

「そんなの嘘！」

ああ、

きつと、紅葉の母には、彼の想いは知られていた。紅葉ほどの能力はないとは言えど、彼女も想いを司る、かの一族の巫女なのだ。だから、その想いを利用された。

親心、だったのかもしれない。

能力が強過ぎる紅葉に、より強い護り手をと望んだ、母の愛だったのかもしれない。

けれど、やはり彼にはそんなこと、微塵も関係なかった。ただ彼にとつて、彼女を害する者はすべて悪なのだ。

そしてこのときこの場合、彼女を害しているのは 泣かせているのは 、紛れもなく、彼自身だった。

紅葉。

その名を呼ぶことができたなら、その想いを伝えることができたなら、どれほど救われただろう。幼い彼女にとつて、彼はただ空腹に苦しんでいる獣にしか見えないに違いなかった。

泣くな。

喉が哽れんばかりに叫んだ。胸が裂けんばかりに嘆いた。

俺のことで、泣かないでくれ。

嬉しかったけれど。例え想いの方向が違っていたとしても、紅葉が彼を思ってくれているのが、彼にはなにより嬉しかったけれど。

俺のような者のためになど、泣かなくていい。

彼のそんな切ない想いは、紅葉には届かなかった。

飢餓と圧迫に朦朧とする意識の中で、彼はまだ紅葉の声ばかりを追う。まだ泣いている、優しい子。泣かなくていいと、ひと言伝えるだけでいいのに。

この想いなんて、言えなくてもいいのに。
そして彼の想いは、遂に『そこ』へ至る。

泣くな。

泣かないで。

お前が泣くなら、俺はまだ、傍に　。

好きだよ。

「……恵己」

異形の姿と成り果てた己の首に、しがみつく幼い子。考えるよりも先に、その名が舌先から転がり落ちた。

瞬きすると、目の縁から大きな水滴が零れた。

今までの感覚は何だったのだろう。己の記憶に滑り込む、他者の視線。これが先読みの巫女 능력なのか。

『彼女』なら己の性を暴けるかもしれないと、何年も何十年も思っ
ては、実行しなかった理由が、今なら判る。

己は知っていたのだ。全てを思い出してしまうことを。全てを知
っていることを、知っていたのだ。何故なら、己の記憶を封じたの
は、他ならぬ己だったのだから。

「恵己」

それ以上、掛ける言葉が見付からない。

小さな手で、必死にしがみついている、幼い子。秋雨が転化した
ときの紅葉と、同じくらいだろう。

その手を失いたくなくて、怨みの衝動に夢中で抗って逃げたのに、
結局怨みに吞まれて彼女の元へ赴いた　恵己を、殺そうと、した。

己の未熟な感情に整頓が付けられなかった、ただそれだけのために。
抜われても、仕方あるまいな……。

確かな諦観と共に、そう思う。血筋に憑く犬神は、きっと血筋から切り離された途端に存在意義を失い、そして消えるのだらう。その血筋のために生み出された妖だ。それは想像に難くない。

「……あき」

「！」

恵巳の囁くような声に、ぴくりと耳をそばだてる。涙に滲んで引き攣った声だ。胸が苦しくなる。

護るべき対象を、いつでも一番苦しめているのは、己ではないのか。

「……うむ」

「まだ、紅葉さんを想う？」

「は？」

思いもかけない台詞に、間抜けな声が出た。

けれど恵巳の声音は真剣そのもので、秋雨は戸惑いながらもその意味を考えた。秋雨の沈黙の間に、恵巳は続きを紡ぐ。静かで諭すように、だが独り言でもあるような。

「あきがまだ紅葉さんを想うなら、あなたにはわたしを、……殺す権利が、あると思う。わたしがここに今いることは、紅葉さんの身体に無理を強いたって、ことだから。」

あのひとを死へ追いやったのは、わたし達の血だと、言えなくはないと思う」

「莫迦な！」

咄嗟に反駁を返した秋雨の脳裏に、八千代の白い手が浮かぶ。彼女も、子を得るために、無理を。

ぐつ、と喉が締め付けられたように息が苦しくなった。それはもちろん、恵巳の手によるものではなくて。

俺、は。

こんな幼い子に、なにを言わせているのだらう。殺す権利？ そ

んなもの、どこを探したとしても、あるわけがない。

紅葉は。

「紅葉のことは……遠い記憶で、大切な、思い出だ」

その想いに、偽りはない。

真実というものが、これほどまでに痛く、重いものだなんて、知らなかった。知ることから逃げていた。

恵巳の手が、ぎゅうと秋雨の毛並みを掴む。首が左右に振られて、漆黒の髪が揺れた。嘘だと言いたいのだろう。

「俺は、お主に嘘はつかぬ。だから恵巳。お主こそ、俺を、見限るべきだ」

「どうして！」

真実は重く、胸に魂に押し掛かってくる。けれど、それに目を背け、逃げ続けて。それでいいと思えることもあるだろう。しかし今は、紅葉のことを思い出せたことが、つらい中で、嬉しい。

情けない己に真実を与えてくれた恵巳は聡く、優しい子だ。そして秋雨は、逃げ続けた所為で、そんな幼子の命を。

言いたくない。このまま許されてしまいたい。けれどそれは、それだけは、できなかった。顎を引き、できる限りの平静を装って、告げる。

「お主を害したくなくて逃げたのに、戻ってきた」

「約束したからでしょ」

返る即答。示される彼女からの信頼が痛い。

「違う。お主を、……殺そうと、した」

「殺さなかった」

「だが、実際に、」

「わたしは生きてる！」

少女が叫んだ。

首筋から離れ、秋雨の視界の中心に立つ。紫蘇色の袴の、裾模様。少し増えたか。髪は伸びて、表情は少し大人びたか。

漆黒の目には、大粒の涙。

「巫女姫は、事実しか言わない……っ」

「恵已、」

「わたしは、あきと一緒に居たい。だからあきの、今の気持ちを教えて。その事実を、わたしは受け入れる」

言葉が。

なかった。

嘘はつかないと豪語したばかりで、この想いに嘘はつけない。

泣かせてばかりいる。ただ、そう思う。

こんな己でも、望んでくれるのなら。認めてくれるのなら。許して、くれるのなら。

だったら言葉は、これ以外に、ない。

「恵已の傍に、居たい」

紅葉ではなく。

巫女姫の血筋でもなく。

君の、傍に。

理由は正直、判らない。とにかく恵已と離れていることがつらくて、それは仕える血筋が傍にいないとか、そんなことではなかった。償っても償い切れない罪と後悔と、そして隠し切れないほどの安堵と歡喜の同居した今の複雑な想いが、その答えなのだろう。

「良かった」

そう呟いて、恵已は泣いたまま笑った。

「おい莫迦犬」

背中では不機嫌な低い声。

忘れていた。天狗というのはどうも、度を越えて身が軽いらしい。ぴくりと耳を動かすと、白い髪の鴉天狗が、恵已の隣に並んで降りた。かん、とひとつ歯の下駄が鳴る。

「恵巳が許しても、僕は許さないからな」

「……すまなかった」

反論もない。乙竹がいなかったら、来なかったらと思うと、ぞつとする。

素直に頭を下げると、乙竹はケツとよろしくない声で吐き捨てた。

「だけど、あんたがいることで恵巳が泣けるなら……笑えるなら、条件つきで大目に見てやる」

「条件？」

秋雨と恵巳の台詞がかぶる。乙竹は口角を上げて、愉快気に笑って見せた。

「僕は里にしばらく戻れなくなったからね。あんたらの集落に厄介になるよ。だから僕を、術式なしで陣を越えられるようにしろ」

それは。

つまり。

「許さぬ」

「あんたに決定権はないよ、なあ恵巳？」

「駄目だ、恵巳、」

ふたりの妖に詰め寄せられた恵巳は、困ったように微笑んだ。

「し、仕方ないんじゃないかな……」

わたしの所為だし。と続けられては、秋雨はなにも言えない。全てを辿れば、それは秋雨の所為だ。

「……ッ」

「この莫迦といた時間が十数年なら、それより長く傍にいればいいんだろ？ これからよろしくな、恵巳」

「は、はい」

「恵巳に触れるな！」

もう二度と、君の傍を離れないと誓う。

了

・漆章（後書き）

おはようございます、こんにちは、こんばんは。
朱風です。

1年越しのこのお話もようやく完結することが出来ました。
最後までお付き合い下さり、本当にありがとうございます。
通学中の電車の中で書いたお話なので、学校がない間の更新が滞ってしまったりして申し訳ありませんでした……orz

色々と要訂正の部分がありますが、とりあえずはこれでこのお話はおしまいです。

感想、批評等ありましたら是非。

それを糧に頑張っていきたいと思います。

少々この時代に詳しい方なら（明記は避けてはいるつもりですが）、数人の人物にモデルがいることに気付かれたかもしれません。

確かに資料を集め、つじつまが合うような物語構成にはしました。が。これはあくまでファンタジーです。虚構です。

妖怪とか出てきますし。これが歴史の真実とかでは決してないです；

では、半端ではありませんが、以上にて。

次のお話でお会い出来ましたら光栄です^^

こんなところまで読んで下さり、本当にありがとうございます！
>
<

20091204

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4841f/>

想 -ソウ-

2010年10月8日13時01分発行